

實用法醫學序



法學之為用者矣夫病之
以吾人之死生係焉不啻
止於此又不可不及司法立
法上名之曰法醫學者則謂
之政之得失國之隆替係

爲和可笑。豈不復重且
大乎。苟欲善其術。非無
傷學理。應用。推。移。三。者
不能也。石川君。免。其。傷。三
者。目。與。心。應。心。與。手。應。研
究。精。微。分。析。毫。毛。左。右。

逢源。頃日。纂著。實用。法
醫。學。校。祝。暨。祝。明。晰。無
遺。以。公。之。世。在。是。世。之。學
醫。者。曰。由。津。梁。而。達。彼
岸。矣。吉。人。曰。上。監。醫。國
君。有。爲。印。刷。免。成。德。余。云。

朱大為國家嘉稱之因
序一言云

明治庚子春一月

茶峯佐藤進權筆書



凡例

- 一本書ハ昨年六月以降予カ濟生學舎ノ講筵ニ用タル備忘録ヲ増補シ傍ラ諸家ノ所見ト予ノ實驗トヲ加エ以テ纂著セシモノナリ
- 一法醫學ハ法例ノ規定ニ準シ説明スルモノナルヲ以テ每編準據スヘキ法律規則ヲ掲ケ而シテ其不備ナルモノハ獨國又ハ澳國ノ法例ヲ引照シテ參考ニ供ス
- 一「メートル尺ハ米」「デシメートル」ハ「厘米」「センチメートル」ハ「仙米」「ミリメートル」ハ「密米」ト記ス
- 一百分算ハ^{フセント}%ノ記號ヲ用ユ例之ハ五%ハ百分中ニ五分又〇三%ハ百分中ニ〇三分ト云フ意ナリ
- 一「グラム」量ハ瓦ト記ス〇五瓦ハ五「デシグラム」〇〇五瓦ハ五「センチグラム」ナルカ如シ

明治三十三年一月

石川清忠識

第一章 損傷及其結果	六六
第二章 成傷器具ノ分類	七二
第一 鈍器或ハ鈍角器具ニ因ル損傷	七三
甲 皮膚剝脫	七四
乙 挫傷	七八
丙 裂創及挫創	八二
丁 神經中樞ノ震盪	八七
戊 臟器ノ破裂	九二
己 骨折及脫臼	九六
第二 銳器ニ因ル損傷	一〇四
第三 刺器ニ因ル損傷	一〇七
第四 銃器ニ因ル損傷(銃創)	一一七
第三章 損傷ノ刑法上分類	一四〇
致命傷	一五六

(一) 損傷ノ直達致命因	一五八
(二) 損傷ノ介達致命因	一六一
(三) 損傷ト致命因ノ關係	同
(四) 自殺他殺及過失殺傷ノ鑑別	一七一
損傷ニ因ル自殺	一七五
血痕検査	一八二
毛髮検査	一九二
第二節 第四章 窒息死論	一九五
器械的窒息	一九八
(一) 縊死	一九九
(二) 絞殺	二〇七
(三) 扼殺	二一一
(四) 溺死	二一四
(五) 口鼻ノ壓閉ニ由ル窒息死	二二八

〔六〕 胸廓ノ壓迫ニ由ル窒息死	二二九
〔七〕 氣道中ニ竄入セル異物ニ因ル窒息死	二三〇
第三節 第五章 餓死論	二三一
第四節 第六章 燒死及凍死論	二三三
〔一〕 燒死	二三四
生前及死後火傷ノ鑑別	二三七
熱射死	二四四
電擊死	二四六
〔二〕 凍死	二五〇
第五節 第七章 中毒死論	二五三
第一 酸類中毒	二七〇
〔一〕 硫酸中毒	同
〔二〕 鹽酸中毒	二七四
〔三〕 硝酸中毒	二七五

〔四〕 慘酸中毒	二七六
〔五〕 石炭酸中毒	二七八
〔六〕 格魯謨酸及其加里鹽中毒	二七九
〔七〕 醋酸中毒	二八〇
第二 腐他亞爾加里類ノ中毒	同
第三 金屬性抱合物ノ中毒	二八三
第四 磷中毒	二八六
第五 砒石中毒	二九一
第六 青酸中毒	二九八
第七 格魯兒酸鹽ノ中毒	三〇三
第八 阿片及莫兒比涅中毒	三〇五
第九 爾他ノ植物質ニ因ル中毒	三二〇
第十 動物質ニ因ル中毒	三一六
第十一 瓦斯類中毒	三一九

(一) 酸化炭素中毒 同

(二) 硫化水素中毒 三二五

(三) 炭酸中毒 三二六

第六節 第八章 殺兒論 同

第一 生產検査 三二八

第二 兒ノ分娩後生活ノ長短 三四二

兒ノ致命原因 三四六

一 分娩前兒ノ死亡 三四七

二 分娩中兒ノ死亡 三四九

〔甲〕 胎盤呼吸ノ過早斷絶ニ因ル死亡 三四九

〔乙〕 兒頭ノ壓迫ニ因ル死亡 三五二

〔丙〕 出血ニ因ル兒ノ死亡 三五六

三 分娩後兒ノ死亡 同

〔甲〕 先天性虛弱 三五九

(乙) 落産 三六〇

〔丙〕 殺兒方法 三六六

第二編 第九章 蕃殖機能論 三七四

第一 男子ノ交媾機能及生殖機能 三七五

第二 女子ノ交媾機能及受胎機能 三七八

第三 半陰陽 三八〇

第三編 第十章 姦淫猥褻論 三八三

第一 強姦 三八七

第二 猥褻所行 四一七

〔一〕 手淫 四一七

〔二〕 人獸相姦 四二四

〔三〕 同性相姦 四二五

第三 有夫姦 四二七

第四編 第十一章 妊娠及分娩論 四二八

第一	妊娠	四三四
第二	分娩	四四一
第三	墮胎	四四五
第五編	第十二章 精神病論	四六六
第一	責任能力	四七九
(甲)	精神薄弱ノ症	四八六
	白癡	
	悖德狂	
	定期性精神病	
(乙)	精神病	四九〇
	癡狂	
	躁狂	
	偏執狂	
	進行性麻痺狂	
	癲癇狂	
	癡癲狂	
	中毒性精神病	
偽狂		四九七
第二	信證能力及審理能力	四九八
第三	處分能力	五〇三
第四	外傷性精神病	五一六

外傷性精神衰弱狀態 機能性精神病

附錄	死體發顯	五一八
(一)	腐敗	五二四
(二)	乾枯 <small>木乃伊 變性</small>	五二八
(三)	屍蠅形成	五二九
	死體異同辨	五三〇

實用法醫學目次 終



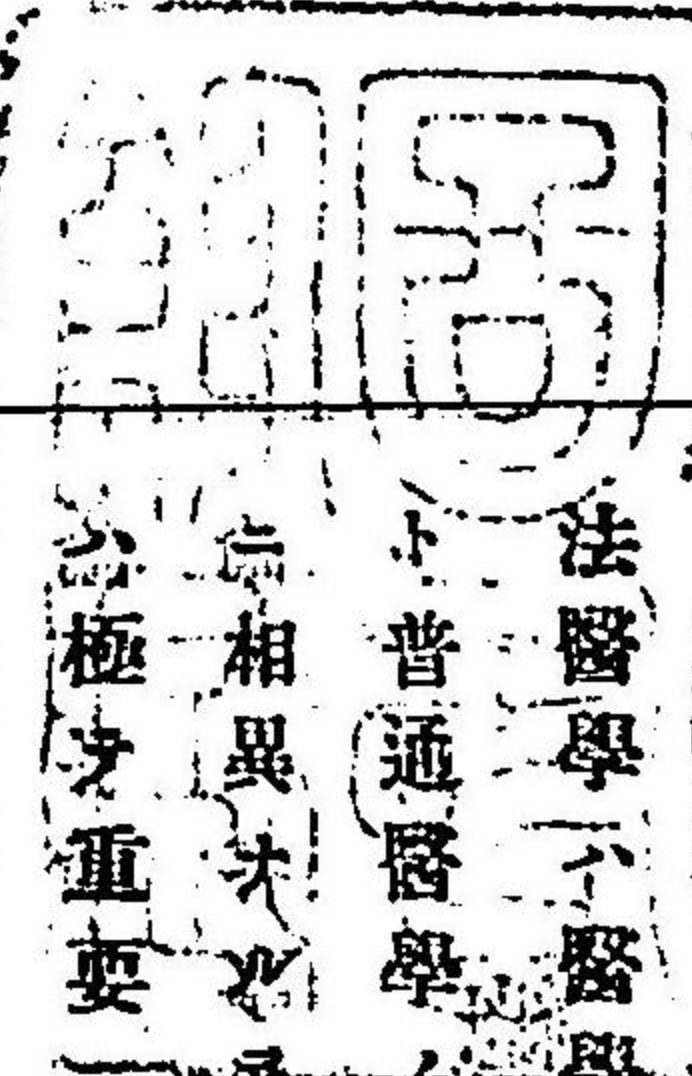
實用ニ法醫學ノ

ニ論ズル命ノ...

長谷川泰校閱

石川清忠

纂著



法醫學ノ醫學ノ智識ヲ司法上及ヒ立法上ニ應用スル處ノ醫學ニノ素ト普通醫學ノ範圍外ニ出タル特種ノ科學ニアラス然レ應用ノ目的既ニ相異ナルヲ以テ療病醫學上ニハ殆クト價值ナキ發見モ法醫學上ニ極テ重要ニシテ特ニ慎重ニ検査スルヲ以テ河ラサシクモアツ或ハ全ク之ニ反スルアルシ是又以テ法醫學ハ普通醫學ニ修シタル者ト雖又特別ニ研脩スル可ク河ラサシクモ其對象ハ普通醫學ニ異ナルヲ以テ凡ソ醫師終極者ハ法律ニ規定セル場合ヲ除外何人ト雖裁判官又命應シテ鑑定ヲ付ス可ク義務有ラ故ニ醫師終極者以テ總テ法醫學ノ

定ヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサルハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十條 裁判所ヨリ證人トシテ證據ヲ陳述スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサルハ亦前條ニ同シ

第八十一條 傳染病流行ノ際又ハ傳染病ノ疑アル船舶入港スルニ當リ醫師其病患ヲ検査シ又ハ消滅スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサルハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

獸類傳染病流行ノ際獸醫此條ノ罪ヲ犯シタルハ一等ヲ減ス

一一 刑事訴訟法 明治二十三年十月六日 法律第九十六號

第三編 犯罪ノ搜查、起訴及豫審

第三章 豫審

第七節 鑑定

第三十五條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及結果ヲ分明ナラシムル

爲メ鑑定ヲ必要ナラズルハ學術職業ニ由リ鑑定スルコトヲ得

ハキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲナサシムベシ

鑑定人爲メ必要ナラズルトキハ死體ノ解剖ヲ命シ又既ニ埋葬シ

タル死體ヲ解剖シ若クハ檢視スル爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ

得

第三十六條 鑑定ニ就テハ第五條第五條第五條第五條第五條

第三十七條 鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ其

宣誓ハ第二百二十二條ノ式ニ從フ

第三十八條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサルト

シキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言

渡スベシ但其決定ニ對シテハ抗告ヲナスコトヲ得此抗告ハ執行ヲ

停止スル效力ヲ有ス

第三百三十九條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定ゼシムルコトヲ得

第四百十條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續結果及ヒ鑑定ヲナシタル時時間ヲ詳記スヘシ

若シ結果ヲ得サルトキハ其推測スル所ヲ記載スヘシ

鑑定人意見ヲ異ニスル者ハ各自鑑定書ヲ作リ又各自ノ意見ヲ一箇ハ鑑定書ニ記載スヘシ

第四百十一條 鑑定人ハ旅費日當及立替金ノ辨濟ヲ要スルヲ得

第四百十八條 現行犯人豫審官十五員豫審官十八員豫審官二十一員

第四百十四條 地方裁判所檢察事及ヒ區裁判所檢察事ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪人現行犯ナルコトヲ知ル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルハ豫審判事ヲ待ツコトヲナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル所分ヲ爲スコトヲ得但罰金及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第四編 公判 豫審費用

第一章 通則

第八十九條 豫審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲナシタル鑑定人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於ル證人ハ供述書又ハ鑑定人ハ鑑定書ハ更ニ其證人鑑定人ヲ呼出サスルハ其證人鑑定人呼出ヲ受ケ出頭セザル限リ又ハ豫審及ヒ公判ニ於ル供述鑑定ヲ比較ス可キトキハ檢察其他訴訟關係人等之請求ニ因リ又ハ裁判長ハ職權ヲ以テ之ヲ明讀シ得ルコトヲ得

第九十條 第九十五條以下ノ規定ハ公判ニ對シテ證人ニ對シテ第九十五條以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニ對シテ亦之ヲ適用ス

第九十五條 證人又ハ鑑定人ノ供述不實ニノ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ヲ該ル可キモノト思料シタルハ其裁判所ニ於テ檢察其他訴訟

認關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ拘引狀ヲ發シ豫
 審判事ニ送致ス可シ
 其證人又ハ鑑定人ヲ供述ハ裁判所書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致
 求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第二百五十八條 控訴ヲ裁判シ付テ以テ地方裁判所第一審ニ關スル
 規定ヲ適用スルハ
 第一審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定人ヲ爲シタル鑑定人ヲ控訴裁
 判所ニ於テ其再度ノ訊問鑑定ヲ必要ナラズモサレトモ之ヲ呼出
 得

刑法附則
 明治十四年十二月十九日布告第十七號同廿二年
 十月八日法律第百二十九號ヲ以テ改正追加

第四章 刑事裁判費用

第四十八條 豫審公判ニ付キ呼出タル證人醫師鑑定人通辯人翻譯

人ニ給與スヘキ日當旅費止宿料及ヒ第五十一條第五十二條ニ記載
 シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

第四十九條 證人ノ日當ハ出頭一度ニ付金五拾錢トス但止宿料ヲ給
 スル場合ニハ此日當ヲ給セズ

第四十九條之醫師鑑定人通辯人翻譯人ノ日當ハ出頭一度ニ付金五拾
 錢乃至金五圓ノ範圍内ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第四十九條之證人醫師鑑定人通辯人翻譯人ノ旅費ハ海陸滿一里毎ニ
 付キ金拾錢トス通路兩線以上アルキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算
 定ス

第四十九條丁前條ニ記載シタル者ノ止宿料ハ滿八里以外ノ地ヨリ來
 リ滞在スルトキハ一日金五拾錢トス

第五十條 證人ノ日當旅費及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非ラザレ
 ハ之ヲ給與セズ

第五十一條 證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第九十條ニ從ヒ

償金ヲ要求スルトキハ旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給與スルコトアルベシ

第五十二條 解剖合密等ノ費用及多數ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日等ノ外別ニ之ヲ給與スベシ

第四 民法證據編 明治二十三年三月二十七日 法律第二十八號

第六條 第一節 人判事ニ考覈スル人ノ職責ハ其職責ノ範圍ニ依リテ

第一 當事者又ハ其代人ノ申述ノ聽取、係爭物併ニ證書外ノ書類ノ

第二 臨檢、取調、取捨、取置、取送、取納、取封、取開、取封、取開

第三 鑑定 一、日當無償ニ當リ、第二十一條、第二十二條ニ依リ

第三節 鑑定

第十一條 法律ニ於テ鑑定ニ依ルベキ旨ヲ定メタル場合判事ハ爭ノ判決ニ付テ特別ノ知識ヲ要スルモノ何時ニテモ或ハ職權ヲ以テ或

當事者ノ申立ニ因リテ自己ノ考覈ヲ助ケシムル爲メ鑑定人ノ報告ヲ爲スベキ旨ヲ命スルコトヲ得

民事訴訟法 明治二十三年三月二十七日 法律第二十九號

第三編 第二審ノ訴訟手續 第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第六節 人證 第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ證言スル義務アリ

第二百九十條 官吏公吏ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘スベキ義務

アル事情ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬廳ノ許可ヲ得タルト
キニ限り證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得
ルコトヲ要ス

此許可ハ證言ガ國家ノ安寧ヲ害スル恐レアルトキニ限り拒ムコト
ヲ得

右許可ハ受裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之ヲ通知スヘシ
第二百九十一條 人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊問ヲ受ク
ヘキ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第二百九十二條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
第一 證人及ヒ當事者ノ表示

第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲナスヘキ事實ヲ表示ス

第三 證人ノ出頭スルキ場所及ヒ日時

第四 出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰スルキ旨

第五 裁判所ノ名稱

第二百九十三條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ヲ證人トシテ
呼出ニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官又ハ隊
長ハ期日ヲ遵守セシムル爲ニ其呼出ヲ受ケタル者ヲ闕勤ヲ許ス可
シ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ且他
期日ヲ定ムルヲ求ラナス義務ハ其旨ニ依リ之ヲ許スル中ニ其期
第三百九十四條 合式ニ呼出サレタレバ證人ニシテ正當ノ理由ナク出
頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其不參因以生
シタル費用ノ賠償及ヒ二拾圓以下ノ罰金ヲ言渡スヘシ
證人ハ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言
渡スルコト又其拘引ヲ命スルコトヲ得
證人ハ右ノ決定ニ對シテハ抗告ヲ行フコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停
止スル效力ヲ有ス
豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行
ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其拘引

ニ付テモ亦同シ
 第二百九十五條 證人其出頭セザリシコトヲ後日ニ正當ノ理由ヲ以テ辯解スルトキハ罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消スヘシ
 證人ノ不參屆及決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
 第二百九十六條 皇族證人ナル者ハ受命判事又ハ受託判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲スルニ當リ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス又皇族ノ職由ニ出帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス
 第二百九十七條 左ニ掲クル者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得
 第一 原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族タル者ニ付テハ
 第二 婚姻ノ解除シタル者トキモ亦同シ
 第三 皇族ノ職由ニ出帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス

第二 前原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者
 第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇入トシテ之ニ仕スル者
 第四 裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ム權利ヲ以テ告知シ得
 第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得
 第一 官吏公吏又ハ官吏公吏トシテ者カ其職務上默秘スヘキ義務アル事情ニ關スルトキ
 第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、神職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ヲ爲メ委託ヲ受ケタルニ因リテ知リタル事實ニシテ默秘スヘキ事情ニ關スルトキ
 第三 問ニ付テハ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者カ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ訴追ヲ招ク恐アルトキ
 第四 問ニ付テハ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財產權上ノ損害ヲ生シムヘキトシテ其損害ノ賠償ニ關スル事ニ關シ
 第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非サレハ答辯ス

第二百九十九條 證人ハ第二百九十七條第一號及ヒ第二百九十八條
 第四號ニ於テ左ノ事項ニ付テ證言ヲ拒ムコトヲ得ス
 第一ニ家族ノ出產婚姻又ハ死亡ニ關スル事
 第二ニ家族ノ關係ニ因リ生スル財産事件ニ關スル事實ニ關スル事
 第三ニ證人ニシテ立會ヒタル場合ニ於ケル權利行為ノ成立及ヒ旨
 趣旨ニ關スル事
 第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係争ノ權利關係ニ
 關シ爲シタル行為ニ關スル事
 前後第百號第二號ニ掲ゲタル者其默秘スルキ義務ヲ免除セラレタ
 ルトキハ證言ヲ拒ムコトヲ得ス
 第三百條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ
 又ハ期日ニ於テ其拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ疏明スヘシ
 期日前ニ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スル義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作リタ
 ルトキハ之ヲ當時者ニ通知スヘシ
 第三百一條 拒絕ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シタル後
 決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲
 シタル拒絕ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ス
 原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シ
 テ決定ヲナス
 右決定ニ對シテハ即時抗告スルコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル
 効力ヲ有ス
 第三百二條 原因ヲ開示セスシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ
 棄却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルトキハ申立ヲ要セスシテ決定ヲ
 以テ證人ニ對シ其拒絕ニ因リテ生シタル費用ノ賠償及ヒ四十圓以
 下ノ罰金ヲ言渡ス
 證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告ヲナスコトヲ得

此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス
豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行
ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第三百三條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人トノ間ニ第二
百九十七條第一號乃至第三號ノ關係アルトキハ其證人ヲ忌避スル
コトヲ得

第三百四條 忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之ヲ爲スヘシ此時限後ハ
其前ニ忌避ノ原因ヲ主張スルヲ得サリシコトヲ疏明スルトキニ限
リ其證人ヲ忌避スルコトヲ得

忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明スヘシ
第三百五條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲
スコトヲ得

忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲナスコトヲ得ス

忌避ノ原因ナシト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ
得

第三百六條 各證人ニハ其携帶スヘキ呼出狀其他適當ノ方法ヲ以テ
人違ナラサルコトヲ判明ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲナサ
シムヘシ

然レトモ宣誓ハ特別ノ原因アルトキ殊ニ之ヲナサシムヘキヤ否ニ
付キ疑ノ存スルトキハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百七條 證人ハ訊問前ニ宣誓ヲナス可キ場合ニ於テハ良心ニ從
ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣
フヘシ

又訊問後ニ宣誓ヲナスヘキ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何
事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フヘシ

第三百八條 判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ偽證ノ罰
ヲ諭示スヘシ

第三百九條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百條乃至第三百二條ノ規定ヲ適用ス

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメスシテ參考ノ爲メ之ヲ訊問スルコトヲ得

第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ達セサルモノ

第二 宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必要ナル精神上ノ發達ノ缺クル者

第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者

第四 第二百九十七條及ヒ第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ規定ニ依リ證言ヲ拒絕スル權利アリテ之ヲ行使セサル者但第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ場合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ關スル事項ニ付キ證言ヲ爲ス可キコトヲ申立ラレタルトキニ限ル

第五 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

第三百十一條 證人訊問ハ後ニ訊問ス可キ證人ノ在ラサル場所ニ於

テ各別ニ之ヲ爲ス

證人ノ供述互ニ齟齬シタルトキハ之ヲ對質セシムルコトヲ得

第三百十二條 證人訊問ハ證人ニ其氏名、年齢、身分、職業及ヒ住居ヲ問フヲ以テ始マル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於テ證言ノ信用ニ關スル事情殊ニ當事者トノ關係ニ付テノ問ヲ爲スヘシ

第三百十三條 證人ニハ其訊問事項ニ付キ知リタルモノヲ牽連シテ供述セシムヘシ

證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知リ得タル原因ヲ穿鑿スル爲メ必要ナル場合ニ於テハ尙ホ他ノ問ヲ發スヘシ

第三百十四條 證人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用キルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用キルコトヲ得

第三百十五條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ證人ニ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ證人ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得ス然レトモ當事者ハ

證人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲ニ其必要ナリトスル間ヲ發センコトヲ裁判長ニ申立ツルコトヲ得

發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス

第三百十六條 調書ニハ證人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ

又ハ宣誓セシテ訊問ヲ受ケタルヤヲ記載スヘシ

第三百十七條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ證人ノ再訊問ヲ命スル

コトヲ得

第一 證人訊問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルトキ

第二 證人訊問ノ完全ナラザルトキ

第三 證人ノ供述カ明白ナラス又ハ兩義ニ涉ルトキ

第四 證人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルトキ

第五 此他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルトキ

第三百十八條 左ノ場合ニ於テ證人ニ依レル證據調ハ受裁判所ノ部

員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第一 眞實ヲ探知スル爲メ現場ニ就キ證人ヲ訊問スルノ必要ナル

トキ

第二 證人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受裁判所ニ出頭スル能ハサル

トキ

第三 訴人カ受裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在リテ其裁判所ニ

出頭スルニ付キ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルトキ

第三百十九條 第二百九十四條第二百九十五條第三百二條及ヒ第三

百九條ニ掲ケタル證人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受

託判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證言ヲ

拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答フ

ルコトヲ拒ムトキハ此拒絕ノ當否ニ付キ裁判ヲ爲ス權ハ受訴裁判

所ニ屬ス

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發ス

ルコトヲ否ムトキハ原告若クハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ
裁判ヲ求ムルコトヲ得

證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ命スルコ
トヲ得

第三百二十條 證人ヲ申出テタル原告若クハ被告ハ其訊問ノ開始マ
テハ此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得其後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルト
キニ限り之ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百二十一條 各證人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲ニ旅行ヲ要ス
ルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムルコトヲ得
舉證者ノ豫納シタル金額不足スルトキハ職權ヲ以テ其不足額ヲ取
立ツヘシ

第七節 鑑定

第三百二十二條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケザ

ル限リハ人證ニ付テノ規定ヲ準用ス

第三百二十三條 鑑定ノ申出ハ鑑定スヘキ事項ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三百二十四條 立會フ可キ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定ハ受訴
裁判所之ヲ爲ス其裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名マテニ制限シ又ハ
何時ニテモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ任命スルコトヲ
得

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問ヲ受クルニ適當ナル者ヲ指名スヘキ旨
ヲ當事者ニ催告スルコトヲ得

當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スコトヲ合意シタルトキハ裁判所
ハ其合意ニ從フヘシ然レトモ裁判所ハ當事者ノ爲スヘキ選定ヲ一
定ノ員數ニ制限スルコトヲ得

第三百二十五條 外國ノ書類又ハ產物ノ審査ヲ要スル場合ニ於テ必
要ナル能力ヲ有スル本邦人ノ在ラサルトキハ裁判所ハ外國人ヲ鑑
定人ニ任命スルコトヲ得

第三百二十六條 左ニ掲クル者鑑定ヲ命セラレタルトキハ之ヲ爲ス義務アリ

第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲ニ公ニ任命セラレタル者

第二 鑑定ヲナスニ必要ナル學術、技藝、若クハ職業ニ常ニ従事スル者又ハ學術、技藝、若クハ職業ニ従事スル爲ニ公ニ任命セラレ若クハ授權セラレタル者

右ノ外鑑定ヲ爲スヘキ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘタル者ハ鑑定人タル義務ナキトキト雖モ鑑定ヲナス義務アリ

第三百二十七條 鑑定人ハ證人カ證言ヲ拒ムコトヲ得ルト同一ノ原因ニ依リ鑑定ヲ拒ム權利アリ

官吏公吏ハ其所屬廳ニ於テ異義アルトキハ之ヲ鑑定人トシテ訊問スルコトヲ得ス

第三百二十八條 鑑定ヲ爲ス義務アル鑑定人出頭セス又ハ鑑定ヲ拒ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ此カ爲ニ生シタル費用ノ賠償及ヒ

罰金ヲ言渡スヘシ但其鑑定人ヲ勾引スルコトヲ得ス

第三百二十九條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ公平且誠實ニ履行スヘキ旨ノ誓ヲ宣フヘシ

第三百三十條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸件ヲ定ムヘシ

第一 鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシムヘキヤ

第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問スヘキ場合ニ於テ各意見カ異ナルトキハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシムヘキヤ又ハ各別ニ之ヲ作ラシムヘキヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ説明セシムヘキヤ

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルトキハ同一又ハ他ノ鑑定人ヲシテ再ヒ鑑定ヲナサシムヘキヤ

第三百三十一條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルコトヲ得此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第

三百二十四條及ヒ第三百三十條第一號並ニ第二號ノ規定ニ依リ受
訴裁判所ニ屬スル權ヲ有ス

第三百三十二條 鑑定人ハ日當旅費及ヒ立替金ノ辨濟ヲ請求スルコ
トヲ得此場合ニ於テハ第三百二十一條ノ規定ヲ準用ス

第三百三十三條 特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ事情ニシテ其
實驗アル者ノ訊問ニ因リテ確定スヘキトキハ人證ニ付テノ規定ヲ
適用ス

第九節 檢證

第三百五十八條 受訴裁判所ハ檢證ヲナスニ際シ鑑定人ノ立會ヲ命
スルコトヲ得

受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ區裁
判所ニ囑託スルコトヲ得

六 民事訴訟費用法

明治二十三年八月十五日
法律第六十四號

民事訴訟費用法

第一條 民事訴訟法ノ規定ニ於ケル訴訟費用ハ以下數條ノ規定ニ從
ヒ之ヲ算定ス

第二條 訴訟其他總テ書類ノ書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金
貳錢五厘トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

第三條 翻譯料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金五拾錢トス但半枚ニ
滿タサルモノモ亦同シ

第十條 證人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給ス
ル場合ニ於テハ此日當ヲ給セス

第十一條 鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五拾錢乃至五
圓ノ範圍内ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十二條 當事者ノ滞在費ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滞在中スルトキ
ハ一日金貳拾五錢トシ證人鑑定人及ヒ通事ノ滞在費ハ一日金五拾
錢トス

第十三條 當事者、證人、鑑定人、及ヒ通事ノ旅費ハ海陸滿一里ニ付キ金十錢トス

通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

外國ニ在ル當事者ノ旅費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十五條 本法ニ定メサル必要ノ旅費ハ其實費ニ依ル

第二 検査物體

法醫ノ検査スヘキモノヲ大別シテ三種トナス

〔一〕生體検査 ハ生理的及ビ病理的状態ノ現存或ハ缺損ト此状態ノ犯罪行為上ニ於ケル關係ヲ確定スルト其法律規定上ニ於ケル結果ノ如何ヲ査定スルノ目的ナリ而シテ之ヲ審査スルニハ固トヨリ醫學上ノ原則ニ従ハサル可ラズト雖法醫學的検査ニ在リテハ純乎タル病床上ノ検査ニ於テモ價値ナキカ或ハ唯附帶ノ條件ト見ルヘキモノモ大ニ重要ノ疑問タルモノアリ

生體検査ニ付テ審査スルモノハ(一)年。齡。ノ。關。係。(結。婚。ノ。當。否。兒。童。ノ。處。分。ノ。能。力。等)(二)生。殖。器。ノ。狀。態。(生。殖。機。能。半。陰。陽。處。女。妊。娠。分。娩)(三)各。種。ノ。疾。患。殊。ニ。外。科。的。疾。患。負。傷。者。ノ。健。康。障。害。癆。瘵。疾。勞。働。不。能。及。ヒ。營。業。不。能。(四)精。神。病。責。任。能。力。處。分。ノ。能。力。(五)詐。病。之。レ。ナリ

〔二〕死體検査 ハ諸般ノ死亡種類即チ正死ナルカ將タ變死ナルカ變死ナリトセハ其死因ノ如何ヲ確定スルノ目的ニシテ死體ノ外表検査及ヒ解剖検査之レナリ通例警察官ニ於テ變死人アルコトヲ知リタルトキハ相當醫師ノ立會ヲ求メ現場ニ臨檢シテ其死體ノ外表検査及ヒ諸般ノ調査ヲ爲シ犯罪行為ニ關係ナシト認ムルトキハ其死體ヲ相當人ニ引渡シ埋葬セシムルノ手續ナリ然レ立會醫師ノ陳述ニ據ルカ又ハ其他ノ調査ニ依テ死因ニ犯罪行為ノ疑アルカ又ハ事件重大ナリト認ムルトキハ地方裁判所ニ急報シテ判事檢事ノ臨檢ヲ請求シ之ヲ司法官ニ引繼クヲ例規トス
抑モ死體ノ外表検査ヲナシ其死ノ原因ヲ確定スルニハ直接ニ之ヲ目

撃シ得ル者例令ハ外表ニ在ル貴重器官ノ損傷ノ外ハ唯其原因ヲ推測
 スルニ過キサルヲ以テ縱令ヒ犯罪行為ノ疑ナシト考フルモ死因ノ明
 瞭ナラサル者ハ之ヲ解剖シ其死因ヲ分明ナラシメ而シテ後始メテ之ヲ
 確言シ得ヘキノミ之レ即チ行政警察的解剖ナリ然レ我邦ニ在リテハ
 未タ之ヲ規定スルモノナク僅カニ明治十年二月二十一日大政官布告
 第二十二號ノ一アルノミ曰變死ニ係ル屍ヲ警察官吏検査スルトキニ
 於テ解剖ヲ行ハサレハ其致命ノ原由ヲ確知シ難キ旨醫師申立ルトキ
 ハ検査事検査事派出ナキ地方ハ其地方長官ノ許可ヲ受ケ其部分ヲ解剖檢
 査セシムルコトヲ得下アリ故ニ醫師ニ於テ死因不明ノ旨ヲ陳述セハ
 検査ノ許可ヲ求メテ其有疑部分ヲ解剖シ得ルノ制規アリト雖警察官
 モ亦検査モ犯罪行為ニ關係ナシト認ルトキハ解剖セシメサルノ慣習
 ナリ又立會醫師モ生前ノ經歷及ヒ致命時ノ症狀等毫モ明ラサル
 屍ノ外表検査ヲ爲シ固有ノ死體發見ナキニ拘ラス腦卒中又ハ心臓破
 裂等ノ斷定ヲナスモノアリ實ニ其眼力ノ透徹驚歎ノ外ナキナリ如此

慣例ナリヲ以テ我邦ニ在リテハ未タ行政警察的ノ解剖ヲ行フヲ得ス
 蓋シ法規ニ缺點ナリ

死體ノ検査方法ハ普通ノ病理解剖式ニ大差ナシト雖固シ其目的ノ相
 異タルヲ以テ注意點モ亦自ラ相異ナラサルヲ得ス本邦ニ在リテハ未
 タ既定ニ制規未ダ故ニ其方式ヲ論スルニ方以テハ例ヲ外國ニ籍録サ
 ズ亦得ズ仍テ普國法醫剖檢規定ヲ揭示以テ參考ニ供ス左ノ如クニ
 法醫ノ法律上剖檢規則
 第一章 通則
 第一條 凡ハ死體ヲ法律上検査剖檢ヲ爲スルハ裁判官立會ノ上三名
 以テ醫師(内一名ハ法醫一名ハ外科法醫)又ハ之ヲ行ハシムヘシ
 剖檢者ハ法律上鑑定人タル義務ヲ有ス
 法醫又ハ其代理者ハ剖檢法執行方法以テ疑議アルハ其代理者見込ニ關
 連ス其意見ヲ異ハテ點ヲ検査記録ニ記載スルハ其代理者見込ニ關

第二條 法醫及外科法醫は法律上規定セル場合ノ外他醫ヲシテ代理
 せしむ可ラス其代理者ニ可成法醫試験ヲ經タル醫師ヲ撰ブ可シ
 第三條 剖檢法執行ハ死後二十四時間ヲ經ルニ非サレハ行ハサルヲ
 例規ニ依ル但死體ノ外表ヲミテ検査スルハ此限リニアラス
 第四條 死體既ニ腐敗スルモ之ハ爲メ剖檢法執行ヲ正メ可ラス又法
 醫モ之ヲ拒ムヲ得ス之レ死體ノ腐敗高度ナルモ尙ホ骨ノ異形及ヒ損
 傷ハ發見シ得ヘク且死體ノ異同辨別ニ付テ有疑ノ或事項例之ハ毛髮
 ノ色澤性質及ヒ肢節ノ缺損等ハ檢定シ得ヘク竄入セル異物妊娠又ハ
 中毒ノ如キハ發見シ得ルヲ以テナリ故ニ醫師ハ如此事項ヲ調査スル
 爲メ埋葬セサル死體ヲ發掘スル場合ハ死後經過セル時日ヲ如何ニ關セ
 ズ之ニ同意スルニ依リテ檢定セザルニ可キ
 第五條 法醫ハ其職務ヲ解剖以準備ホシテ常ニ左列解剖器械ヲ能
 ク整理シ置クベシ
 柄刃四乃至六挺内二挺ハ剃刀一挺強軟骨刀二挺鑷子二挺鉤二挺刀二挺内一挺
 小直及二挺ハ太腹及剃刀一挺強軟骨刀二挺鑷子二挺鉤二挺刀二挺内一挺

一葉鈍ニ他葉ノ尖銳ナルモノ一挺ハ小ニシテ腸剪一挺吹管一個廻檢ヲ探子
 一葉ハ尖端ニ小節ヲ有シ他葉ハ尖銳ナルモノ一挺ハ小ニシテ腸剪一挺吹管一個廻檢ヲ探子
 三挺大鋸鑿及槌各一個骨剪一挺彎曲縫合針種大小各兩脚器一個米突兒尺一個仙
 一小二分米突兒硝子方仙米二分ツモノ秤一磅迄ノル下ハ一個恰好
 密モニ分米突兒硝子方仙米二分ツモノ秤一磅迄ノル下ハ一個恰好
 青色及ヒ赤色試験紙
 有刃器具ハ充分銳利ナラサル可ラス又剖檢者ハ三個ノ物體連斯少
 ナクモ四百倍ノ廓大度ヲ有スル顯微鏡并ニ標本製造ニ要スル器具硝
 子皿及ヒ反應藥ヲ備フヘシ
 第六條 剖檢ヲナスニハカメヲ廣ク且鮮明ニシテ死體ニ適當ニ位置
 ヲ與フヘク且障害物ナキ場所ヲ撰ムヘシ人工光輝ヲ以テ剖檢ヲナス
 ハ毫モ遷延ス可ラサル場合ニ限ルモノトス此場合ハ検査記録ニ其理
 由ヲ明記シ置クヘシ第二十七條參考
 第七條 死體ノ凍結セルモノハ之ヲ温處ニ移シ其自ラ融解スルヲ待
 テ剖檢スヘシ温湯又ハ他ノ温緩物ヲ用テ其融解ヲ迅速ナラシム可ラ
 ス

第八條 總テ死體ヲ移動スルトキ殊ニ他ニ運搬スル際ハ力メテ注意シ死體ノ何ノ部分ニモ強キ壓迫ヲ加ズルコトナク且大ナル腔洞ノ地平位ヲ著シク變化セサルヲ要ス

第一章 剖檢方式

第九條 剖檢者ハ死體ノ發見ヲ登記スルニ方又死體検査ヲ行フ裁判上ノ目的ニ普テク注意シ苟クモ此目的ニ利アルモノハ總テ精細周到ニ検査スベシ
都テ重要ノ發見ハ之ヲ検査記録ニ登記スル前以テ裁判官ニ示スル
第十條 剖檢者必要ト思考スルトキハ剖檢前遲怠ナク死體ヲ發見セシ場處之ヲ發見セシ時ノ位置ヲ臨檢スルコト及ヒ發見ノ當時死體ノ着セシ衣服ノ検査ヲ爲スコトヲ裁判官ニ請求スベキ義務アリ
但右ノ諸件ハ裁判官ノ所檢ニ據テ通常充分ナルトスルニ限リ
剖檢者ハ剖檢及ヒ次テ下スベキ鑑定上重要ニシテ且既ニ稍々調査シ得

タル事項ノ開示ヲ裁判官ニ請求スル義務アリ
第十一條 有疑ハ發見縱令ハ血液ナルカ將タ單ニ有色(血色素含有)ノ液ナルカヲ迅速且確實ニ断定スベキ場合ニ於ルカ如ク顯微鏡検査ヲ要スルモノハ解剖ノ際直チニ執行スベシ
若シ直チニ検査スルヲ得サル事情アルカ將タ死體組織ヲ如キ複雑ナル顯微鏡検査ニシテ即時行フヲ得サルトキハ其部分ヲ正式ニ保存シ後日可成速カニ検査スベシ
此検査ノ報告書ニハ其検査ヲ行フタリ日時ヲ詳細ニ記入スヘシ

第十二條 剖檢法ヲ大別シテ二トナス

- 甲、外表検査(檢視)
- 乙、内部検査(解剖)

第十三條 外表検査ノ際ハ全身及ヒ各部分表面ノ性質ヲ検査スベシ
全身外表ノ検査ニ付テ可成調査登録スベキ項左ノ如シ

一、年齢、性、大小、體格、榮養狀態、或疾病痕跡ノ有無、縱令ハ足潰瘍、特種ノ

異常假令ハ痣、癍痕、跡刺、指趾ノ過數或ハ不足

(一)死ノ徵候及ヒ既ニ發スル腐敗ノ徵候

死體ニ附着セル血液糞便汚物等ヲ洗ヒ去ル後右ノ調査ヲナシ次テ死體強直ノ存否、全身ノ皮色、腐敗ニ原由スル各部ノ皮色及ヒ變色ノ種類、程度、死斑ノ色澤、位置及ヒ大小ヲ調査シ而シテ其死斑ハ溢血トノ誤認ヲ防ク爲メ切割シテ詳カニ検査シ且之ヲ記録スヘシ

各部分ノ検査ニ付テ調査登錄スヘキ項左ノ如シ

(一)姓名不詳ノ死體ニ付キテハ頭髮、鬚髯ノ色澤及ヒ其他ノ性質并ニ眼色

(二)頭首ノ諸孔竅ニ異物ノ存否、齒列ノ性質及ヒ舌ノ性質、位置

(三)次テ頸部、胸部、腹部、背部、肛門、外陰部及ヒ四肢ヲ検査スヘシ

若シ損傷アルヲ發見セハ體ノ固定點ヲ根據トシテ其形狀、位置及ヒ方向ヲ記シ其長幅、兩徑、米突尺ヲ以テ計測スヘシ但シ外表検査合際ハ探子ヲ用キテ連合ヲ分離スルヲ避クヘシ之レ内部検査ノ際損傷ノ深

部如何ヲ知ル得ニキヲ以テナリ然レ若シ探子ノ使用ヲ必要ト思考ス

ルトキハ能ク注意シテ之ヲ用キ而シテ其理由ハ特ニ検査記録ニ登錄ス

ル他創傷ニ付テハ創縁及ヒ周圍ノ性質ヲ調査シ此調査及ヒ記録ヲ終

ル後其原位置ニ於テ之ヲ離開シ創縁ノ内部及ヒ創底ノ性質ヲ検査ス

死體ノ損傷中其發生ノ原因明ラニ死因ト關係ナキモノハ例之ニ救急

法施行ノ痕跡動物ノ抓破等以テ其發見ヲ概括記載シテ可ナリ

第十四條 内部検査ニシテ三大腔即チ頭蓋腔、胸腔、腹腔ヲ開檢スルニ

脊椎腔又ハ或關節腔ニ重要ノ發見アルヘシト推測スル場合ハ總之

ヲ開檢スヘシ

致死ノ原因上疑議ナラズキモノ主要ノ變化ヲ示スト推測スル體腔ヲ

先キニ開檢スヘシ通常ハ先ニ頭蓋腔次ニ胸腔最終ニ腹腔ヲ開檢スル

以上各腔ノ開檢ニ方テハ先ツ其臟器ノ位置ヲ檢シ次ニ其表面ノ色澤性質ヲ檢シ次ニ不當含有物殊ニ異物瓦斯液質及ヒ凝塊等固有無ヲ檢シ其液質凝塊ハ容量又ハ重量ヲ測定シ然後各器ノ外面及ヒ内部ヲ檢査スヘシ

第十五條ハ頭蓋腔ヲ開檢スルニ耳ヨリ頭蓋腔中央ヲ離テ他耳ニ達スル皮切ヲカシ頭皮ヲ前後ニ剝離スルヲ但損傷ヲ防ト爾後可成切割セラル様之ヲ避ク可キヲ以テ本式ヲ變更スルニ此處ニテハ是ニ於テ先ツ頭蓋腔軟部兩骨ノ表面ニ性質同ク檢査シ次ニ頭蓋冠部ヲ環狀ニ鋸斷シテ之ヲ除去シ而シテ鋸斷面并ニ頭蓋冠ノ内面及ヒ其他ノ性質ヲ檢査スヘシ

次ニ硬腦膜外外面ヲ檢シ上縦竇ヲ切開シ其含有物ヲ檢査シ次ニ先ツ側ノ硬腦膜ヲ切離シ之ヲ翻轉シテ其内面并ニ軟腦膜露出部ノ性質ヲ檢査スヘシ

今ヤ他側ニ於テ同ノ檢査ヲ了ラ後全腦ヲ巧ニ取出シ直ニ頭蓋底

ニ不當含有物アルヤ否キト底部并ニ側部ニ於ル硬腦膜及ヒ軟腦膜ノ性質ヲ檢シ尙ホ同時ニ大方ル動脈ノ關係如何ヲ檢定スヘシ

橫竇及ヒ其他ノ靜脈竇モ要ニ隨ヒ切開シテ其含有物ヲ檢査スル後全腦ノ大小形狀ヲ觀察シ然後秩然叙列正シキ切割ヲナシテ腦ノ各部ヲ檢査ス即チ大腦各半球大神經節(視神經床及ヒ線狀體)四疊體小腦(フロル氏橋延髓)ノ色澤血管ノ盈虛硬軟及ヒ構造ヲ檢定スルニ此處ニテ

此外上脈絡板ノ組織及血管ノ狀況ヲ常ニ檢査シ置クヘシ

諸腦室ノ廣狹及ヒ含有物并ニ諸脈絡叢ノ性質及ヒ盈虛血管内凝血ノ存否各各檢査ス際毎ニ注意スルニ此處ニテ

次ニ頭蓋底ノ硬腦膜ヲ除去シ底部及ヒ側部ノ骨質ヲ檢シ以テ頭蓋腔ノ檢査ヲ終結ス

第十六條ニ若シ顔面内部ノ切開耳下腺及ヒ外聽道ヲ檢査スル必要トスル場合ハ此部ノ皮膚ヲ傷ケサル爲メ頭蓋腔皮膚切ヲ耳後部

此部ノ検査ニ付キエハ特ニ大ナル動脈ノ状態如何ニ注意スヘシ
 第十七條ハ脊柱ハ後方ヨリ開檢スルヲ常規トス第二十四條先ツ棘狀突
 起ノ直上ニ沿テ皮膚及ヒ皮下脂肪ヲ切開シ此突起及ヒ弓部兩側ノ
 筋ヲ剝離スル此際溢血断裂及ヒ其他ノ變化特ニ骨折ノ存否ハ深ク
 注意ヲ要スルハ此際溢血断裂及ヒ其他ノ變化特ニ骨折ノ存否ハ深ク
 是ニ於テ鑿又ハ脊椎鋸ヲ以テ各椎ノ棘狀突起ヲ連接弓部ヨリ縦徑ニ
 切斷シテ之ヲ除去シ露出セル硬膜ノ外面ヲ檢スル後充分注意シテ之
 ヲ縦徑ニ切開シ直チニ不當ノ含有物即チ液質又ハ溢血ノ存否ト軟膜
 後部ノ色澤状態及ヒ其他ノ性質ヲ檢シ而シテ後指頭ヲ以テ輕ク脊髓ヲ
 按シ以テ其硬軟ヲ檢定スヘシ
 今ヤ各側ニ各一縦切ヲナシテ神經根ヲ切離スル後脊椎ノ下端ヲ手ニ
 取リ穩カニ之ヲ引出シ其前面ノ連合ヲ順次切離シツテ終ニ其上端ヲ
 後頭大圓孔ヨリ拔去ルベシ
 此手術ヲ爲ス際ハ特ニ注意シ聊カモ脊椎ヲ壓迫シ又ハ屈折ス可ク

既ニ脊髓ヲ取出ストキハ先ツ前面ノ軟膜ノ性質ヲ檢シ次ニ脊髓外面
 ノ大小色澤ヲ檢シ終リニ菲薄銳及ノ刀ヲ取リ多數ノ横切ヲ施シ以テ
 内部殊ニ白索及ヒ灰白質ノ性状ヲ調査シテ之ヲ脊椎體ヨリ硬膜ヲ剝
 離シ骨又ハ椎間軟骨ニ溢血損傷又ハ變化ノ有無ヲ檢スベシ
 第十八條 頸部胸腔及ヒ腹腔ヲ開檢スルニ於テ常ニ願下ニ始メ臍ヲ左
 方ニ避テ耻骨丘ニ達スル單一ノ直皮切ヲ以テス而シテ通常此皮切ハ下
 腹部ニ於テテ直チニ腹腔ヲ切開スルモ其臟器ノ損傷ヲ避クル爲メ先
 ツ腹膜ニ一ノ小切孔ヲ設ケ此際瓦斯或ハ液質ノ流出セサルヤ否ヤニ
 注意シ先ツ其切孔ニ其指ヲ挿入シ次テ更ニ一指ヲ挿入シ兩指ヲ以テ
 腹壁ヲ内臓ヨリ提舉シ此兩指ノ間ヨリ腹膜ヲ切開スベシ腹壁ヲ切開
 セハ直チニ露出セル内臓ノ位置色澤及ヒ其他ノ性質ト不當含有物ノ
 存否ヲ檢シ次テ手ヲ挿入シテ横隔膜ノ位置ヲ測定スベシ
 腹内各臟器ノ検査ヲ直チニ施行スルハ主要ノ死因腹腔内ニアラズ
 ト豫想スル場合ニ限リ第十四條通常ハ胸腔ノ検査ヲ終ル後之ニ移ルモ

ノトス
 第十九條 胸腔ヲ開檢スルニハ先ツ前胸壁ノ軟部ヲ剝離シテ肋骨ト
 肋骨ノ接際ヲ過クルニ至ルベシ
 次ニ肋骨ト肋骨ノ接際ヲ距ルニ二三密米内方ヨリ強固ノ刀ヲ以テ肋
 軟骨ヲ切斷スベシ此際刀尖ヲ以テ肺又ハ心ヲ損傷スル勿クシ
 肋軟骨若シ化石セハ其肋骨接際ノ稍ヤ外方ヨリ鋸若クハ骨剪ヲ以テ
 切斷スルヲ良トス
 是ニ於テ鎖骨ト胸骨把柄ノ關節ハ鉛直ノ方向ニ半月形切ヲナシテ離
 開シ第一肋骨ヲ連合ハ軟骨ノ化石セルト否トヲ問ハズ刀又ハ骨剪ヲ
 以テ切離シ此際注意シテ其直後ニ位スル血管ノ損傷ヲ避クベシ
 前胸壁兩切線下端ノ間ニ附着セル横隔膜ノ部分ハ季助骨及ヒ劍尖突
 起ノ後面ニ密接シテ切離シ胸骨ヲ上方ニ翻轉シ大ニ注意シテ心囊及
 ヒ大血管ノ損傷ヲ避ケツ、縱隔膜ヲ切離スベシ
 既ニ胸骨ヲ除去セハ直チニ胸膜腔ノ狀態殊ニ不當含有物アリテ其性

質及ヒ多少ト露出肺部ノ擴張狀態及ヒ外觀如何ヲ檢查スベシ若シ胸
 骨ヲ除去スル際血管ノ損傷ヲ招クトキハ血液胸膜腔ニ流入シテ此檢
 定ノ妨害タルヲ以テ速カニ結紮スルカ又ハ海綿ヲ以テ壓止スベシ
 縱隔膜ノ狀態殊ニ其内ニ在ル胸腺ノ關係及ヒ心囊外ニ在ル大血管此際
 切開セズノ外觀モ同時ニ檢查スベシ
 次テ心囊ヲ切開シ之ヲ檢スル後心臓ヲ檢查ニ進ム即チ心臓ニハ未タ
 一切ヲモナサズ其本然ノ位置ニ在ル際冠狀血管及ヒ各部房及室ノ大
 小盈虛色澤硬軟屍直ヲ檢シ然後各房各室ヲ各別ニ切開シテ各部分
 物ノ多少凝泣狀態及ヒ外觀ヲ檢定シ且房ヨリニ指ヲ挿入シテ房室口
 ノ廣狹ヲ檢シ次ニ心臓ヲ切離摘出シテ先ツ動脈切口ヨリ水ヲ灌漑シテ
 動脈口ノ閉鎖如何ヲ試シ而テ後切開シテ之ヲ檢シ終リニ心筋ノ色相
 性質ヲ檢查スベシ若シ筋質ヲ變化例之ハ其脂肪變性廣キ部分ニ亘ル
 ト推測スルトキハ毎ニ顯微鏡檢查ヲ施行スベシ
 胸腔内ノ大血管ハ心臓ト共ニ檢查スベシ然レ下行大動脈ノミハ肺ノ

ル爲之カ切開ヲ行フトキハ未ダ此血管ノ自然位ヲ變セサル際其檢
 査ヲ行フヘシ。取出スル時ハ其位置ヲ注意シテ取出スル。終
 終ニ頸椎及ヒ深層頸筋ノ狀況ニ注意スヘシ。取出スル時ハ
 第二十條腹腔及ヒ其臟器ノ檢査ハ條參照常ニ一臟器ヲ取出スモ
 其他臟器ノ連合ヲ詳檢スルニ障害ナキ順序ヲ以テス。即チ肝臟
 ヲ取出ス前十二指腸及ヒ胆管ノ檢査ヲ爲シカ如キ之レヲ依テ通常
 左ノ順序ヲ良トス

〔一〕網膜 〔二〕脾 〔三〕腎及副腎 〔四〕膀胱 〔五〕生殖器男子ハ攝護腺精囊睪
 丸陰莖及尿道女子ハ卵巢喇叭管子宮及腔 〔六〕直腸 〔七〕十二指腸及胃
 〔八〕胆管 〔九〕肝 〔十〕脾 〔十一〕腸間膜 〔十二〕小腸 〔十三〕大腸 〔十四〕脊柱
 以前ニ在リ血管及ヒ其血液含有ノ如何ヲ檢査スル之ヲ以テ一臟器以
 脾ニ毎ニ之ヲ平板上ニ置キ手中ニ非ス。尺度ヲ以テ壓迫スルナク長横
 厚ノ三徑ヲ測リ而シテ後長徑ニ隨テ切斷シ又變常部アリテ諸方向ニ切
 離シテ之ヲ檢シ且血盤ノ如何ヲモ記載ス。取出スル時ハ其位置ヲ注意シ

各腎ヲ取出スニハ上下行結腸ノ外後方ニ沿フテ各側ニ腹膜ヲ縱切シ
 腸ヲ排シ腎ヲ露出シテ之ヲ取出スヘシ乃チ先ツ其凸隆線ニ縱切ヲ爲
 シ被膜ヲ切割シテ徐ニ之ヲ別離シ腎ノ表面露出セハ則チ大小形狀色
 澤血盤ノ多少并ニ病的狀態ノ有無ヲ檢シ然後全部ヲ通シテ腎盂ニ至
 ルマテ縱切シ水ヲ以テ切面ヲ洗ヒ髓質皮質血管及ヒ實質等各別ニ詳
 檢シテ記載スヘシ。取出スル時ハ其位置ヲ注意シテ取出スル。取出
 骨盤ノ臟器(膀胱直腸及ヒ之ニ連合スル生殖器官)ハ先ツ自然位置ニ於
 テ膀胱ヲ切開シ其含有物ヲ檢査スル後諸器連合ノマ、之ヲ切出シ然
 後各器ノ檢査ヲ爲スル良トス但生殖器ハ最終ニ檢査切開スヘシ且腔
 ノ切開ハ子宮切開ノ前ニ於テ之ヲ爲シ產褥婦ニ在リテハ子宮ノ内面
 壁質及ヒ附屬器ノ靜脈淋巴管ニ特ニ注意シ其大小含有物ヲ檢定スヘ
 シ。取出スル時ハ其位置ヲ注意シテ取出スル。取出
 胃及十二指腸ハ其外形ノ觀察ヲ終ル後剪ヲ取り自然位置ニ於テ十二
 指腸ノ前壁ト胃ノ大彎ヲ切開シ其含有物ヲ詳檢シ且胆管ノ通否ト其

開口部ノ含有物ヲ検査スル後更ニ他ノ検査ヲ行フ爲メ之ヲ摘出スヘシ
 肝ハ其自然位置ニ於テ外形ヲ検査シ又要ニ隨ヒ肝管ヲ檢スル後之ヲ
 取出シ横ニ長キ平滑ノ切開ヲ爲シテ實質ノ血量及ヒ其他ノ景況ヲ檢
 査スヘシ但記載ニ當リ常ニ肝小葉一般ノ景況殊ニ其内外部ノ關係ヲ簡
 約ニ登錄スヘシ
 小腸及ヒ大腸ハ其各部ニ就キ大小、色澤及ヒ其他ノ外觀ヲ檢スル後刀
 ヲ取ツ腸ニ密接シテ腸間膜ヲ切離シ共ニ之ヲ取出シ然後剪ヲ以テ腸
 壁ノ腸間膜附着部ヲ縦割シツ、各部ノ含有物ヲ検査シ終ラハ則チ全
 腸ヲ洗滌シテ各部ノ状態殊ニ小腸ニ在リテハ「ペール」氏叢節、孤節、絨毛
 及ヒ皺襞ノ如何ヲ詳檢スヘシ
 腹膜炎ノ死體ニ就テハ必ス蟲様突起ヲ精細ニ検査スヘシ
 第二十二條 中毒ノ嫌疑アル死體ニ付テハ腹腔ノ内部検査ヲ始メト
 ス即チ腹壁ヲ切開セハ他ノ検査ヲ行フ前ニ上腹臟器ノ外觀、位置、大小
 其血管ノ盈虛及ヒ異臭ノ有無ヲ検査スヘシ

血管ノ検査ニ付テハ他ノ要器ニ同シク其盈虛ハ動脈ナルカ靜脈ナル
 カ小枝別ナルカ將タ唯一定大ノ血管幹ニ限ルカ或ハ血管腔ノ擴張著
 大ナルカ否ヲ詳檢スヘシ
 是ニ於テ食管ノ最下部噴門ノ直上ト十二指腸ノ胆管開口部ノ下トニ
 各二重結紮ヲ爲シ其結紮ノ間ヨリ兩部ヲ切斷シ胃ト十二指腸トヲ共
 ニ取出シ前條ノ式ニ隨テ之ヲ開檢スヘシ但之ヲ取出ス際ハ充分注意
 シテ毫モ損傷スル勿レ
 含有物ノ直チニ其量、硬軟、色澤、性分、反應及ヒ臭氣ノ如何ヲ檢定シ而シ
 之ヲ清潔ナル陶器又ハ硝子器ニ貯フヘシ
 次チ粘膜炎ヲ洗滌シ其厚徑、色澤、表面、及ヒ連續ト殊ニ血管ノ状態并ニ粘
 膜ノ造構ヲ檢シ粘膜炎中ノ血液ハ血管内ニ含ムカ將タ血管外ニ出タル
 カ又新鮮ナルカ或ハ腐敗若クハ軟化(醱酵)ニ由テ變化スルカ將タ此狀
 態ヲ以テ近傍ノ組織中ニ竄入(浸潤)セサルヤ否ヲ檢シ若シ血管外ニ出
 タルモノナルニ於テハ表面ニ在ルカ組織中ニ在ルカ凝泣スルカ否ヤ

等ヲ檢定スヘシ
 粘膜ニ就テハ殊ニ表面ノ連續ニ注意シ實質缺損、剝脫及ヒ潰瘍ノ現存
 セサルヤ否ヲ檢スヘシ但死後分解ノ自然經過特ニ醱酵セル胃含有物
 ノ侵襲ニ因テ或變化ノ來ルヘキハ豫知セサル可ラス
 此検査ヲ終ラハ胃及ヒ十二指腸ハ胃含有物ト同器中ニ入レ更ニ検査
 ノ用ニ供スル爲メ裁判官ニ渡スヘシ又食管モ頸部ノ近傍ニ於テ結紮
 シ其上部ヨリ切斷シテ解剖的検査ヲナス後同器中ニ投スヘシ若シ胃
 含有物ノ量僅少ナルトキハ空腸ノ含有物モ亦同器ニ藏スヘシ
 又血液、尿、肝、腎等ノ一片モ死體ヨリ切取シテ更ニ検査ノ用ニ供スル爲
 メ各別ニ裁判官ニ渡スヘシ而シテ其尿ハ別器ニ貯エ血液ハ特ニ光像鏡
 的検査ヲ要スル場合ノミ別器ニ貯エ其他ノ部分ハ合一シテ器中ニ貯
 ラヘシ
 都テ此諸器ハ其口ヲ閉チ且之ヲ封シテ詳カニ記シ置クヘシ
 又肉眼以テ胃粘膜ヲ檢スルニ特ニ溷濁腫脹アルトキハ必ス可成速カ

ニ顯微鏡検査ヲ爲シ殊ニ胃液腺ノ狀況ヲ檢定スヘシ
 若シ胃ノ含有物中ニ有疑ノ物體例之ハ植物ノ葉莖或ハ動物性食物ノ
 殘渣等ヲ發見セハ毎ニ顯微鏡検査ヲナスヘシ
 旋毛虫中毒ノ疑アルトキハ胃及ヒ小腸上部ノ含有物ノ顯微鏡検査ヲ
 爲シ且後日更ニ検査スル爲メ筋、橫隔膜、頸筋及胸筋ノ一部分ヲ保存ス
 ヘシ
 第二十三條 初生兒ノ剖檢ニ就テハ上記通規ノ外尙ホ左ノ特點ニ注
 意スヘシ
 先ツ當初ニ其兒ノ熟否及ヒ發育時期ヲ斷定スヘキ憑證ヲ檢索セサル
 可ラス
 此憑證ト爲ス可キモノハ兒ノ身長、體重、全身ノ皮膚及ヒ臍帶ノ性質、頭
 髮ノ長短、性質、額門百ノ大小、頭ノ長、橫及斜徑、眼瞳、鼻及耳軟骨ノ性質、
 爪ノ長短及性質、肩部及臍部ノ橫徑、男兒ニ在リテハ陰囊ノ性質、辜丸ノ
 位置、女兒ニ在リテハ外陰部ノ狀況之レナリ

其他大腿骨下端ニ骨核ノ有無及其大小ヲ檢スヘシ即チ膝蓋骨下ニ一
横切ヲ爲シ下肢ヲ強ク屈曲シテ膝蓋骨ヲ除去シ關節端ノ軟骨ヲ薄層
ニ截切シ以テ骨核ノ最大直徑部ニ達シ密米尺ヲ以テ之ヲ測定スヘシ
右ノ諸件ニ據リ其小兒ハ妊娠三十週以內ニ産出セシモノタルヲ認ム
ルトキハ特ニ裁判官ノ要求アルニ非サレハ肯テ剖檢スルノ必要ナキ
モノトス

第二十四條 其小兒若シ妊娠三十週以後ニ産出シタルモノト認ムル
トキハ更ニ分娩中若クハ分娩後呼吸セシヤ否ヤヲ檢スヘシ故ニ此場
合ハ左ノ順序ニ從テ呼吸試驗ヲ施行スヘシ

- (一) 腹腔ヲ切開セハ直チニ肋骨ニ對シテ横隔膜ノ位置ヲ測定スヘシ
故ニ初生兒ニ付テハ當初腹腔ノミヲ開檢シ然後胸腔及ヒ頭蓋腔ヲ
開檢ス 然レ腹腔臟器ノ検査ハ必ず
胸腔切開ノ前ニ爲ス可ラズ
- (二) 胸腔ヲ開クニ先チ胸骨ノ上部ニ於テ氣管ノ單結紮ヲ爲スヘシ
- (三) 次テ胸腔ヲ切開シテ肺ノ縮張及ヒ其殊ニ心嚢ニ對スル位置并ニ

色澤、硬軟ヲ檢ス

- (四) 心嚢ヲ切開シテ心ノ狀況及ヒ其外觀ヲ檢ス
- (五) 心ノ各部ヲ切開シテ其含有物及ヒ其他ノ狀態ヲ檢定ス
- (六) 喉頭及ヒ氣管ノ結紮ヨリ上部ハ縱割シテ其含有物及ヒ其壁ノ狀
態ヲ檢ス
- (七) 結紮ノ上部ヨリ氣管ヲ截斷シ胸腔臟器全部ト共ニ之ヲ取出スベ
シ
- (八) 胸腺及ヒ心ヲ切除スル後清潔ノ冷水ヲ盛リタル廣大ノ器ニ入
以テ肺ノ浮沈如何ヲ檢ス
- (九) 氣管ノ下部及ヒ其枝別ヲ切開シ以テ其含有物ノ如何ヲ檢ス
- (十) 兩肺ヲ截切シテ嘍發音ヲ發スルカ又其切面ニ輕壓ヲ加エ以テ涌
出スル血液ノ量及ヒ性質ヲ檢スヘシ
- (十一) 肺ヲ更ニ水中ニ於テ截切シ氣泡ノ上昇スルヤ否ヲ檢ス
- (十二) 兩肺ヲ先ツ其各葉ニ切離シ次テ尙ホ小部分ニ切斷シ其各片ノ

浮沈如何ヲ試験スヘシ

〔十三〕咽頭ヲ切開シテ其状態ヲ檢ス

〔十四〕肺若シ疾患化肝又ハ異物ヲ充填スル爲メ空氣ヲ吸入シ得サルノ疑アルトキハ顯微鏡検査ヲ爲スヘシ

第二十五條 右ノ規定ニ掲ケサル器官ト雖若シ損傷アルカ將タ違常アルヲ發見セハ剖檢者ハ之ヲ検査スヘキ義務アリ

第二十六條 外科法醫若クハ召喚セラレタル第二醫ハ剖檢ヲ終ル後可成汚物ヲ除去シ鄭重ニ開檢セシ諸腔ヲ縫合スヘキ義務アル者トス

第三章 検査記録及剖檢報告書ノ編纂

第二十七條 剖檢ニ關スル諸件ハ總テ其場ニ於テ裁判官之ヲ記録ニ登記スヘシ〔検査記録〕

法醫ハ剖檢上檢定シタル技術上ノ發見ヲ總テ其口述ノマ、記録ニ登記セシムル様注意スヘシ

裁判官ハ此記載ヲナス爲メ一臟器ノ記載及ヒ其發見ノ登記ヲ終ル前他器ノ検査ニ移ラサルコトヲ法醫ニ要求スヘシ

第二十八條 法醫ハ検査記録中技術上ノ發見ヲ述ルニハ明確ニ且醫師ニ非サル者モ解釋シ得ヘキ語字ヲ用ユヘシ故ニ諸發見ヲ述ルニ方リ明瞭ヲ害セサル限リハ他國ノ術語ヲ用ユルヲ避クヘシ

外表検査及ヒ内部検査ノ二大部ハ第一第二ト記シ各腔ノ開檢ハ施行順序ニ隨テ其一其二ト記シ胸腔及ヒ腹腔ハ一番號ノ下ニ列シ最初ニ第十八條ノ末項ニ隨テ一般所見ヲ記シ然後甲乙ノ番號ヲ以テ胸腔及ヒ腹腔器官ノ所見ヲ記録スヘシ

各部分ノ検査成績ハ一二三ノ番號ヲ附シ始ヨリ終リニ至ルマテ連綿號ヲ追フヘシ

發見ハ總テ實際目撃ノマ、詳細記録ニ載スヘシ單一ナル斷定的人語辭發炎、壞疽狀、健康、尋常、創傷、潰瘍等ノ如シヲ用ユ可ラス然レ剖檢者ニ於テ明瞭ナラシムル爲メ必要ト認ムルトキハ實檢セル發見ノ記載ニ

括弧ヲ設ケテ附加スルハ肯テ妨ケナシ
 各貴重部ノ血量就中其單箇ノ記載ニ就テモ亦單一ナル斷定的ノ語辭
 [強ク適宜可ナリ甚タ潮紅充血貧血等ノ如シ]ヲ用ユ可ラス各部ノ記載
 ニ方リテハ之ヲ細切スル前大小形狀色澤硬軟ヲ順次ニ登記スヘシ
 第二十九條 剖檢終結スルトキハ理由ヲ説明セサル假鑑定ヲ検査記
 録ニ登記スヘシ
 剖檢者ハ裁判調書又ハ其他特別ノ事實ニ據リ鑑定ニ關スル事件ヲ知
 ルトキハ之ヲ簡約ニ登記スヘシ
 若シ裁判官ヨリ特別ノ問題アルトキハ其問題ニ答フルモノナルコト
 ヲ判然記録ニ記シ置クヘシ
 鑑定ニハ毎ニ先ツ死因ヲ述フ就中他覺的發見ニ由テ得タルモノニ準
 據シテ之ヲ揭ケ次テ犯罪的原因ノ疑問ニ移ルヘシ
 若シ死因ヲ發見セザルトキハ其旨ヲ明瞭ニ記シ置クヘシ致命ハ內因
 又ハ疾病ニ基因スヘシトナスカ如キハ穩當ナラスト雖乙ハ不得止際

用ユルコトアリ

若シ他ノ技術的検査ヲ要スルカ將タ有疑ノ關係尙ホ現存スルトキハ
 特別ニ説明鑑定書ノ遷延スヘキ旨ヲ明記シ置クヘシ
 第三十條 死體ニ損傷アリテ恐クハ致死ノ原因ナラント推測シ且發
 見セシ器具ハ此損傷ヲ與エタル器具ニアラサルカノ嫌疑アル場合ニ
 於テ裁判官ノ要求アルトキハ剖檢者ハ損傷ト器具トヲ比較参照シ此
 器具ヲ以テ此損傷ヲ與エ得ヘキヤ否ト加害ノ方法損傷ノ位置ト及ヒ
 加害ノ力量如何ヲ鑑定スヘシ
 器具存在セザルトキハ剖檢者ハ發見ニ隨テ爲シ得ル限り損傷發生ノ
 方法及ヒ之ニ使用シタル器具ノ性質ヲ鑑定スヘシ
 第三十一條 剖檢者若シ剖檢報告書説明鑑定書ヲ必要ト認ムルトキ
 ハ左ノ方式ニ準シテ編纂スヘシ
 即チ先ツ當初ニハ不要ノ形式ヲ省キ豫審ノ調査ニ基キ調書ノ條目ヲ
 附シテ事件ノ經歷ヲ簡明ニ記載シ然後検査記録中事件ノ鑑定ニ必要

ナル部分ノミ検査記録ノ番號ヲ附シテ原文ノマ、之ヲ記スヘシ若シ
 聊カニテモ之ニ添削ヲ爲ストキハ其旨ヲ明記スヘシ
 剖檢報告書ノ編纂ハ明確ニシテ其鑑定ノ理由説明ハ醫師ニ非サル者
 モ解釋證明シ得可ラシムルヲ要ス故ニ此編纂ニハ力メテ他國語ヲ用
 ヒス且普通理解ノ語字ヲ使用スヘシ但參考引用ニ關スルコトハ記入
 セサルヲ例規トス
 鑑定ニ對シテ裁判官ヨリ質疑ヲ提出スルトキハ充分ニ之ヲ辯解スル
 カ將々辯解セザレハ其ノ理由ヲ陳述スヘシ
 剖檢報告書ハ二名ノ剖檢者相共ニ編纂シテ其官印ヲ捺シ若シ一名ノ
 法醫剖檢ヲ行フ際ハ獨リ其官印ヲ捺ス
 剖檢報告書ヲ要スル場合ハ剖檢後遲クモ四週日以内ニ編成スヘシ
 (三)物件検査 ハ精液痕、血痕、胎便痕、毛髮足跡器具及ヒ毒物等之レ
 ナリ各論ニ於テ各其條下ニ詳記ス故ニ爰ニ贅セズ

第三 鑑定

口頭ナルト書面ナルトヲ問ハス裁判官ノ要求ニ由テ醫師又ハ他ノ鑑定人ノ
 與エタル判斷ヲ鑑定ト云ヒ個人ノ要求ニ由テ與エタル判斷ヲ診斷書
 又ハ證書ト云ヒ行政的檢視ニ方リ警察官又ハ市町村吏員ノ要求ニ由
 テ與フル判斷ヲ檢斷書及ヒ檢按書ト云フ明治二十七年二月二十三日警
規程中第十條檢視ニ參會シタル醫員ニハ屍體創傷ノ狀況致死成傷中毒ノ原
因及ヒ加療休業ノ日數等ヲ鑑定セシメ詳細ナル檢斷書及屍體引取人ニ附與
スヘキ檢按書ヲ出サシムヘシトアリ又東京市警職務章程明治二十九年十月
東京市訓令第二號中第三條第四項ニ主治醫又ハ産婆ノ手ヲ經サル貧民ノ死
産ヲ檢按シ及死體ヲ檢案然ルレ皆齊シテ醫師ノ生體或ハ死體ニ付キテ爲
 シタル斷定ヲ記載スル書ニノ唯僅カニ其形式ヲ異ニスルノミ
 裁判官ノ要求ニ應シテ爲スヘキ鑑定ニニアリ一ハ假鑑定又概括鑑定
 ト云ヒ一ヲ説明鑑定ト云フ

(二)假鑑定 ハ剖檢終結後直チニ記述スルモノニノ肯テ鑑定ノ理由
 ヲ附セサルモ鑑定ニ關スル主要ノ事項ハ簡明ニ記入シ裁判官ノ質問

ハ之ヲ問題トシテ記入シ又其答解ハ此質問ニ對スル答解ナル旨ヲ記シ而シテ鑑定ノ部ニハ他覺的發見ニ由テ得タル死因ヲ第一ニ記載シ次テ其死ノ誘因(犯罪的)ヲ記ス法律上檢屍規則第三章第二十九條參照若シ死因ヲ發見シ得サルトキハ其旨ヲ記述シ又ハ其推測スル所ヲ記ス刑事訴訟法第四百十條第一項參照

二(二)說明鑑定

ハ剖檢規則第三章第三十一條ノ剖檢報告書ニ其

要ハ鑑定ノ何タルニ關セズ必要事項ノ外ハ陳述セス又問題外ノ答解ヲ爲サ、ルニ在リ故ニ裁判官ノ質問アリテ而シテ後始メテ精細ノ答解ヲ爲ス可キモノトス
本鑑定書ハ剖檢終結後四週日以内ニ呈出スヘキ例規ナルモ顯微鏡的、化學的、光像鏡的又ハ細菌學的検査等ノ如キ技術的検査ヲ要スル場合若クハ有疑ノ事實アリテ更ニ調査ヲ要スルトキ(既往ノ疾病經過等)ハ尙ホ其旨ヲ述テ遷延スルコトヲ得ヘシ
之ヲ編成スルニハ先ツ冒頭ニ鑑定ヲ命シタル裁判官ト年月日及ヒ命

令事項ヲ記シ次ニ事實ノ經歷ヲ簡約ニ摘記シ然後検査記録ノ必要ナル各項ヲ原文ノ儘列記シ次ニ學理ニ徴シテ詳細明確ニ説明ヲ爲シ然後鑑定命令ノ各項ニ對シ明瞭確實ニ單簡ノ鑑定ヲ下スヘシ
損傷ニ付テハ其損傷ノ成立及ヒ起傷器物ノ鑑定ヲ爲ス義務アリト雖之レ亦裁判官ノ問題アリテ而シテ後之ヲ爲スヲ良トス
警察官又ハ市町村吏ノ要求ニ因リテ與ル損傷檢斷書又ハ死體檢斷書ハ當初ニ損傷ノ検査又ハ死體檢按ヲ爲シタル理由及ヒ年月日時ヲ述ヘ次ニ現場ノ景況又ハ死體周圍ノ景況ト家人若クハ親族或ハ他證人ノ陳述ヲ簡約ニ列記シ次ニ損傷ノ位置、形狀、大小、深淺、貴重器官損傷ノ有無ヲ記シ死體ニ付テハ其位置及ヒ全身各部分ノ外表發見、衣服併ニ衣服身體ニ附着セル異物等ヲ詳細ニ列記シ終リニ損傷ニ付テハ加療ヲ要スヘキ日數及ヒ休業ヲ要スヘキ日數ト治後遺殘スヘキ患害ノ有無ヲ記シ死體ニ付テハ其死亡ノ原因(之ヲ明言シ得サルモノハ推測的)原因ト死後經過セル日時トヲ記ス若シ死ノ原因不明ナルトキハ解剖

検査ヲ爲スニアラサレハ明言スルヲ得サル旨ヲ記スヘシ
死體引取人ニ渡スヘキ検査書ハ要スルニ死亡證明書ニシテ單ニ何
ニ因テ死亡セル者ト檢按スル旨ヲ記スルハ則チ足レリ肯テ他事ヲ記
スルヲ要セサルナリ
精神病有無ノ鑑定ハ更ニ其條下ニ至テ掲載スヘシ

各論

第一編

本編ヲ分テ六節トナス就中實地上最モ多ク法醫ノ問題タルモノハ損
傷ニ在リ故ニ冒頭ニ損傷ヲ論シ然後窒息死、餓死、燒死、凍死、中毒死及ヒ
殺兒ヲ順次ニ記載スヘシ

第一節 損傷論

器械的暴力ニ因リ身體一部ノ組織又ハ其官能上ニ損害ヲ被ムルハ

之ヲ損傷ト云フ法律上ノ關係種々一ニ足ラス隨テ法醫ノ鑑定ヲ要
スル事項亦頗ル多シ抑モ法醫ノ損傷ヲ鑑定スルニ方リテハ同時ニ之
ニ因テ來ル可キ結果ヲモ鑑定スルヲ要ス故ニ損傷ヲ検査スルニ當リ
テハ諸般ノ方向ヨリ慎重精細ニ検査シ以テ其目的ヲ達セサル可ラス
然リト雖法醫ハ固ト被傷者ノ主治醫ニ非ス故ニ主治醫既ニ綑帶ヲ施
シタル損傷ノ検査ヲ爲スニ方リテハ擅マ、ニ其綑帶ヲ解除ス可ラス
必ス主治醫又ハ其代理者ノ立會ヲ請求スヘシ然キハ創傷經過ニ縱令
不良ノ結果ヲ來スモ肯テ法醫ノ責ニ歸スルコトナシ若シ主治醫ニ於
テ治療上ノ必要ニ因リ綑帶ノ解除ヲ拒ムキハ已ヲ得サル場合ノ外裁
判官ノ承諾ヲ經テ其損傷ノ検査ヲ遷延シ其經過ヲ調査シテ綑帶交換
ノ際又ハ危險ナキ時期ヲ待テ検査ヲ爲シ鑑定ヲ下スカ或ハ主治醫ヨ
リ詳細ノ診斷書ヲ出サシメ之ニ由テ假鑑定ヲ爲シ後日創傷検査ヲ爲
シテ更ニ本鑑定ヲ下スモ可ナリ但生體ニ就テ損傷検査ヲ爲ス際ハ其
傷部ハ勿論自己ノ手并ニ器械等總テ充分ニ防腐法ヲ施スヘシ

第一章 損傷及其結果

損傷検査ニ就テ法醫ノ特ニ注目スヘキ事項三アリ一ハ損傷局部ノ發見ニ關シニハ被傷者ノ全身状態ニ關シ三ハ損傷ノ結果ニ關ス

(一) 損傷局部ノ發見 ニ就テ法醫ノ注目ヲ要スル諸點ハ純乎タル治療上ニ於テハ殆ント價值ナキ者間々之レアリ左ノ如シ

(イ) 損傷ノ位置 之レ直接ノ結果ニ關スルヲ以テ隨テ刑法上ノ分類ニ重要ノ關係ヲ有シ且外力ノ直接ニ侵襲シタル部位ヲ表示スルモノ多シ

損傷ノ位置ヲ記スルニ方リテハ身體表面ノ固定點ヲ標準ニ採リ其距離ヲ測定ノ検査録ニ記載スヘシ決テ概畧ノ稱呼ヲ用ユ可ラス假令ハ右頸側或ハ左前額ト云フカ如キ之ナリ此場合ニハ頸ノ中線ヲ左方或ハ右方ニ距ル幾仙米ノ部或ハ鎖骨又ハ下顎隅角ヲ距ル幾仙米ノ部又ハ左眼窩上縁ノ中央ヲ上方ニ距ル幾仙米ノ部ト記載スヘシ

(ロ) 損傷ノ大小 ハ往々成傷器具ノ鑑定ト成傷ノ方法鑑定トニ就テ重要ナリ手掌大銅貨大豆大粟粒大等ノ如キ梗概的ノ語字ヲ以テ足レリト爲スモノ往々之レアリト雖鈍器或ハ鈍角器具ニ由ル損傷及ヒ刺創等ニ就テハ如此語字ヲ以テ其大小ヲ形容スルハ充分ナラス必ス米突尺ヲ以テ密ニ其大小ヲ測定スヘシ

外軟部ノ創傷ニ強ク哆開スルモノニ在リテハ其哆開ノ程度大ニ重要ナルモノアリ即チ生活中ノ創傷ハ死後ノ創傷ヨリ強ク哆開スト雖然疋哆開ノ度ハ損傷ノ部位及ヒ深淺ト損傷部分ノ體位如何トニ隨テ頗ル相異ナルモノナレハ注意セサル可ラス

創口哆開ノ強弱ハ殊ニ其損傷ノ生前ニ生セシカ將タ死後生セシカヲ断定スルニ就テ價值アルモノトス而シテ此哆開創ニ就テハ先ツ哆開ノ儘其長徑幾仙米創縁ノ最大距離幾仙米ナルカヲ測リ然後創縁ヲ接合シテ創ノ全長ヲ測定スヘシ蓋シ死體ニ在リテハ創縁ノ接合容易ナルモノナリ

〔ハ〕損傷ノ形状 ハ凶器侵襲ノ方向ト凶器ノ性質ヲ鑑定スルニ付
キ重要ナリ損傷ノ形状ヲ些細ニ記載スルハ固トヨリ必要缺ク可ラス
ト雖其形状ヲ模寫スルハ縦合ヒ精密ナラサルモ頗ル便利ナルモノナ
リ

〔三〕創縁ノ形状 ヲ詳カニ検査スルキハ成傷器具ノ性質ト其侵襲
ノ方向トヲ鑑定シ得ルヲ屢之アリ殊ニ創縁ノ經過ト其解剖的變化例
之ハ挫潰斷裂等ニ注意スヘシ抑モ創縁ハ深部ニ至ルマテ同一ナルモ
ノアリ或ハ組織ノ各層ヲ體ノ表面ニ對シテ斜メニ侵透スルモノアリ
之ニ由テ創縁ノ一ハ銳利ニ他ハ傾斜スルモノアリ又創縁ニハ汚物
ノ附着スルアリ或ハ血液ニ染ムモノアリ深ク注意スヘシ

〔ホ〕創底ノ性状 モ亦成傷器具ノ性質ヲ鑑定スルニ就テ重要トス
即チ鈍器若クハ鈍角器具ニ因テ生シタル創傷ナルモ線狀ニシテ且銳縁
ヲ有シ外表ニ挫潰ノ微毫モ之ナキカ將タ其極メテ僅少ナル者ニ在リ
テハ恰モ切創或ハ刺創ノ如シ然レ其創縁ヲ稍ヤ排開シ創底ヲ検査ス

ルキハ横走ノ組織橋狀ニ殘留シテ其創ノ挫創或ハ裂創ニ屬スヘキ性
質ヲ確認シ得ルコト往々之アリ

創底ニ發見セル異物ハ大ニ鑑定上重要ナルヲアリ例之ハ銃創管内ニ
土砂ヲ發見セハ其銃丸ノ身體ニ射入スル前一回地面ヲ擦過シタルヲ
察知スヘキカ如シ故ニ如此銃丸ヲ反射彈ト云フ

〔ヘ〕創傷ノ深淺 ハ成傷器具ヲ使用シタル力ノ強弱ト其器具ノ長
短例之ハ刺創ヲ鑑定スルニ就テ要徴トス然レ唯其軟部ヲ侵スト骨ニ衝
突スルトニ隨テ勿論同一ナラス骨ニ衝突セハ創口ノ比較的淺キヲ常
トス又身體ノ表面ニ接着セル硬固物及ヒ衣服ノ厚層モ器具ノ侵襲力
ヲ減弱シテ深ク侵入セシメサルハ之ト同理ナリ故ニ稍ヤ淺キ創傷ニ
就テ成傷器具ヲ使用シタル力ノ強弱ヲ鑑定スルニ方リテハ其組織ノ
性質ト衣服ノ狀況種類ヲ参照スヘシ但裸體部分ノ創傷ニノ同時ニ成
傷器具ヲ参照セハ唯其創口ノ深淺ニ由テ直チニ使用力ノ強弱ヲ斷定
スルヲ得ヘシ

〔下〕創管ノ方向 體ノ深部ニ達スル創管ノ方向ハ自殺ノ目的ニ出タル損傷ナルカ或ハ他殺ノ目的ニ出タル損傷ナルカ將タ正常防禦ノ目的ニ出タル損傷ナルカノ疑問ヲ断定スルニ貴重ノ證憑トナルコトアリ故ニ極テ精細ニ調査シ且時宜ニ由リテハ加害者ノ被害者ニ對スル位置被害者ノ身長體圍加害者ノ上肢ノ長サ及ヒ成傷器具ノ性質例之ハ刺創ニ就テハ殊ニ器具ノ長サニ特別注意參照スヘシ

〔ナ〕創口ノ周圍 體ノ外表ノ損傷ニ在リテハ創口周圍ノ外皮ト深組織ノ性質如何ニ注意スルヲ要ス之レ其血液ヲ附着スル狀況ニ由テ出血ノ多少ヲ知リ穿透創ノ周圍ニ見ル表皮剝脫ニ據テ成傷器具ノ如何ヲ知ルニ有力ノ證憑ヲ得ルト深組織ニ溢血ヲ見ルトキハ其損傷ノ生前ニ生シタルモノナルヲ察知シ得ヘケレナリ

〔二〕全身狀態 中損傷ノ繼發結果トシテ法醫ノ特ニ注目スヘキモノハ衰弱狀態及全身性傳染病等之レナリ此狀態ハ治病上ニ於テモ亦注意診定ヲ要スト雖法醫學上ニ於テハ更ニ特別ノ問題アリ尙ホ後章ニ

詳論スヘシ

〔三〕損傷ノ結果 ハ加害者ノ處分上ニ付キ罪ノ輕重ノ係ルモノナレハ最モ公平且慎重ノ斷定ヲ要ス即チ前記一及ヒ二ノ兩條ニ列セル各項ヲ引照査定シ以テ其創傷ニ因リテ將來發起シ又ハ遺殘スヘキ結果ノ如何ヲ鑑定スヘシ創傷ハ比較的重大ナルモ貴重ノ障害ヲ遺サス速カニ治癒スルアリ或ハ輕小ナル創傷モ却テ重要ナル器官ノ障害ヲ發シテ長ク全癒セサルモノアリ故ニ其結果ヲ鑑定スルニ方リ疑議アルカ將タ創傷治癒ノ經過中危險ノ症狀ヲ誘發スヘキ虞アルトキハ即時ニ斷定シ難キ旨ヲ裁判官ニ陳述シ其承諾ヲ經テ鑑定ヲ延引シ病床經過ヲ些細ニ觀察シ結果ヲ斷定シ得ル時期ニ至リ始メテ鑑定ヲ下スヘシ但現行刑法ニ關スル損傷ノ分類ハ更ニ後章ニ詳論スヘシ
 法醫タル者以上一般ノ要點ニ能ク注意セハ實地損傷ノ鑑定ニ臨ミテ裁判上ノ目的ニ於ケル問題ヲ答解スルニ肯テ大ナル困難ナカルヘシ而シ此問題ノ主旨ハ要スルニ左ノ二項ニ在リ

損傷及其結果

(一) 某損傷ハ如何ナル器具ヲ以テ成セシモノナルヤノ鑑定
(二) 損傷ノ刑法上ノ分類ニ於ル鑑定之レナリ

第二章 成傷器具ノ分類

成傷器具ヲ分ツニ二種アリ普通分類及ヒ特別分類之ナリ

普通分類ニ在リテハ成傷器具ヲ左ノ種類ニ區分ス

一 鈍器或ハ鈍角器具

二 銳器

三 刺器

四 銃器

通常ハ損傷ヲ與エタル特別器具ハ既ニ裁判調書ニ記録セルモノ少ナカラスト雖法醫ヲシテ之ヲ鑑定セシムル場合亦頗ル多シ然ルニ此問題ハ實地ニ於テハ上記四種ノ何ニ屬スル器具ナルカヲ鑑別スルノミナラス可成ハ如何ナル特別器具ナルカヲ詳細ニ鑑別スルヲ要ス而ノ

此鑑定ヲ爲スニ方リ一モ參考器具ノ存スルナク唯損傷ノ他覺的發見ニ由テ成傷器具ノ判斷ヲナスアリ或ハ某器具ヲ以テ某損傷ヲナシ得ヘキヤノ疑問ナルアリ或ハ參考器具數箇現存シ其中何器具ヲ以テ某損傷ヲ與エタルモノナルヤノ疑問ナルコトアリ

以上ノ場合ニ於テ法醫タルモノ毎ニ必ス確定不拔ノ鑑定ヲナシ得ヘキニ非スト雖右四種ノ器具ニ因テ生シタル損傷ハ其組織ニ於テ多クハ之ヲ鑑別スルニ固有ノ標準トナスヘキ解剖的變化ヲ有スルヲ以テ成傷器具ヲ鑑定スルニハ先ツ此變化ヲ精檢熟考セサル可ラス
依テ左ニ此解剖的變化ノ特ニ鑑定上必要ナル點ヲ掲ケ其他ノ治療上ニ關スルモノハ之ヲ畧セントス

第一 鈍器或ハ鈍角器具ニ因ル損傷

此種類ニ屬スル器具ノ百般ナルニ隨ヒ之ニ由テ生シタル損傷モ亦種々ナリ要スルニ此損傷ハ成傷器具ノ大小形狀重量及ヒ侵襲ノ方法ニ

隨テ種々同一ナラサルモノトス
此種類ノ器具ニ因テ生スル損傷ヲ左ノ六種ニ分ツ

- 甲 皮膚剝脫
- 乙 挫傷
- 丙 裂創及挫創
- 丁 神經中樞ノ震盪
- 戊 臟器ノ破裂
- 己 骨折及脫臼

〔甲〕 皮膚剝脫

之レ鈍器或ハ鈍角器ニ因ル暴力侵襲ノ最モ輕易ナル作用ニノ外科學ニ於テハ大抵注目ヲ要セスト雖法醫學上損傷ノ鑑定ニ就テハ大ニ要項トス殊ニ外見上別ニ損傷ナキカ如キモ深部ニ於テハ同一ノ侵襲ニ因テ甚タ重傷ヲ生スルコトアリ故ニ外皮ノ剝脫所見ニ基キ直チニ其暴力ノ侵襲ヲ以テ輕度ナリト鑑定セハ時ニ或ハ正鵠ヲ失スルノ憂アリ皮膚剝脫ハ往々法醫學上ニ極テ重要ノ發見ナルヲ以テ實地ニ臨テハ充分精細ニ検査シ而シテ其得タル發見ハ些細ノ事項ト雖検査記録ニ悉ク記入スヘシ但其要項左ノ如シ

剝脫ハ部位例之ハ抵抗ヲ爲シタル徵トシテ手、顔面、頸部ニ之ヲ見又頸ノ絞壓ニ由テ致命セシ死體ニ於テハ之ヲ頸部ニ見或ハ狼狽行爲ニ於テハ之ヲ婦人ノ外陰部或ハ大腿ニ見ルカ如シ

剝脫ハ配置及列位ハ唯暴力ニ由ル致命原因ノ鑑定ニ必要ナルノミナラス又死體ヲ挽キ動セシヤ體ノ一側ニ配列ス或ハ轉動セサリシヤ體表面ノ各側及ヒ諸部ニ散在ノ疑問ヲ斷定スル要アリ

剝脫ノ經過、方向形狀即チ其直線狀ヲナスモノハ搔破ヲ徵シ弓形或ハ半月狀ノ剝脫ハ指頭又ハ指爪ノ壓迫ヲ表ス尙ホ其弓ハ何レノ方向ニ對スルカヲ調査スヘシ又多數ノ剝脫アルキハ直線狀ヲナスカ其方向ハ如何其各線狀剝脫ノ交互ノ距離如何等ヲ検査スヘシ

剝脫ハ大小之レ爪痕ナルキハ加害者ノ捜査上頗ル要件ニシテ若シ後日參考検査ノ必要アルキハ密米尺ヲ以テ其長横兩徑ヲ測リ弓狀ヲナスキハ其弓ノ大小ヲ測定スヘシ茲ニ嫌疑者アリ其爪痕ニアラサルヤヲ鑑定スル場合ハ其嫌疑者ヲシテ蠟板ノ如キ物質ニ其爪痕ヲ印セシメ

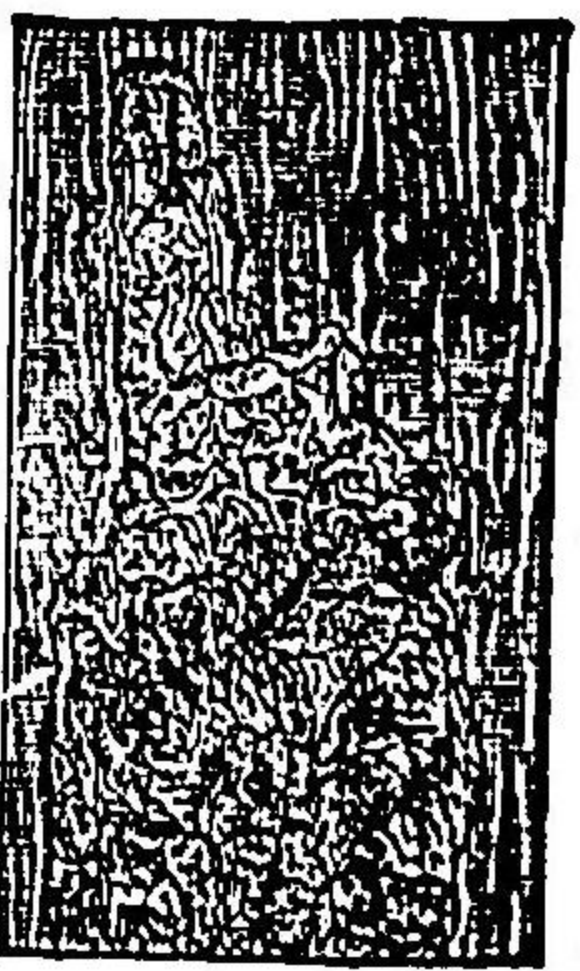
而ノ之ヲ皮膚剝脱ト比較檢定スヘシ然モ加害者ノ指爪鉛直ニ被傷者ノ體表面ニ觸レス斜メナルキハ唯爪痕ノ一部ヲ印シ或ハ指爪ヲ短ク切除セル者ニ在リテハ指頭ニ準シテ圓形或ハ不正形ノ皮膚剝脱ヲ殘シテ爪痕ヲ印スルコトナシ亦注意スヘキ點ナリ

然レモ指爪若シ皮膚ノ觸接線ノ方向ヲ以テ壓迫シ且搔破スルトキハ不正形或ハ圓形ノ皮膚剝脱ヲ生スヘシ但皮膚剝脱ノ發見ヲ記載スルニモ其形狀大小ヲ摸寫シ置クハ頗ル簡便ノ法ナリトス

單純ナル皮膚剝脱ハ被害者ノ健康障害又ハ就業不能即チ疾病休業ヲ來サル、ヲ以テ刑法上ノ分類ニ就テハ殆ント重要ノ價值ナシト雖鈍器ニ因ル暴力侵襲ノ部位ヲ表スルモノナルヲ以テ損傷ノ鑑定上ニハ大ニ重要トス然モ暴力侵襲部ニハ必ス皮膚剝脱アリト推定スル可ラス皮膚剝脱ナキモ深部ニハ却テ著大ノ變化ヲ有スル損傷アレハナリ

死體ニ發見スル皮膚剝脱ノ生前又ハ死後生シタルモノナルカラ鑑定スルハ犯罪ノ捜査上極テ緊要ナルモ若シ出血ヲ合併セサルニ於テハ

之ヲ鑑定シ得ルコト甚タ稀ナリ抑モ皮膚ノ毛細血管ハ死戰期及ヒ死ノ直後ニ於テ血液缺乏シ皮膚蒼白トナルヲ以テ死ノ直前ニ生シタル皮膚剝脱ニハ出血毎ニ僅少ニノ且時日ヲ經過スルキハ僅カニ褐色ノ痂狀ヲ爲テ附着セルノミ故ニ其痂ヲ取テ顯微鏡検査ヲ行ヒ以テ血液ナルヤ否ヲ檢定スヘシ然モ死後體ノ下位ニ在ル部ハ死斑ヲ生シ毛細血管ハ再ヒ流動血ヲ充盈スルヲ以テ此部ニ皮膚剝脱アルトキハ死後出血ヲ來スコトアリ故ニ皮膚剝脱兼出血ヲ以テ生前死後ノ損傷ヲ鑑定セント欲セハ死體ノ高位ニ在ル皮膚剝脱ヲ標準ニ取ラサル可ラス



第 一 圖
 革皮狀ニ乾燥セル皮膚剝脱部ニ凝血ヲ含有セル毛細血管ヲ透見ス
 (ルーペ大)
 (ゲットリッヒ氏法醫書ニ據ル)

皮膚剝脱部ノ毛細血管ニ凝血ノ有無モ亦損傷ノ生前ナルカ死後ナルカヲ鑑別スルニ就テ重要ナリトス即チ生前ノ損傷ニ在リテハ常ニ毛細血管内ニ凝血ヲ含有スル者ニノルーペヲ用レハ明カニ

之ヲ檢知スヘシ然レ之レ唯損傷後多少ノ時間生活セシ死體ニ於テノ
 ミ之ヲ斷定シ得ヘキ者ニノ且死體ノ下位ニ在ル部ノ剝脫ニ就テハ殆
 ント價值ナキモノナリ但皮膚剝脫部ノ近傍ニ皮下溢血切開シテアル檢スヘシテアル
 モノハ其負傷ノ生前ニアリシ要徴トス
 死體ノ皮膚剝脫部ハ速カニ乾燥スルヲ以テ革皮狀或ハ洋皮紙狀ニ硬
 化シ褐色ヲナシテ切入シ難シ故ニ其初メ濕潤セル時ニ比スレハ乾燥
 後ハ大ニ著明トナルモノナリ又平素濕潤セル部即チ陰囊口唇等モ同
 一ノ變化ヲ生シ且火傷部及ヒ死後ニ表皮剝脫セル部モ同一ノ變化ヲ
 呈ス注意セサル可ラス

乙 挫傷

暴力ノ侵襲稍ヤ深部ニ及フキハ皮膚及ヒ皮下組織ノ挫傷ヲ生ス暴力
 ノ異ナルニ應シテ其關係亦甚タ種々ナリ最モ挫傷ヲ生シ易キハ皮下
 ニ骨角ノ現存スル部ニノ皮下ニ多量ノ軟組織ヲ有スル部ハ抵抗力頗
 ル強シ故ニ如此部ニ於テハ皮膚ニ殆ント損傷ヲ見サルモ却テ深組織

ニ損傷ヲ有スルコトアリ是ヲ以テ皮膚損傷ノ如何ハ必スシモ暴力ノ
 強弱及ヒ損傷ノ輕重ヲ測ル尺度ト爲スヲ得サルモノトス
 稍ヤ高度ナル挫傷ノ必發徴ハ皮下溢血之ナリ之レ小血管ノ破裂ニ由
 テ出タル血液ノ近傍組織中ニ滲潤スルモノニ若シ其血壓ノ爲メ組
 織ニ腔洞ヲ形成スレハ則チ血腫ヲ生ス生活中ニ生シタル滲潤血液ハ
 必ス凝固スルモ血腫内ノ血液ハ一部分常ニ流動性ニ止マルモノトス
 皮下溢血ノ大小ハ一ハ破裂血管ノ多少ト大小及ヒ性質動脈或ハ靜脈
 ニ關シ一ハ暴力侵襲ノ方法及ヒ強弱ニ關シ一ハ近傍組織ノ粗密如何
 ニ關ス蓋シ近傍ノ組織寬鬆柔軟ニノ且破裂シ易キ部即チ眼瞼口唇及
 ヒ陰囊等ノ如キ部ナルトキハ出血ノ抵抗甚タ少ナキヲ以テ速カニ多
 量ノ出血ヲ來スモノトス
 皮下溢血部ハ始メ隆起シ青色或ハ帶青色淺ク位スルモノハ其色愈著明ヲ呈シ漸次吸
 收ニ由テ平坦トナリ且血球崩潰シテ無形及ヒ結晶性ノ色素「ヘマチン」
「ヒト」及ヒ
 シトニ分解スルヲ以テ帶黃綠色及ヒ橙黃色ニ變シ終リニ全ク消失ス

而ノ其大ナルモノハ此變化稍ヤ遅キモ通常ハ第三日ニノ帶青暗赤色ナルモノ青色トナリ第六日ニ至リテ綠色トナリ第八日ニ至リ黃色トナリテ稍ヤ軟化シ第十四日ニ至リ全ク消失ス故ニ此變色經過ニ由テ溢血發生ノ時ヲ稍ヤ推測スヘシト雖亦數年間皮膚ニ褐色ノ色素ヲ遺スモノ間々之レアリ

皮下溢血ノ大小形狀位置及ヒ方向ハ成傷器具ノ性質ト使用方法トヲ鑑定スルニ就テ要件タリ然レ負傷後既ニ時日ヲ經タルモノニ在リテハ血色素近傍ノ組織ニ浸潤シ當初ノ溢血ヨリ却テ廣大トナルコトアリ又器具ノ侵襲點ノ近傍ニ寬鬆ノ組織アルトキハ却テ此部ニ於テ著明ノ溢血ヲ生スルコトアリ又毒虫ノ刺傷或ハ疾病ニ由テ溢血ヲ生スルコトアリト雖其位置形狀等ヲ考察シ且全身狀態ヲ診査セハ肯テ誤認ノ憂ナカルヘシ

挫傷部ノ腫張スルハ血液及ヒ淋巴液リンパ液ニハ淋リン其部ニ溢出スルニ因ル者ニノ殊ニ上腿臀部等ニ於テ著明ナリ負傷ノ直後其部ノ著シク腫張

スルハ蓋シ挫傷ノ強ク且深部ニ在ルノ徵トス

皮下溢血ハ死體檢査ニ方リテハ屍斑或ハ垂下鬱血ト誤認シ易シ屍斑及ヒ垂下鬱血ハ通常體ノ垂下部及ヒ低キ位置ニ在ル部例之ハ仰臥セル死體ノ背部等ニ發現スルモ亦高位ノ部ニ生スルコトナキニアラス故ニ疑似決シ難キ場合ハ皮膚ノ全厚徑ヲ通シテ切割シ以テ皮下溢血ナルヤ否ヲ鑑別スヘシ然レ死體ノ腐敗高度ニ進ムトキハ組織中ニ血性滲潤ヲ生シテ皮膚ニ限局性青色部ヲ呈シ一見恰モ皮下溢血ノ如シ注意セサル可ラス

又死體甚シク腐敗セサルモ長ク一定ノ位置ニ在リテ且其血液流動性ナルトキハ垂下鬱血ノ爲メ小血管破裂シテ組織中ニ滲潤シ始メ小ナルモ漸次増大スル皮下溢血ヲ生スルコトアリ故ニ皮下溢血ノ生前ニ生シタルモノナルカ將タ死後生シタルモノナルカヲ鑑別スルハ頗ル要件タリ即チ此鑑定ヲナスニハ須ラク先ツ死體ノ在リシ位置ヲ詳細ニ調査シ而ノ血液ノ性質ト溢血ノ部位及ヒ其近傍組織ノ血液含有量

トヲ参照シ尙ホ且ツ切割シテ凝血ノ性質ヲ検査スヘシ即チ死後ノ溢血ニ基ツク凝血ハ寛鬆柔軟ナルモ生前ノ溢血ヨリ生スル凝血ハ緻密硬固ナルモノナリ

然ル瀉車馬車等ノ轢過或ハ器械ノ壓迫等ニ因ル高度ノ挫傷ニ在リテハ皮膚尙ホ連續スルモ深部ノ組織ハ破碎挫潰シテ溢血ヲ生セサルコトアリ之レ一ハ組織ノ挫潰ニ方リテ其部ノ血行滅絶スルト一ハ反射機能ニ由テ心動ノ遏止スルカ爲メナリ然ニ其皮膚損傷ノ甚シカラサルト出血ナキトヲ見テ強大ノ外力侵襲セシモノニ非スト誤認シ或ハ其損傷ノ生前又ハ死後生シタルヤノ鑑定ヲ誤ルコトアリ故ニ出血ナキ損傷ハ必スシモ死後生シタルモノト断定スルヲ得サルモノトス

〔丙〕 裂創及挫創

鈍器ノ侵襲ニ由テ皮膚過度ニ緊張セラレ遂ニ破裂スルトキハ則チ裂創ヲ生ス其器具若シ斜メナル方向ヲ以テ侵襲セハ瓣狀裂創ヲ生シ穿

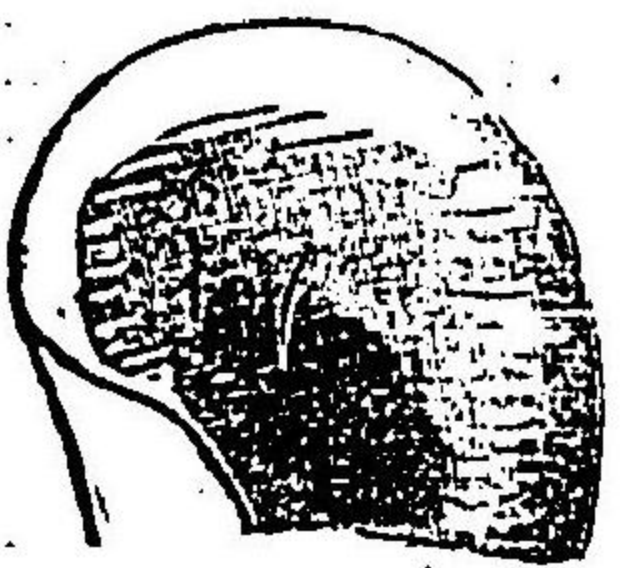
入後更ニ一方ニ向テ進行セハ線狀裂創ヲ生スヘシ(獸爪ニ由ル搔破ノ如シ)凡ソ裂創ハ直線狀或ハ不正ノ形狀ヲナシ創縁亦稍ヤ不正ニシテ下溢血ヲ有シ且腫張シ其直線狀ヲナスモノハ刺創及ヒ割創ニ類ス大ナル裂創^{例之ハ一ト}雖一般ニ出血ハ僅少ナリ之レ斷裂セル血管ノ内膜及ヒ中膜ハ内方ニ卷縮シ爲メニ血管ノ器械的自然閉鎖ヲナスニ由ルモノトス然ル^{シヨツク}ニ因ル心動ノ遏止モ亦之レカ主因タルコト間々之アリ故ニ裂創ハ被傷時ニ於テ危險ノ大出血ヲ來スコト殆ント之レナシト雖却テ後出血ヲ發スルノ恐レ少ナカラサルモノトス挫創ハ皮下ニ骨ノ現存スル部ニ鈍器侵襲スルニ方リ兩硬固物ノ間ニ皮膚ヲ壓迫挫潰スルニ由テ生スル創傷ナリ骨面平坦ナルモ器具ニ鈍角アルトキハ其器具ニ類スル創口ヲ生シ器具平坦ナルモ骨ニ銳縁アルトキハ(脛骨角下顎縁及ヒ上下眼窩縁ノ如シ)即チ骨縁ニ似タル創傷ヲ生シ複雑骨折等ニ在リテハ骨折線ノ形狀ニ應シテ種々ノ創口ヲ生シ又暴力強劇ナルトキハ裂挫創ヲ生ス

凡ソ挫創ハ其形狀大抵不正ニノ創縁ハ挫潰腫張シ皮膚剝脱及ヒ皮下
 溢血ヲ有シ罕ニハ銳縁ヲ有スルモ多クハ不正ノ齒牙狀ヲナシ創底モ
 亦不平ニノ横走或斜走ノ組織橋ヲ殘留ス
 頭部又ハ下腿前面ノ如キ皮膚ノ直下ニ骨アル部ニ於テ強劇ナル鈍角
 器具ノ侵襲ヲ被ムルトキハ銳縁ヲ有スル線狀ノ皮創ヲ生シ一見恰モ
 切創或ハ刺創ノ如シ但此皮創ハ皮膚分裂性ノ方向ニ隨テ分裂スル
 アリ故ニ之ヲ分裂創ト名ク此皮創ヲ切創或ハ割創又ハ刺創ト鑑別ス
 ルニハ創縁及ヒ創底ヲ詳細ニ検査スヘシ挫創ニ在リテハ創縁ニ皮膚
 剝脱及ヒ皮下溢血ヲ有シ被傷ノ際致命スルトキハ溢血ナシ創底ニハ多少一縁ヨリ他縁
 ニ亘ル組織橋ヲ見ルト雖切創割創及ヒ刺創ニ在リテハ創縁ニ剝脱溢
 血ナク又創底平等ニノ組織橋ヲ有スルコトナシ
 挫創及裂創ハ大抵第一期癒合ヲ得ス化膿ニ陥リ不正ノ癩痕ヲ形成シ
 テ治スルモノトス
 デットリッヒ氏嘗テ刺創ニ類似セル挫創ノ實驗ヲ報告セリ即チ棍棒ヲ

第二圖



第三圖



咬傷人及ヒ獸畜ノ齒牙ニ由テ生シタル損傷ヲ咬傷ト云フ亦挫創ニ屬

以テ毆打セラレタルカ將タ小刀ヲ以テ刺傷セラレタルカノ嫌疑アル死體ナリキ此死體ノ耳介ニ於テ其全厚徑ヲ徹シタル線狀銳縁ノ挫創アリ一法醫某ハ此創口ヲ以テ刺創ナリト斷定セリ「デットリッヒ氏ハ耳介内面ノ創縁ヲ檢セシニ皮膚ノ剝脱アリ且辛フシテ檢知シ得

第三圖及第三圖ハ
 共ニ耳介ノ挫創
 第二圖耳介ノ後面
 ヲリ創縁ヲ離開シ
 テ見タルモノ（ヘロ）
 ハ耳介ノ全厚徑ヲ
 通貫セル孔
 へキ挫潰アリ又創底ヲ詳檢セシ
 ニ其挫創タルヲ證スへキ徵アリ
 即チ第三圖ノ如ク耳介前面ニハ
 線狀銳縁ノ創口ヲ呈スルモ創底
 ニハ組織橋殘存シテ橋間ハ耳介

第三圖ハ耳介ノ前
 面（イ）ハ創縁ノ接
 合セルモノ
 ノ全厚徑ヲ通スル孔ヲナセリ尙
 ホ之ヲ調査セシニ鈍器ヲ以テ頭
 蓋ニ向ヒ耳介ヲ毆打セシニ因リ
 テ生シタル創傷ナリシト云フ

スヘキモノトス人ハ忿怒格闘ノ際多クハ體ノ突出部即チ鼻耳介口唇
 或ハ手指ヲ咬傷ス其齒組織ニ穿入後直チニ除去セラレハ単純ナ
 ル挫創ヲ生スルモ若シ穿入後移動牽引スルキハ挫裂創ヲ生ス又犬ノ
 咬傷ハ其角齒ニ由テ大抵裂創ヲ生シ他齒ハ皮膚剝脱或ハ馬ノ咬傷
 ハ其切齒ノ併列ニ準シテ二條ノ彎曲線ヲ呈スルモ通常皮膚剝脱ト皮
 下溢血ヲ發シテ青色ヲ呈スルニ過キヌ又人ノ咬傷ハ其形狀數及ヒ配
 列ノ模様加害者ノ齒列ニ一致ス鑑定上注意スヘキ點ナリ
 咬傷ハ口内ノ細菌及ヒ毒物ニ由テ創傷傳染病ヲ發ス就中狂犬ノ咬傷
 ハ其固有ノ狂犬毒ニ由テ所謂犬毒狂水病ヲ發ス若シ嫌疑ノ死體ニ付
 テ法醫ノ鑑定ヲ要スアラハ必ス其生前ノ症狀ノミニ由テ鑑定ヲ下
 ス可ラス之レ其症狀ハ各人常ニ同一ナラサルト又類似ノ症狀ハ他ノ
 疾病ニ由テ發スルコトアレハナリ但シ解剖所見ハ其成績通常陰性ナ
 リ故ニ確實ノ鑑定ヲ爲ント欲セハ死後可成速カニワロル氏橋及ヒ延
 髓ヲ切取シ之ヲ虞利設林ニ浸シ確實ノ方法ニ據テ相當ノ病院又ハ研

究所ニ送リ以テ動物試驗ヲナサシムルノ外ナシ

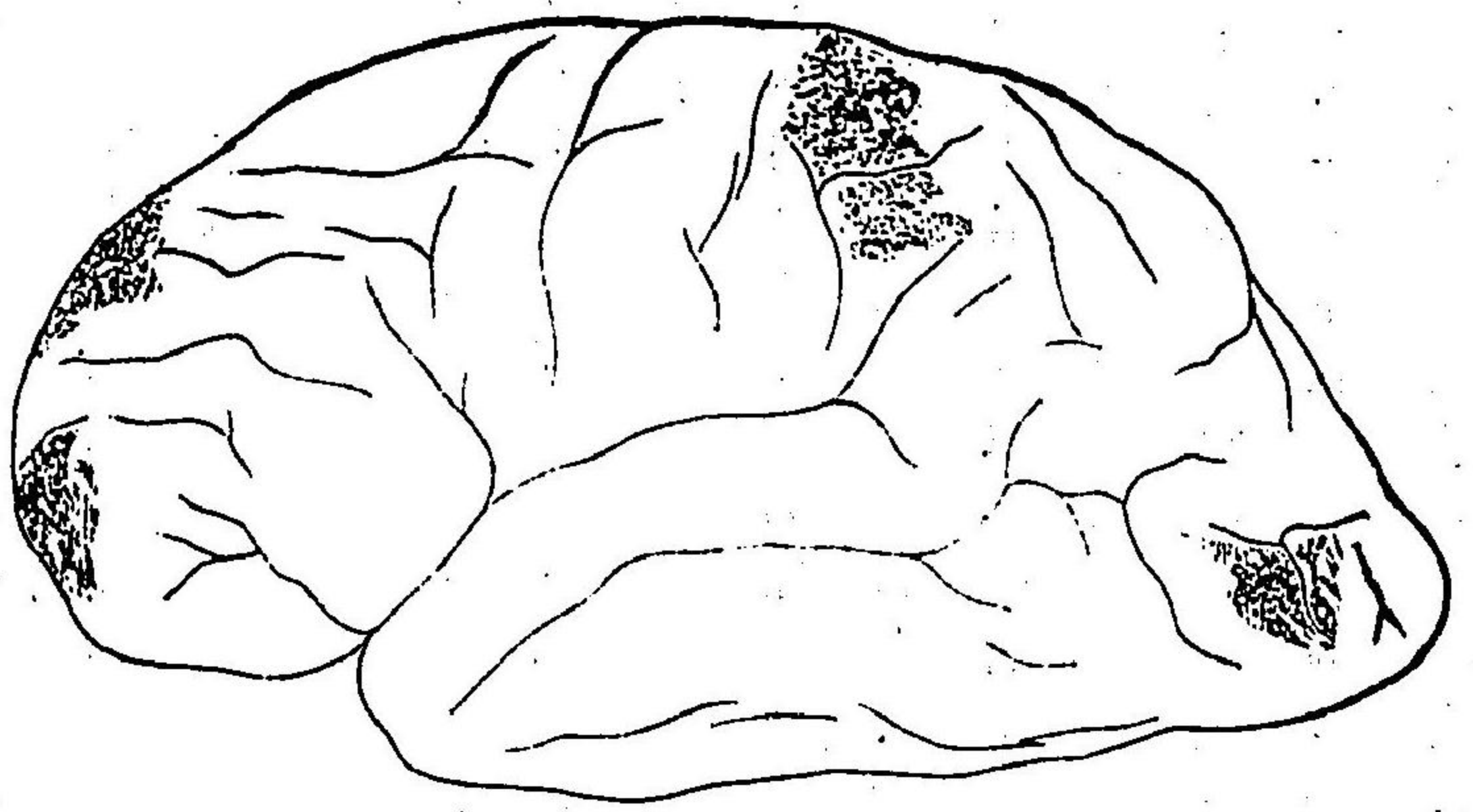
予曾テ東京市神田警察署ニ於テ一ノ負傷者ヲ檢視ス齡四十一歳土
 方職ノ強壯ナル男子ナリ著シク亞爾個保兒臭ヲ發シ口圍及ヒ胸部
 ニハ諸處ニ血液ヲ附着シ且鼻尖ノ左方ニ移動シテ鮮血ニ染ムヲ見
 ル依テ先ツ防腐的ニ鼻ヲ洗滌シテ之ヲ檢スルニ軟骨部ハ硬骨部接
 際ノ近傍ヨリ斷離シテ唯左鼻翼ノ連續ヲ殘存スルノミ創縁稍ヤ不
 正ニシテ少許ノ皮下溢血アリ因テ其挫創ナルヘキヲ察シ負傷ノ原
 因ヲ訊問セシニ同業者ト同酌中或事故ノ爲メ口爭ヲナシテ遂ニ格
 闘ノ際鼻ヲ咬傷セラレタリト云フ亦以テ一例トナスヘキ乎

〔丁〕 神經中樞ノ震盪

〔二〕 腦震盪 ハ頭部ニ被ムリタル鈍器ノ暴力ニ因ル損傷ニノ或ハ
 單獨ニ發スルアリ或ハ他ノ損傷ヲ合併スルモノアリ從來其解剖的變
 化ノ明瞭ナラサルヲ以テ之ヲ官能的傷害トナセシモ近時グッセンバウ

エル氏ノ驗明ニ據レハ頭蓋ノ打撃ニ由テ發スル腦震盪後ハ毎ニ「ジ
 ビー氏導水管ノ附近及ヒ第四腦室ノ底部ニ於テ腦質ノ破裂外傷性軟
 化竈或ハ小出血ヲ見ルト又「ホルリソングル氏ニ據レハ此軟化竈ハ數週
 日後ニ至リテ尙ホ後卒中ヲ誘起スト云フ然レ經驗ニ依レハ稀ニハ強
 劇著明ナル腦震盪症狀ヲ發スルモ死後解剖上ニ證スヘキ腦損傷ノ痕
 跡ハ毫モ之レナキモノアリ故ニ如此場合ニ於テハ直達若クハ介達ノ
 暴力ヲ頭蓋ニ被ムリタルノ證言ト精細ナル解剖検査ヲナセシモ卒然
 ノ致命原因ト認ムヘキ變化ナキコトノ證明アル際ニ限リ腦震盪ヲ以
 テ致命ノ原因トナスヲ得ヘシ但心筋質ノ變性アルモノ及ヒ他ニ致命
 セシムヘキ重傷アルモノニ在リテハ假令卒然致命スルモ直チニ腦震
 盪ヲ以テ其原因ト爲スヲ得サルモノトス
 單純ナル腦震盪ハ腦挫傷ヲ合併セル腦震盪ト區別セサル可ラス單純
 腦震盪ノ症狀ハ負傷ノ直後昏睡状態ニ陥リ脈搏緩徐呼吸微弱トナリ
 瞳孔ハ反應鈍ク嘔吐、痙攣ヲ發シテ死亡シ或ハ數分時若クハ數日或

第 四 圖



大脳表面
ノ挫傷
(毛細管
性溢血)
軟腦膜ヲ
除去セル
モノ
(ヤット
リッヒ氏
法醫書ニ
據ル)

ハ、數週日失神状態ニ在
 ルノ後回復スルモ健忘
 症ヲ有シ且知覺運動及
 ヒ精神ノ官能上ニ障害
 ヲ殘スコト間々之レア
 リ故ニ腦震盪豫後ノ鑑
 定ニハ頗ル注意ヲ要ス
 腦震盪ハ大脳面ノ状
 態ニ類スルモノアリ
 腦震盪ハ殊ニ腦挫傷或
 ハ腦質ノ破潰ヲ合併ス
 ル者多シ此合併傷ハ前
 頭葉ノ下前部、顳葉ノ
 尖端及ヒ外面、後頭葉ノ
 最後部及ヒ延髓ニ於テ

殊ニ屢發見ス抑モ腦挫傷トハ罌粟大ノ毛細管出血ヲ云フ然レ其數多ク且密ナルヲ以テ軟膜ヲ除去スルトキハ屢腦皮質中ニ稍ヤ深ク進入セル灰白色ノ大ナル出血竈ヲ腦表面ニ目撃ス又第四腦室ノ壁及ヒ其附近ニモ往々外傷性出血ヲ見ル但腦挫傷ハ高處ヨリ墮落シテ腎部ヲ地ニ突ク如キ場合ニ於テモ反對激動ノ爲メ發スルコトアリ

〔ベルグマン氏ノ說ニ據レバ腦挫傷ハ必ス腦膜内出血ヲ合併ス若シ腦ノ内部ニ於テ腦膜内溢血ヲ合併セサル單純新鮮ノ溢血竈アラハ外傷性ニアラス自然卒中ト考察スヘシ

腦挫傷ハ治愈後所謂黃板(黃色ノ屑)ヲ殘留ス之レ遠ク生前ニ於テ被ムリタル頭部ノ損傷ト或腦障害トノ關係ヲ判斷スルニ就テ頗ル重要ノ解剖的發見トス但腦損傷ノ結果トノ往々糖尿病ヲ發スルコトアリ

〔三〕**脊髓震盪** ハ解剖ノ成績全ク陰性ナルモノアリ此症ノ鑑定ハ腦震盪ト同一ノ注意ヲ要ス抑モ脊髓震盪ハ背部或ハ臀部等ニ激動衝突ヲ受ル後發スル症狀ニシテ負傷後直チニ發スルアリ或ハ時日ヲ經ル

後漸次ニ發スルアリ其負傷直後ニ發スルモノハ皮膚顔面ノ蒼白、知覺運動ノ麻痺、大小便失禁、心動呼吸ノ衰弱等其主徵ニシテ恐クハ脊髓實質中ノ出血ニ基因スルモノナルヘク又脊髓ノ局部性破裂或ハ脊椎管内ノ出血ヲ合併スルモノアルヘシ

負傷直後ニハ毫モ症狀ヲ發セサルカ將タ唯輕易ノ症狀アリシモノ、時日ヲ經ル後不明ノ初期ヲ以テ重症即チ四肢ノ痿弱麻痺、背部ノ疼痛、知覺異常等ヲ發スルモノアリ此症ニ就テ以前被ムリタル損傷ト關係アルヤ否ヲ鑑定スルハ極テ困難ニシテ解剖成績モ亦大抵陰性ナリ此症ハ輕易ノ原因ニ由テ發スルモノアリ又鐵道ノ過失即チ瀛車衝突等ノ爲メ發スル者最モ多キヲ以テ鐵道麻痺ト名ク往々智慮感覺ノ領地ニ於ル進行性ノ衰弱狀態及ヒ外傷性癲狂ノ如キ腦症狀ヲ合併スルモノアリト雖大抵ハ脊髓症狀ヲ主徵トナス但外傷性腦症狀ハ恐クハ瀛車衝突ノ際發シタル驚愕ノ精神上感動モ亦其一因タル可シ豫後ハ輕症ト雖必ス注意シテ鑑定スヘシ

(三)胸廓ノ震盪 モ亦往々器官ノ損傷全ク之レナキ者ニ於テ重症ヲ誘發シ或ハ胸腔内迷走神經ノ刺戟ニ因テ心動過止シ以テ死ニ至ルコトアリ

(四)下腹ノ震盪 ハ血管神經殊ニ内臟神經ノ麻痺ニ由テ突然腹部ニ充血シ他部ニ繼發性貧血ヲ發シ或ハ心動過止ニ由テ致命スルコトアリ然レ下腹殊ニ腸血管ノ著シキ充血ノ外解剖上ニハ一モ變化ヲ認メス但臍ノ損傷後ハ往々糖尿病ヲ發スルコトアリ

(戊) 臟器ノ破裂

臟器ノ破裂ハ高所ヨリ墜落、固體ノ衝突、氣車馬車ノ轢過及ヒ衝突、器械ノ壓搾等ノ如キ大暴力ニ由リ或ハ拳打又ハ足蹴ノ如キ暴力ニ因リテ發スル胸腹臟器ノ破裂ニシテ法醫ノ鑑定ヲ要スルモノ間々之レアリ大暴力ノ侵襲ヲ被リタルモノニ在リテハ其鑑定肯テ難事ニアラスト雖拳打足蹴ノ如キ暴力ノ劇烈ナラサルモノ又ハ剖檢ニ方リテ偶然發

見セシ破裂ニ在リテハ其生前ナルカ將タ死後ナルカ又自然破裂ナルカ或ハ外傷性ナルカヲ鑑定スルハ蓋シ容易ナラス

内臟器官ノ病的變性ニ罹ルモノハ或ハ自然破裂ヲ生シ又ハ輕易ノ外力ニ由テ破裂ヲ來スコトアリ故ニ破裂ノ自然ナルカ或ハ外傷性ナルカヲ鑑定スルニハ必ス其組織ニ變性アルカ否ヲ調査セサル可ラス但皮膚ハ頗ル抗抵強キモノニ又内部空洞ノ臟器ハ其充滿ノ度如何ニ關スルモノトス

肝脾及腎等ノ如キ腺肉性器官ハ比較的破裂シ易キモノナリ若シ被囊ト共ニ破裂セハ腹腔内ニ出血スルモ大抵輕易ナル外力ニ由ルモノハ小ナル被囊下破裂ヲ生シ囊下ニ溢血ヲ生シテ緊張膨突ス腹腔内出血モ亦大量ナラサルモノ多シト雖若シ其量大ナルハ高度ノ全身貧血症狀ヲ發シテ致命ス

此貧血症狀ハ破裂ノ生前ニ在ルカ將タ死後ニ在ルカヲ鑑別スルノ要徴トナスヘシ之レ死後ノ破裂ニ在リテハ假令ヒ僅少ノ腹腔内出血ヲ

發スルモ決シテ全身ノ貧血症狀ヲ發スルカ如キ大出血ヲ生セサレハナリ然レ被傷者若シ大出血前反射性心臟麻痺ニ由テ致命セハ出血ハ大量ニ至ラサルモノトス

脾臟心臟及ヒ大血管モ病的變性アルモノハ往々自然破裂ヲ生スルコトアリ心臟ニ在リテハ通常左心室ニ其周圍ニ溢血ヲ呈ス又心臟若クハ大血管ノ心囊内ニ在ル部分ノ破裂ニ其全厚徑ニ徹シ心囊共ニ破裂セサルキハ心囊内ノ出血直チニ凝固シ心臟ヲ壓迫スルヲ以テ心臟收縮ノ狀態ニ於テ致命スルモ心囊共ニ破裂スルカ或ハ大血管ノ心囊外ニ在ル部分ノ破裂ニ在リテハ出血ニ因リ致命スルヲ常トス

死體検査ニ方リテ如此破裂ヲ發見シ自然破裂ナルカ將タ暴力ニ因ルカノ鑑定ヲ要スル場合ハ必ス實質ニ變性ノ有無ヲ詳檢スヘシ之レ既ニ病的變性アリテ破裂ノ素因ヲ有スルモノナルトキハ輕易ノ暴力例之ハ足蹴ニ由テ破裂ヲ生スルコトアレハナリ

腎臟大動脈氣管及ヒ肺ノ直達外力ニ因ル破裂ハ稀有ニ大抵ハ他ノ

重傷ヲ合併シ胃ハ衝突打撃或ハ墮落等ニ由テ單獨ニ或ハ他ノ損傷ト合併シテ破裂ヲ來スコトアリ

腸管ハ直達外力ニ由テ破裂スルコト稀ナリト雖脱腸ハ法醫ノ鑑定ヲ要スルコト屢之レアリ之レ通常暴力又ハ過劇ノ勞働ニ因テ脱腸ヲ生シタリヤ否ノ問題ナリ抑モ勞働又ハ暴力ニ由テ急ニ脱腸ヲ生スルニハ豫シメ脱腸門ノ形成ナル可ラス然キハ勞働ノ際腹筋ノ収縮又ハ暴力ニ由ル腹部ノ壓迫ニ因テ腸ヲ脱腸門ニ壓入シ以テ脱腸ヲ發スルコトアルヘシト雖如此ハ既ニ脱腸ノ素因ヲ有スルモノトス又既ニ小脱腸アルモ會テ其症狀ヲ發セサルモノ勞働或ハ暴力ニ由テ増大スルアリ或ハ詐テ其發生ヲ之ニ歸セントスル者アリ鑑定上注意セサル可ラス

泌尿生殖器中腎臟ハ既ニ肥大セリ膀胱ハ其緊滿ノ際下腹部ニ衝突打撲ヲ被ムリテ破裂ヲ生スルコトアリ翠丸ノ鈍器ニ因ル挫傷ハ皮膚ニ損傷ナキモ「シヨック」症狀ヲ發シテ危險ニ陥ルコトアリ子宮破裂ハ妊娠子宮ニ發スルモノニシテ墮胎又ハ中毒等ノ嫌疑ヨリ屢法醫ノ問題トナルコトアリ

各其條下ニ説明スヘシ妊娠子宮ノ自然破裂ハ骨盤ニ不良ノ關係ヲ有
スル者ニ於テ分娩機發作ノ際發スルヲアリ之レ殊ニ子宮頸部ニ多ク
ノ底部ニ來ルハ稀ナリ但シ妊娠セル子宮又ハ喇叭管ノ破裂ニノ腹膜
モ共ニ破裂スルキハ急性ノ全身貧血症狀ヲ發シテ致命スルモノトス

(己) 骨折及脱臼

骨折ハ鈍器ニ由ル直達或ハ介達ノ暴力ニ因テ生シ直達暴力ニ由ルモ
ノハ骨上ニ在ル軟部ニ皮膚剝脱及ヒ皮下溢血ノ如キ損傷ヲ生シテ暴
力侵襲ノ部位ヲ表シ骨折部ノ廣狹ハ侵襲器具ノ大小ト暴力ノ強弱ニ
關ス然レ骨折ヲ生スルノ難易ハ各人ノ骨格ニ付キテ差異アルノミナ
ラス同骨格ト雖年齢ノ増加ニ隨テ硬度ヲ増シ從テ脆性トナルヲ以テ
幼年者ニ比スレハ成長セル者ハ骨折ヲ生シ易キモノトス但シ骨ニ病
的變性アルモノハ自然骨折ヲ生シ或ハ輕易ノ外力ニ由テ骨折ヲ生ス
ルコトアリ

四肢ノ單骨折ニ付キテ法醫學上ノ要旨ハ假骨質全ク硬化シ其肢回復
シテ再ヒ使用ヲ得ルニ至ル日數ノ長短ニ關ス此日數ハ正當ノ療法ヲ
加ヘ順當ノ經過ヲ爲スモノニ在リテハ通常指骨ハ二週日前膊骨ハ五
週日上膊骨ハ六週日脛骨ハ八週日腓骨ハ七週日上腿骨ハ八週日ヲ要
ス

頭蓋ハ體ノ高位ヲ占メ且被包セサル部ナルヲ以テ格闘等ノ際殊ニ損
傷ヲ被ムリ易ク其骨折ハ屢法醫ノ問題トナルモノナリ又其骨折ノ形
狀ニ由テ時ニ成傷器具ヲ察知シ得ヘキモノアリ或ハ骨折ノ方向ニ由
テ暴力侵襲ノ部位及ヒ方向ヲ推測シ得ルモノアリ

忽布滿氏曰頭蓋骨破裂ハ暴力ヲ被ムル瞬間ニ於テ其兩緣哆開シ壓力
去ルノ際一方ニハ其間ニ硬膜ヲ疋ミ他方ニハ毛髮等ヲ疋ミ死體腐敗
シ他組織崩潰スルモ尙ホ殘留シテ負傷時ニハ軟部ニ創傷アリシ確徵
ヲ呈シ且成傷器具ハ有角物ニノ唯一小局部ヲ侵襲セシヲ推知セジム
ルコトアリト

骨折及脱臼

頭皮及ヒ硬腦膜ニ損傷ヲ合併セサル單純ノ骨折或ハ破裂ノ最重徴ハ殊ニ頭蓋側部ノ損傷ニ因テ發スル出血之レナリ即チ中腦膜動脈ノ枝別ハ骨ト共ニ断裂シテ頭蓋骨ト硬腦膜ノ間ニ多量ノ出血ヲ發シ以テ大腦表面ニ強力ノ壓迫ヲナス者ニ其主徴ハ脈搏寬徐トナリ一分時間ニ四十搏以下ニ降ルコトアリ而シテ此症ハ出血ノ多少即チ血管ノ大小ニ由テ負傷後直チニ發シ昏睡状態ニ陥リテ致命スルアリ或ハ負傷後數時間ニ漸次ニ發來シ終ニ致命スルモノアリ其他劇烈ノ出血ハ又硬腦膜靜脈竇ノ損傷ニ由テ發スルコトアリ但頭蓋骨ノ損傷ナキモ大腦半球ノ内上縁ニ在ル軟腦膜ノ小靜脈ハ頭蓋ニ激動ヲ被ムルノ際断裂スルコトアリト雖通常ハ危篤ノ壓迫症狀ヲ發スルコトナシ鈍器ノ侵襲ニ因ル頭蓋骨々傷ハ暴力ノ種類ト強弱トニ由テ甚タ種々ナリ打撃ニ因ル穿孔骨折ハ其形狀ニ由テ成傷器具ノ形狀ヲ察知スヘキモノアリ又頭蓋ノ大部分或ハ全頭蓋ノ破碎ハ猛烈ノ暴力ニ由リテ生シ其骨片ニ因リテ内方ヨリ軟部ヲ損傷スルコトアリ破裂ハ急劇ノ

壓迫ヲ被ムリテ頭蓋ノ破裂スルニ由リ反對骨折ハ暴力ノ侵襲ヲ被ムリタル點ト相對スル部殊ニ頭蓋基底ニ多ク來ルモノトス
 ジヤメス氏會テ一例ヲ報告セリ即チ齡三十歳ノ男子午後六時頃石ヲ以テ左顳額部ヲ毆打セラレシモ卒倒セス自宅ニ歸リテ家族ト共ニ晚餐ヲ終リ然後加害者ノ家ニ到リ十一時迄談判シ次テ家ニ歸リシカ此夜二時ヨリ苦悶ヲ訴ヘ四時ニ至リテ終ニ死去セリ之ヲ剖檢セシニ左顳額骨鱗狀部ニ陥沒セル骨折アリ中腦膜動脈枝ヲ損傷シ骨ト硬腦膜ノ間ニ多量ノ溢血アリ大腦左顳頂葉ノ皮質ニ一フランク大ノ陥沒ヲ發見セリト
 予亦會テ學友長田氏ト同一ノ實驗ヲナセリ齡二十歳ノ強壯ナル男子某二月十八日午後七時頃日本橋區馬喰町四丁目ニ於テ數人ト爭鬪ノ末卒然人事不省ニ陥リタリト云フ同八時之ヲ診スルニ顔面潮紅シ眼結膜モ亦著シク發赤シ瞳孔ハ甚シク散大シ呼吸寬徐ニノ肝聲ヲ帯ヒ脈不正ニノ時々結代シ其數五六十至ノ間ニ在リ體温ハ稍

ヤ昇騰シ精神深ク昏睡ニ陥リ毫モ刺戟ニ感應セス腹部ハ異常ナキ
モ膀胱充滿シ尿脱漏シテ衣褲ヲ濕ス頭部其他全身中ニ外傷ノ痕跡
ヲ認メス

右診査後蠟殼町岩佐病院ニ於テ治療セシモ此夜四時即チ負傷後凡
ソ十時間ニテ遂ニ死去セリ

剖檢ノ際頭皮ヲ切開シテ檢スルニ皮下組織中ニ多量ノ暗黒ナル溢
血アリ稍ヤ凝泣シテ其組織ニ浸潤彌蔓シ前方ハ前額部ヨリ後方ハ
外後頭結節ニ達シ兩側ハ左右ノ顳額部ニ亘リ特ニ左顳額部ニ於テ
最モ多量ナルヲ認ム尋テ帽狀腱膜ヲ切開スルニ該膜ト骨面トノ間
亦多量ノ溢血アリテ半ハ凝泣シ半ハ流動シ全頭蓋冠部ニ彌蔓シテ
左顳額部ニ在リテハ顳額筋ノ實質内ニ浸潤シ頭蓋骨ヲ押壓スレハ
血液愈増加スルヲ見ル故ニ其血液ヲ取テ之ヲ器ニ貯エ詳カニ骨面
ヲ檢スルニ右顳頂結節ノ稍ヤ前上方ヨリ斜メニ右冠狀骨縫ニ達シ
更ニ屈折シテ矢狀骨縫ノ前端ヨリ左冠狀骨縫ニ沿ヒ蝴蝶骨大翼ニ

達スル大ナル骨破裂アリ全長十七仙米ヲ有シ骨ハ容易ニ動搖シテ
裂隙彫開シ是ヨリ暗黒ノ血液多量ニ流出ス次テ頭蓋冠部ヲ鋸斷シ
テ徐ニ之ヲ去リ以テ頭蓋腔内ヲ檢スルニ硬腦膜ノ表面ハ都テ半流
半凝ノ血液ヲ被ムリ殊ニ左顳額部ニ於テ多量ノ暗黒凝血ヲ有シ且
顳頂部ノ骨破裂ニ應スル部ハ硬腦膜モ亦横徑ニ破裂シテ其長サ凡
ソ二寸許ヲ算シ此裂孔ヨリ多量ノ暗黒凝血流出ス是ニ於テ硬腦膜
ヲ切開シ大脳表面ヲ檢スルニ總テ暗黒ノ血液ヲ被ムリ左右顳頂葉
上部ハ溢血ノ壓迫ニ由テ扁平トナリ此部ニ多量ノ暗黒ナル凝血ヲ
有シ其量殊ニ左側ニ多キモ右顳頂葉ノ上部ハ腦質稍ヤ褐赤色ニ變
ス之ヲ切斷シテ其實質ヲ仔細ニ檢査スレハ皮質中ニ無數ノ粟粒大
乃至麻實大ノ溢血アリテ數個ノ廻轉ニ彌蔓スルヲ認ム其他ハ篩骨
ノ篩狀板部ニ少量ノ暗黒ナル凝血ヲ存スルノミニシテ大脳實質小
腦延髓四疊體ワオル氏橋及ヒ底面ニハ異常ナシ又頭蓋冠部ヲ清洗
シテ詳檢スレハ前記骨破裂後端ノ内上方ト外下方ヨリ各一條ノ骨

破裂ヲ生シ後方ニ至テ左右相合シ一ノ不全橢圓圈ヲ成シ其全周徑十九仙迷半橫徑五仙迷縱徑六仙迷ヲ算シ圈ノ内部ハ頭蓋腔内ニ向テ稍ヤ陷凹セリ但帽狀腱膜下ノ溢血ト頭蓋腔内ノ溢血ハ總計二百七十瓦ヲ算ス(皮下溢血ハ算入セス)

因ニ曰此損傷ハ爭鬪ノ際杉ノ大ナル丸棒ヲ以テ毆打セラレタルモノナリト

右ノ二例ニ由テ之ヲ見ハ鈍器ニ因ル頭蓋骨々折ハ皮膚ニ損傷ナキモ危險ノ出血ヲ發スルヲ知ルヘシ

頸椎ノ骨折及ヒ脱臼ハ頭上ニ重キ物體落チ來ルカ或ハ高處ヨリ落テ頭ヲ地上ニ突クカ或ハ頸ヲ強ク屈曲又ハ展伸スルカ或ハ轉振スル等ニ由テ發シ或ハ其他直達若クハ介達ノ暴力ニ由テ發シ且同時ニ脊髓ノ損傷挫潰ヲ合併スルヲ以テ早晚死ヲ免カレサルモノトス
肋骨及ヒ鎖骨ノ骨折ハ其尖銳ナル破骨片ヲ以テ内方ニ在ル器官即チ動靜脈幹肺及ヒ心ヲ損傷スルキハ殊ニ危險トス若年者ノ肋骨ハ頗ル

彈力性ヲ具フルヲ以テ著大ノ暴力ヲ被ムルモ破折セサルコトアリト雖老齡ノ人ニ在リテハ骨質硬脆ニノ比較的僅少ノ暴力ニ由リ骨折ヲ生スルコトアリ又暴力ノ侵襲面廣ク且劇烈ナルキハ同時ニ數多ノ骨折ヲ發スルコトアリ但肋骨々折ハ其破片ニ因テ肋間動脈或ハ内乳動脈ヲ損傷シ爲メニ大出血ヲ來スコトアリ

齒ノ損傷中全齒列ニ亘ルモノハ曾テ之レナシ一二齒ニ止マルモノハ肯テ危險ナク唯多少齟齬機能ヲ害スルニ過キス舌骨ノ骨折傷ハ甚タ稀有ニ屬シ喉頭軟骨ノ化骨セルモノニ在リテハ頸ノ絞扼毆打足蹴又ハ車輪ノ轆過等ニ由テ折傷ヲ生スルモノトス然キハ聲帶ノ水腫、頸ノ皮下氣腫、破折片ノ轉位等ニ由テ呼吸困難ヲ發シ或ハ後日其腐骨片ノ氣道ヲ狹窄スル爲メ呼吸困難ヲ來スコトアリ

脱臼殊ニ四肢ノ關節脱臼ハ骨折ト同一ノ侵襲ニ因テ來リ法醫ノ鑑定問題トナルハ其肢ノ再ヒ使用ヲ得ルヤ否若シ再ヒ使用ヲ得トセハ幾日間ノ休業ヲ要スル乎ト脱臼ハ正ニ暴力ニ因ルカ將タ自然脱臼ニ非

サル乎ノ問題之レナリ抑モ脱臼ハ速カニ整復シテ正當ノ療法ヲ加ヘ
ハ再ヒ其肢ノ使用ヲ得ヘシト雖大ナル關節ニ在リテハ數週日ノ安靜
加療ヲ要スルヲ常トス又休業ヲ要スル日數ハ脱臼ノ部位ト營業ノ如
何ニ關シテ同一ナラス自然脱臼即チ常習脱臼ハ反應症狀ナキニ由テ
鑑定スルヲ得ヘシ

骨傷ノ爲メ危重ノ骨炎ヲ發シタリト訴フル場合ニ於テ其骨炎ハ正ニ
骨傷ニ基因スルヤ否ヲ鑑定スルハ頗ル困難ナリ此症ニ就テハ暴力ノ
強弱ト負傷前ノ健康狀態ト負傷者ノ血族ヲ詳カニ調査スヘシ即チ負
傷者ハ健康ノ血族ニノ負傷前健康ナリシ者強劇ノ暴力ヲ被ムリテ骨
傷ヲ生シ次テ直チニ骨炎ヲ繼發シタル者ニ在リテハ其骨炎ハ骨傷ニ
基因スト斷定シ得ヘキモ若シ然ラスノ素因ヲ有スル人ニ在リテハ其
骨傷ハ唯炎症性病機ノ誘因ヲ與ヘタル者ト認ムヘキモノトス

第二 銳器ニ因ル損傷

銳器トハ即チ有刃ノ器具ヲ云フ之ニ因テ生スル損傷ハ切創及ヒ割創
之レナリ

(一)切創 ハ刀劔、剃刀、剪刀或ハ硝子片等ノ如キ總テ銳刃ヲ有スル器
具ニ由テ生スル創傷ニノ大抵血管モ共ニ切斷セラレ出血甚シク其形
狀ハ通常直線狀ヲナシ創縁ハ銳利平滑ニ挫潰ナク創面ハ創底ニ進
ムニ隨テ漸次楔狀ニ狹窄シ創底ニハ組織ノ架橋ナク中央部最モ深ク
シテ兩端ニ進ムニ隨ヒ順次其深徑ヲ減ス

創底及ヒ創縁等ノ形狀ハ種々ノ原因ヨリ此定形ヲ變ス左ノ如シ
即チ創縁ノ形狀ハ器及ノ銳鈍ニ關シテ異ナリ器及ノ銳度減スルニ隨
テ創縁ハ愈不正齒牙狀ヲナシ且一部分ハ裂斷シテ恰モ挫創或ハ裂創
ノ如キ看ヲ呈シ又皮膚ニ皸裂アルトキハ或ハ屈折シ中斷シ直線狀ヲ
ナサ、ルヲ常トス又皮膚ノ創縁ハ組織纖維ノ方向ト併行ノ創ニ在
リテハ多ク離開セス直角ノ創ニ在リテハ哆閉最モ強ク又纖維ノ方向
表面ヨリ鉛直ニ深部ニ向テ走ル部即チ手掌足蹠等ニ在リテハ創ノ方

向ニ關セス殆ント哆開スルコトナシ筋ニ在リテモ亦皮膚ニ同シク筋纖維ノ方向ト直角ノ創口ハ最モ哆開シ舌及ヒ心臟ノ如ク筋纖維ノ交叉錯綜セル部ノ筋創ハ哆開甚タ少ナキモノトス

創ノ深淺ハ力ノ強弱ト器及ノ銳鈍ト組織ノ硬軟ニ關シ創底ノ形狀ハ器具侵襲ノ方向ニ關ス即チ體ノ表面ニ對シテ傾斜ノ方向ナルトキハ瓣創又ハ失肉創ヲ生シ小ナル突出部、指頭、鼻尖ノ如キハ全ク切斷セラ

ル、コトアリ

稍ヤ大ナル血管及ヒ海綿組織ノ切創ハ出血殊ニ甚シク又頸部ノ切創中喉頭ノ創傷ヲ合併スルモノハ聲門水腫ヲ繼發シ或ハ血液ヲ吸入シテ爲メニ窒息ヲ來シ或ハ之ニ由テ肺炎ヲ繼發シ體腔ニ穿徹スル切創ハ貴要ノ臟器ヲ損傷スル等種々ノ危險症狀ヲ繼發スルコトアリ切創ハ大抵一二週乃至三四週日以内ニ第一期癒合ヲ以テ治スルヲ得ヘシト雖創傷傳染病ニ罹ルトキハ固トヨリ例外トス但鑑定上ニハ治後遺ス所ノ患害ニモ注意セサル可ラス

(二)割創 切創ニ比スレハ強大ノカト重キ器具即チ斧鋏ノ如キ器具ニ由テ生スルヲ以テ通常切創ヨリ重傷ニシテ且骨ヲ穿徹スルコト多シ而シテ其形狀ハ成傷器具ノ性質ト侵襲ノ方向ニ關シテ異ナリ即チ器具薄クノ且其及銳利ナルニ隨ヒ創口ハ倍々切創ニ類シ其創縁ハ銳利平滑ナルモ器背甚タ厚ク兩面銳角ニ相會シテ鈍及ヲ形成スルカ如キ器具ニ由テ生スル割創ハ侵襲ノ際其面ヲ以テ幾許カ軟組織ヲ挫潰シ骨質ニ穿入スルニ方リ之ヲ破碎シテ裂隙近傍ニ蔓延シ恰モ挫創ノ如キ形狀ヲ呈ス

器具侵襲ノ方向ニ由テ割創モ亦切創ノ如ク創口哆開ノ度ヲ異ニシ或ハ瓣創又ハ失肉創ヲ生ス

頭蓋ノ割創ハ頗ル危險ニシテ往々腦挫傷或ハ腦震盪ノ症狀ヲ發シ而モ骨質ニハ唯僅カニ外板ノミ淺キ小溝ヲ呈スルアリ或ハ骨ノ一部分破碎シ且陥没ヲ呈スルコトアリ

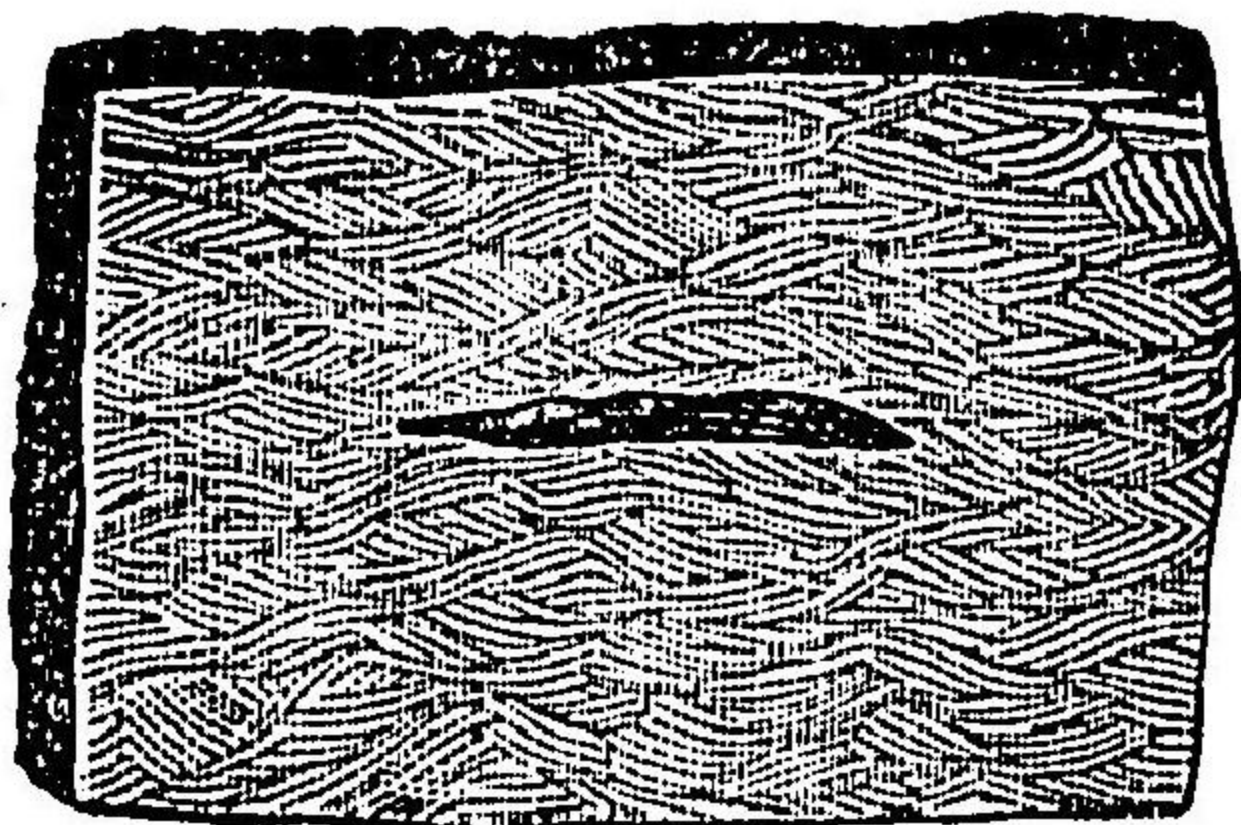
第三 刺器ニ因ル損傷

刺器ニ因ル損傷

及ヲ有スルト否トニ論ナク尖銳狹長ノ器具即チ刀劍圓錐小刀鎗身等ノ如キ器具ヲ其縱軸ノ方向ニ刺入シテ生シタル創傷ヲ刺創ト云フ大抵刺入口ト刺管トヲ有シ刺出口ハ有無不定ナリ

刺入口ハ其形狀ニ由テ使用器具ノ形狀ヲ斷定セシムルコトアルヲ以テ鑑定上最モ注意ヲ要ス殊ニ其形狀ト創縁ノ性質ニ就テ然リトス刺管ハ暴力ノ強弱ト器具ノ長短ト組織ノ硬軟トニ因テ同一ナラスト雖

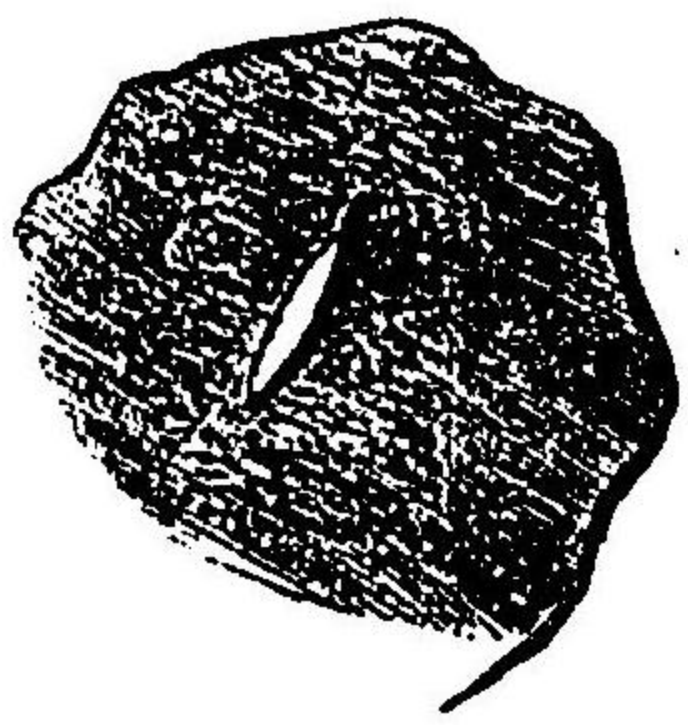
第五圖



ニ、五仙迷ノ直徑
チ有スル圓錐形鉄
桿ヲ以テ刺ケタル
破裂狀刺入口
(ホフマン氏 法醫
書ニ據ル)

要スルニ刺入口ヨリ深部ニ進ムニ隨テ狹小トナルモノ多シ然レ長キ器具ニ因ル穿徹刺創ニ在リテハ刺管ノ全部同大ナルモノトス又刺管ハ必スシモ穿刺ノ方向ト相一致スルモノニ非ス之レ骨或ハ身體

第六圖



刀背ニ及チ有スル
小刀ノ刺入口質物
大
(ホフマン氏 法醫
書ニ據ル)

ニ裝タル硬固物ニ逢フキハ器尖之ヲ避ケテ一方ノ組織ヲ排開進入シ以テ創管ノ方向ヲ變セシムレハナリ

刺入口ノ形狀ニ關シテハ「エル、ホフマン氏」ベ、デットリッヒ氏及其他諸氏ノ種々ナル試驗アリ即チ「デットリッヒ氏」ノ說ニ據ルニ刺入口ハ器具橫斷ノ形チニ隨テ同一ナラスト雖然モ必スシモ其形狀ト相一致スルニ非ズ唯兩側或ハ數側ヲ有スル器具ニシテ其角銳利ナルモノ即チ槍身等ノ如キ器具ニ由ル刺入口ノミ相一致シ之ニ由テ生シタル星芒狀創ノ星芒ノ數ハ器具ノ角數ニ應ス之レ其角ノ銳及ニ由テ組織ノ一部分ヲ切離スルニ基因スルモノナリ故ニ器具側面ノ數増加シ其角ハ鈍角ヲ以テ相會合スルニ至テハ之ニ由テ如此切離スルノ作用

ナシ甚々多數ノ側面及ヒ角ヲ有スル器具ニ由テ生シタル刺入口ハ圓錐形ノ器具ニ由テ生シタル刺入口ト同一ニシテ紡錘形ノ創口ヲ生シ

創縁銳利ニシテ多少相離

開シ輕ク弓狀ニ彎曲シテ

兩端ニ進ミ銳角ヲ以テ相

會合ス唯皮膚分裂性弓裂

性ノ方向弓狀ノ數系統相

ヲナスチ云フ

集會スル部ニ於テノミ三

角形或ハ尖楔狀ノ創口ヲ

生シ其長軸ハ分裂性ニ隨

テ常ニ一定ノ方向ヲ有シ

而ノ其破裂ノ長短ハ皮膚

ノ分裂性ニ由テ生シタル

一定ノ限界内ニ於テ器具



一乃至六ハ刺器橫



斷ノ形狀



イ乃至ハ直上ノ



橫斷面ヲ有スル刺



器ヲ以テ爲セシ皮



膚ノ刺創

第七圖

(サットリッヒ氏ニ據ル)

ノ刺入セラレタル部ノ厚徑ニ比例スト

又片及或ハ兩及ノ器具即チ懷中小刀ノ如キ器具ニ由テ同一ノ破裂狀

刺入口ヲ生ス故ニ單ニ刺入口ノミニ由テ器具ノ片及ナルカ兩及ナル

カ圓錐形ナルカ將々多角形ナルカヲ鑑別スルハ頗ル困難ナリ加之懷

中小刀ニ由ル破裂狀創口ニ在リテハ其及ノ何レニ向ヒシカヲ知ルヲ

得スト雖刀背ニ兩角ヲ有スルモノ(即チ懷劍)出及包丁ノ如シハ三角形

ノ器具ト同一ニノ三放線狀ノ創口ヲ生シ其及ニ由テ生シタル一線ハ

背ノ兩角ニ由テ生シタル兩線ヨリ甚々長キヲ以テ之ヲ察知スルヲ得

ヘシ

又器具ノ角鈍キモノニ在リテハ比較的少數ノ角アルモノモ破裂狀ノ

刺入口ヲ生シテ其角ハ唯創縁ニ輕微ノ壓痕ヲ印スルノミ然レ骨ノ刺

創ハ常ニ正シク器具橫斷ノ形狀ヲ有シ頭蓋骨刺創ハ往々骨破裂ヲ合

併シ或ハ器具ノ尖端破折シテ骨中ニ殘留スルコトアリ

法醫刺創ヲ鑑定スルニ方リ該刺創ハ如何ナル器具ニ因テ生シタルモ

ノナルカノ問題ヲ得ルアリ或ハ多数ノ器具アリテ此中何ノ器具ヲ以テ該創ヲ與ヘシモノナルカノ問題ナルコトアリ此兩場合ニ於テハ必ス創口ノ形狀及ヒ創管ノ長短ト器具ノ大小形狀トヲ細カニ參照熟考スヘシ

前記デットリツヒ氏ノ試驗ニ據レハ器具ノ形狀即チ其横斷ノ形狀ハ刺入口ノ形狀ニ據テ大抵察知スルヲ得ヘシト雖若シ穿刺ノ力甚タ強ク刀柄ノ一部モ共ニ刺入セラル、キハ(例之ハ鎗ヲ以テ強力ニ刺シタル場合ノ如シ)之ニ由テ刺入口ノ形狀亦頗ル變化ス注意セサル可ラス

刺器ノ大小ニ就テハ其長短廣狹及ヒ厚薄ヲ定ムルヲ要ス即チ器具ノ長短ハ刺管ノ深淺ヲ以テ鑑定ノ標準トナスモ腹壁等ノ如ク壓迫ニ由リ陷沒スヘキ部ニ在リテハ短キ刺器ヲ用ユルモ穿刺ノ力強大ナルキハ其柄又ハ手拳ヲ以テ腹壁ヲ壓シテ陷沒セシメ爲メニ器尖ハ深ク後腹壁ニ達スルコトアリ故ニ爾他ノ關係ヲ詳查セサレハ獨リ刺管ノ深淺ノミニ依テ器具ノ長短ヲ鑑定シ得サルモノトス

然レ尖端ヨリ柄ニ近ツクニ隨テ漸次増大スル刺器ニ在リテハ刺入口ノ大小ニ由テ何ノ部分マテ刺入セシカラ察知スルヲ得ルコトアリ此場合ニ於テハ先ツ刺入口ノ創縁ヲ本位ニ整復シテ其直徑ヲ測定シ以テ器具ト比較スヘシ然レ狹長ノ尖器ニ由ル刺入口ハ常ニ其器ノ直徑ヨリ大ニ厚大ナル圓錐形器具ノ刺入口ハ其器ノ直徑ヨリ甚タ小ナルモノト知ルヘシ之レ皮膚ノ分裂性ハ自ラ限界ヲ有シ且刺入ノ際強ク緊張シ拔去ノ後再ヒ故ニ復スルヲ以テナリ又小刀ノ如キ有刃ノ器具ニ其刃甚タ鈍キモノ、刺入口ハ常ニ刀ノ廣徑ヨリ短キ破裂狀ノ創ヲ生スルモ其刃銳利ナルキハ刺入及ヒ拔去ノ際共ニ其刃ヲ以テ組織ノ一部ヲ切離ス故ニ其創口ハ却テ刀ノ廣徑ヨリ大ナルモノトス

頸部ノ刺創ハ我邦ニ在リテハ殊ニ自殺者ニ多シ之レ大抵前頸部ノ刺創ニノ氣管或ハ喉頭及ヒ動靜脈ヲ損傷シ或ハ神經殊ニ迷走神經及ヒ返廻神經ヲモ損傷ス然レハ速カニ致命スルモ神經及ヒ動脈ノ損傷ナク唯靜脈及ヒ氣道ヲ損傷スル者ニ在リテハ大出血ト空氣ノ靜脈中ニ

竅入スルト血液ノ氣道ニ流入スル危險アリ之ニ由テ速カニ死ヲ致サ
ルモ窒息、聲門水腫、異物性肺炎及ヒ皮下氣腫等ヲ發シテ爲メニ死ヲ
招クコトアリ然レ速カニ氣管切開術ヲ施サバ後害ヲ遺サズ死ヲ免カ
ル、コト少ナカラス

明治廿九年五月廿七日佐橋曉眼ナル一賤夫痴情ノ怨恨ヨリ下谷區
山伏町ニ於テ一婦人ヲ殺害シ次テ自殺ヲ企テ出刃庖丁ヲ以テ其氣
管ヲ刺シタルモ速カニ死ヲ得ズ煩悶中予ハ現場ニ臨檢シ判事ノ命
ニ依リ同人ヲ検査スルニ仰臥シテ窒息狀態ヲ呈シ顔面、頸、胸部ニハ
著シク皮下氣腫ヲ有シ兩手及ヒ衣服ハ鮮血ニ染ミ言語ヲ發シ得ザ
ルモ神氣全ク喪失セス呼吸甚タ困難ノ狀ヲ呈ス前頸部ヲ檢スルニ
喉頭結節ノ下方ニ於テ上下ニ走ル裂創狀ノ刺創アリ長徑凡ソ一仙
米ヲ有シ氣管ヲ穿透シテ呼氣ノ際ハ血性泡沫ヲ生ス依テ判事ノ許
可ヲ得テ速カニ上氣管切開術ヲ施シ「カニユーレ」ヲ挿入セシニ多量ノ
血液ヲ吹出シテ僅カ一二分時中ニ窒息症狀全ク消散シ大ニ爽快ノ

狀ヲ呈セリ仍テ「カニユーレ」ヲ頸ニ固定シ瓦設布ヲ被テ塵埃ノ吸入
ヲ防キ監獄ニ送致シテ獄醫ノ治療ニ委セシカ翌六月九日ニハ氣管
ノ創口既ニ閉鎖シ更ニ一週後ハ皮膚ノ創口モ全治シ一モ後害ヲ遺
サ、リキ(詳細ハ順天堂醫事研究会雜誌第二百七十五號參照)

胸部ノ刺創ニノ肺ト胸壁ト癒合病セサル部ノ肺ヲ損傷スルキハ往々
氣胸症或ハ大出血ヲ發シテ危險ニ陥ルコトアリト雖其刺創肺ノ深部
ニ達セス唯表層ノ損傷ニ止マリ且貴要ノ神經動脈ノ損傷ヲ合併セサ
ルキハ如此危險ナク又後害ヲ貽サス全治ヲ得ルモノトス

予曾テ芝區伊皿子町ニ於テ廿五歳ナル強壯男子ノ右側第四肋間乳
線部ニ被ムリタル刺創ヲ檢セリ之レ亦出刃包丁ヲ刺入セシ刺創ニ
ノ横位ノ破裂狀創口ヲ呈シ内端ハ鈍ニ外端ハ甚タ銳ニノ全長約三
仙米ヲ有セリ被傷者ハ床上ニ仰臥ノ別ニ苦悶ノ狀ナク呼氣ノ際僅
カニ血性泡沫ヲ生スルノミ故ニ其創ハ肺ノ表層ニ止マリ刀及ハ外
方ニ向フタルモノニノ且貴要ナル神經動脈ノ損傷ナキヲ知ルヘシ

加治木勇吉氏ノ治療ニ因リ三週日ヲ經テ後害ヲ貽サス全治ヲ得タ
リト云フ

胸部ノ刺創中心臓及ヒ大動脈其他ノ大血管ヲ損傷スル者ハ大出血ニ
因リ即死スルヲ常トス然レ「ヂットリ」氏ハ穿透性心臓刺創ヲ被ムリ
タル者六十歩行歩シテ然後斃レタルヲ實驗セリト云フ歐米ニ在リテ
ハ自殺者往々心臓部ヲ刺スト聞ク我邦ニ在リテハ自殺者ノ心臓ヲ刺
ス者極テ稀ナリ之レ東西自殺方法ノ異ナル一例乎
腹部ノ刺創中唯皮膚ニ止マルモノハ危険ナク且後害ナク治療ヲ得ヘ
キモ腹腔内ニ穿徹シ且内臓或ハ血管ヲ損傷スルモノハ甚シキ内出血
ヲ發シテ致命シ腸胃ヲ損傷スルモノハ其創口ヨリ腸胃ノ含有物腹膜
腔内ニ漏出シテ穿孔性腹膜炎ヲ發スルノ危険アリ但腸胃ノ穿孔部速
カニ近傍ノ組織ト炎症癒合ヲナシ以テ治療ヲ得ルコト間々之レアリ
其他細小ノ針ニ由ル刺創ハ腸胃ニ穿透スルモノモ肯テ危険ナク速カニ閉
鎖スルヲ常トス之レ心臓大血管ニ於テモ亦然リトス

外陰部ノ刺傷ハ大出血ヲ發シ或ハ生殖不能及ヒ交媾不能ヲ招クコト
アリ四肢ノ刺創モ亦動脈ヲ損傷スルキハ大出血ヲ發シ或ハ假性動脈
瘤ヲ生シ神經幹ヲ損傷スルキハ知覺麻痺或ハ運動麻痺ヲ貽スコトア
リ

第四 銃器ニ因ル損傷(銃創)

銃器ハ拳銃、施條銃銃發及ヒ平滑銃即チ無條銃等ニノ之ヲ裝填スルニ
一彈アリ數彈アリ其彈丸ノ大小形狀及ヒ物質(鉛、小石、鐵片等)亦各異ナ
リ之ニ由テ生シタル創傷ハ大抵射入口ト銃創管トヲ有シ此管盲端ニ
終ルアリ或ハ射出口ヲ有スルアリ而シテ此創傷ハ銃器ノ種類ト裝填ノ
方法ト射撃ノ方向及ヒ遠近ニ由テ甚タ種々ナリ
銃創ハ屢法醫上ノ問題タル者ニノ之ヲ鑑定スルニハ最モ精密ノ検査
ヲ要シ又其銃創ナルコト既ニ明了ナルモノニアリテハ射撃ノ距離及
ヒ方向ト銃器ノ種類并ニ彈丸ノ物質ヲ鑑定スルヲ要ス

射入口ハ射撃ノ遠近ニ由テ異ナル而已ナラス同距離ニノ同種類ノ彈丸ノミニ因ル硝薬ノ作用射入口ト雖常ニ同一ナルモノニ非ズ然レ之ヲ概括セバ圓形ニノ多少ノ實質缺損ヲ生シ或ハ不正星芒形ノ破裂ヲ呈スルモノ多ク線狀破裂ヲ生ズルハ稀有ニ屬ス

近距離ノ射撃ニ由ル射入口ニ於ル組織ノ變化ハ唯彈丸ノミナラズ硝薬及ヒ栓子ノ作用ヲ合併ス故ニ此變化ノ有無ニ由テ射撃ノ遠近ヲ測知スヘシ

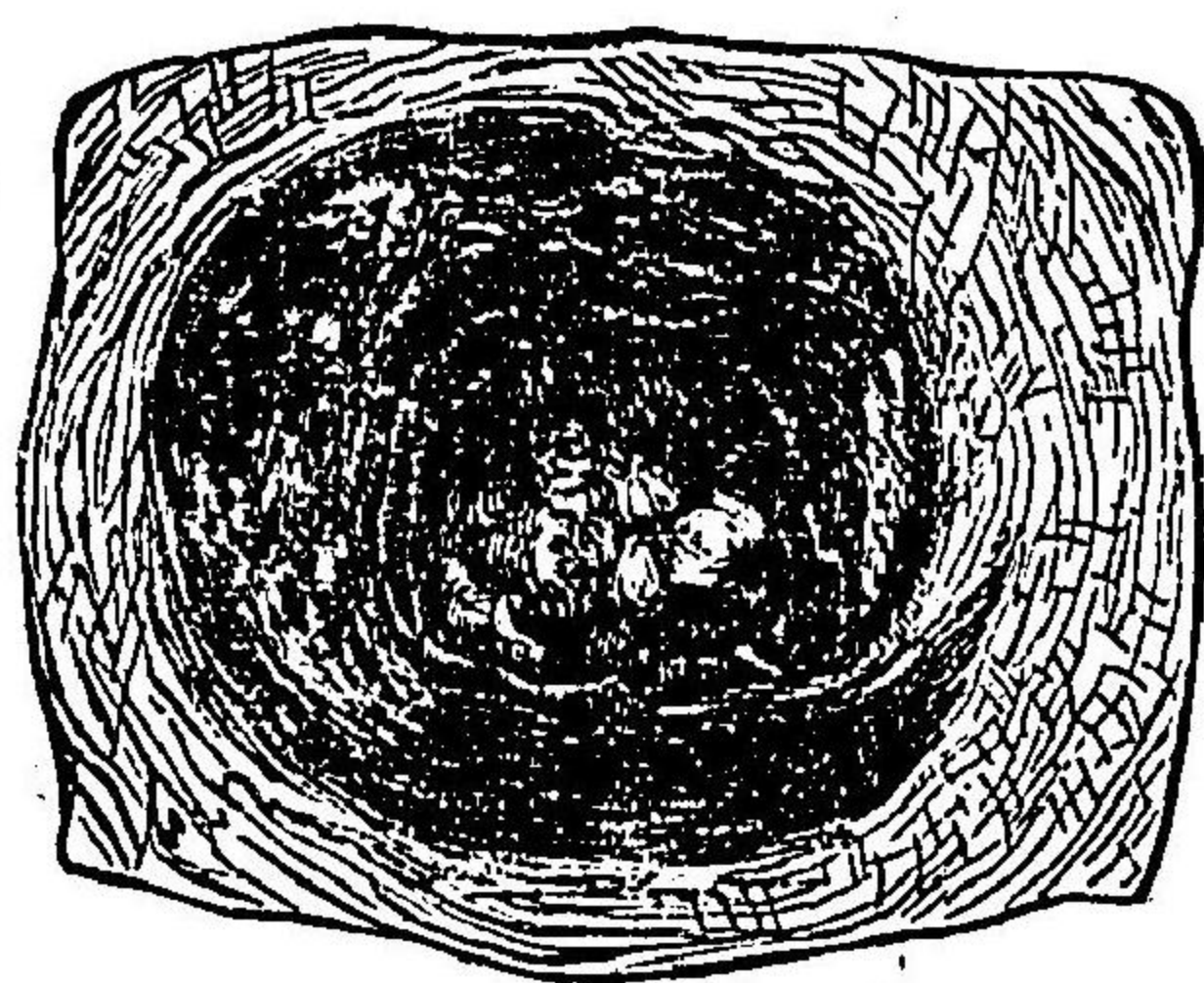
銃筒内ニ裝填セル硝薬ノ一部分爆發セハ則チ其瞬間ニ於テ未タ爆發セサル所ノ硝薬ト彈丸ヲ前方ニ發送スル動力ヲ生ス然ニ銃筒長キカ或ハ旋條ヲ有シテ銃丸ノ進行比較的遅徐ナルルハ硝薬ハ全ク爆發シ盡ルモ若シ之ニ反スル銃ナルトキハ硝薬ノ全部爆發ノ時間ヲ得ス故ニ硝薬顆粒ハ一心環ノ圓錐形ヲナシテ發射セラレ皮膚ヲ穿侵スルニ充分ナル動力ヲ有ス是ヲ以テ銃筒甚タ長キ彼ノ無條銃ノ如キニ在リテハ硝薬全ク燃燒シ盡ルヲ以テ稍ヤ遠距離ノ射撃ニ由テ拳銃又ハ施

條銃銃筒短キモノノ如ク硝薬顆粒ノ挿入ナキ理ヲ察知スヘシ抑モ未燃ノ硝薬顆粒ハ環狀ヲナシテ皮膚面ニ集合シ發射ノ距離遠キモノハ其環愈大ナリ要スルニ顆粒ノ挿入少ナキト各顆粒ノ相距ル遠キトニ隨テ射撃ノ距離亦益遠キモノトス然レ之レ唯同一ノ銃ニノ其裝填同一ナルモノニ就テ斷言スヘキノミ銃ノ何タルヲ知ラス裝填ノ如何ヲ知ラサルニ於テハ固ヨリ射撃距離ヲトスルノ標準トナスヲ得ス故ニ射撃ノ遠近ヲ鑑定スルニハ極テ注意熟考スヘキモノトス(デットリッヒ氏)

通常ノ拳銃ニ在リテハ二米ノ距離ニ於テ尙ホ硝薬顆粒ノ嵌入ヲ生シ大ナル施條銃ニ在リテハ一米ノ距離ニ於テ尙ホ之ヲ生スルモ通常ノ六連發小口徑施條銃ニ在リテハ四十仙米以内ノ距離ニアラサレハ之ヲ生スルコトナシト云フ(ホフマン氏)

射入口ノ近圍ハ硝薬顆粒ノ外又硝煙ニ因テ黒染ス之レ容易ニ洗滌シ得ルモノニ其初メ此黒染アル爲メ硝薬顆粒ノ著明ナラサル者ハ須ラク洗滌シテ之ヲ檢スヘシ凡ソ硝薬顆粒ト硝煙ニ由ル射入口近圍ノ

第八圖



拳銃ヲ以テ直接近
ヨリ射撃セシ心臓
部ノ射入口(自殺)
實物大
(ホフマン氏法醫
書ニ據ル)

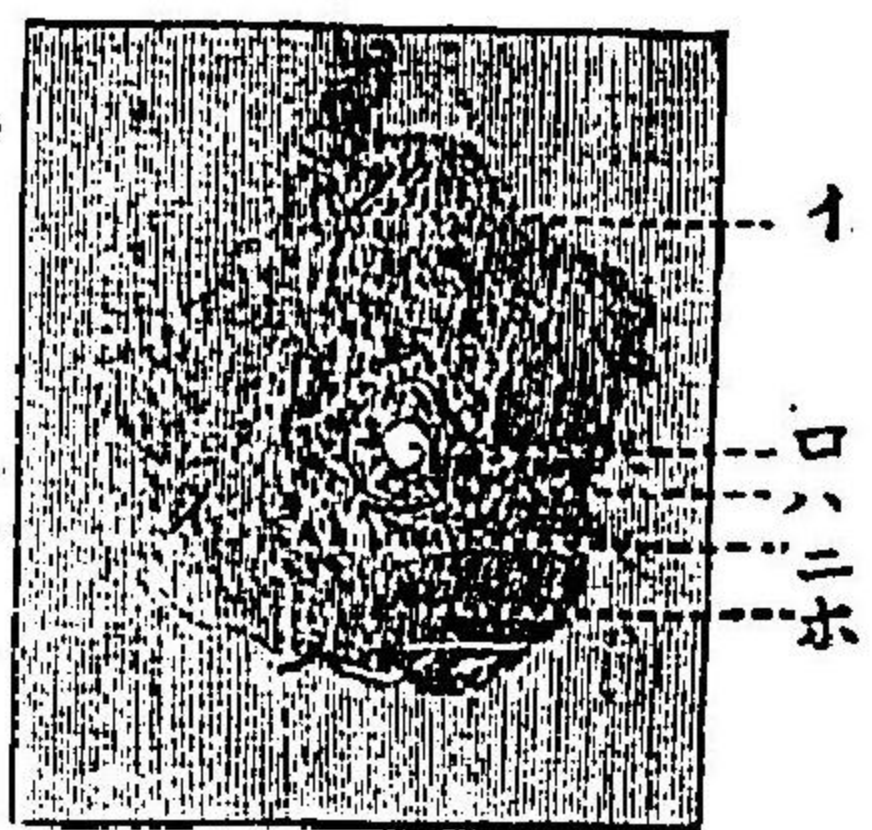
黒染ハ(近距離ヨリ裸體部
ヲ射撃シタル銃創ニハ最
モ著明ニノ厚キ衣服ヲ被
ムル部分ナルキハ唯僅微
ナルカ或ハ殆ント之ヲ缺
クト雖若シ銃筒口ヲ體ノ
表面ニ壓着シテ發射スル
キモ亦全ク之ヲ缺クモノ
トス之レ硝薬顆粒、硝煙、爆

發瓦斯等ハ總テ銃丸ト共ニ内部ニ進入スルヲ以テナリ此銃創ニ在リ
テハ銃創管内ニ黒染ヲ見ルモノトス
硝薬爆發ニ方リテ硝煙ノ外同時ニ爆發瓦斯ヲ生ス近距離ニノ殊ニ骨
上ニ皮膚ノ位スル部ヲ射撃スルキハ此瓦斯ニ由テ皮膚ヲ剝離シ或ハ
内方ヨリ之ヲ破裂セシメ又創管内ニ於テハ硝薬ノ多少ニ準シテ組織

ヲ崩潰ス蓋シ拳銃及ヒ無條銃ノ裝填火薬ハ通常施條銃ヨリ多量ナル
ヲ以テ隨テ爆發瓦斯ノ作用モ亦大ナルヲ常トス此瓦斯モ亦尖端ヲ筒
口ニ向ケタル圓錐形ニ開散進行シ硝薬多量ナルキハ往々臟器ノ猛烈
ナル大破潰ヲ發スルコトアリ如此場合ニ在リテハ固トヨリ銃創管ト
ノ見ルヘキモノナキヲ以テ殆ント射撃ノ方向ヲ判斷シ得サルニ至ル
硝薬モ亦爆發瓦斯及ヒ硝薬顆粒ノ如ク圓錐形ニ開散進行スルヲ以テ
近距離ノ射撃ニ在リテハ皮膚及ヒ毛髮等ヲ燒燼ス之ニ由テ射入口ノ
近圍ニ生スル火傷部ヲ燒暈^{又燒}ト云フ之レ亦射撃距離ノ接近スルニ
隨テ愈小且著明トナリ筒口ヲ體ニ直接シタルモノニ在リテハ遂ニ全
ク發生スルコトナシ
拳銃及ヒ無條銃ニ在リテハ燃燒シツ、彈丸ト共ニ飛行スル栓子ニ由
テ射入口ニ火傷ヲ發スルコトアリ或ハ此栓子ノ爲メ衣服ヲ燃燒シテ
廣部ニ火傷ヲ發スルコトアリ但近距離ノ射撃ニ由ル射入口ノ血液ハ
酸化炭素色素ノ反應ヲ呈ス

遠距離ノ射撃ニ在リテハ以上記載セシ近距離射撃ノ銃創ト異ナリ射入口銃創管及ヒ射出口ニ於ル變化ハ通常唯彈丸ニノミ基因スルモノトス但栓子或ハ骨片等ニ因ル創傷ヲ合併スルモノハ例外トス遠距離ノ射撃ニ因ル圓彈ノ射入口ハ大抵實質缺損ヲ伴フタル圓形ノ創口ヲ生スルモ尖彈ハ屢破裂狀ノ射入口ヲ生ス殊ニ小口徑施條銃ニ在リテハ皮膚ニ甚タ小ナル破裂創ヲ生シ恰モ刺創ノ如キモノアリ概スルニ皮膚ハ延展性ヲ有スヲ以テ通常彈丸ノ口徑ヨリ小ナル射入口ヲ遺シ其周圍ハ彈丸突衝ノ際挫傷ヲ發シ以テ彈丸ノ口徑ニ應シタル線ヲ生ス名ケテ挫暈ト云フ之レ固トヨリ近距離ノ射撃ニモ亦生スルヲ以テ射入口ノ周圍ニハ硝燄ニ因ル燒暈ノ内部ニ於テ比較的狭キ暗黒ノ一環ヲ見ルヘシ之レ即チ挫暈ナリ遠距離ノ射入口ニ在リテハ勿論燒暈ナク唯狭キ挫暈ノミニノ殊ニ尖彈ニ在リテハ甚タ小ナル裂創或ハ刺創ノ如キ射入口ヲ生スルヲ以テ有毛部ニ於テハ往々看過スルコトアリ注意セサル可ラス

第九圖



近距離射撃ノ射入口及其周圍
 (ロ)ハ挫暈ノ入口
 (ハ)ハ挫暈ノ内部
 (イ)ハ射撃ノ入口
 (ニ)ハ射撃ノ出口
 (ホ)ハ射撃ノ出口
 (ヘ)ハ射撃ノ出口
 (ニ)ハ射撃ノ出口
 (ホ)ハ射撃ノ出口
 (ヘ)ハ射撃ノ出口
 (ニ)ハ射撃ノ出口
 (ホ)ハ射撃ノ出口
 (ヘ)ハ射撃ノ出口

銃創管ノ性質如何ハ射撃ノ遠近ト組織ノ性質ト裝填ノ如何ニ隨テ異ナリ最近距離ノ射撃ニ在リテハ硝燄及ヒ爆發瓦斯ノ共同作用ヲ呈シ創管ノ黒染ハ漸次ニ進ムニ從テ減スル

モ爆發瓦斯ノ崩潰作用ハ皮膚ヨリ却テ深部ニ甚シク四錐形ヲナス時ニ破碎シテ共ニ推送セラル、物質例之ハ骨片モ此崩潰ヲ扶助ス故ニ頭蓋ノ如ク皮膚ノ直下ニ骨ノ位スル部ニ在リテハ銃丸先ツ骨ニ穿孔シ其骨折骨片ヲ銃丸ノ前ニ推送シテ腦質ヲ破潰シ或ハ其射撃ノ方向頭蓋腔内ニ向フキハ爆發瓦斯ハ恰モ水壓的側壓ノ作用ヲ發シテ全頭蓋ヲ破潰スルヲアリ如此銃創ニ就テ射撃ノ方向ヲ断定シ得サルハ既ニ前ニ記載セシ所ナリ

霰彈モ亦圓錐形ニ進行スルヲ以テ霰彈射擊ハ穿入セル霰彈ノ多少ト其交互ノ距離ニ據テ大要射擊ノ遠近ヲ推測スヘシト雖霰彈開散ノ程度ハ銃ノ構造裝填ノ方法等ニ關スルヲ以テ最モ注意セサル可ラス又近距離ニ在リテハ霰彈未タ開散セサルヲ以テ其射入口ハ殆ント實彈ノ如キ圓孔ヲ呈スルモノトス

某國人「サンマース」ナル者曾テ南葛飾郡砂村ノ水夫某ヲ伴ヒ一日水鳥ノ銃獵ニ趣キ砂村新田ノ沿岸ニ於テ飛鴨ヲ狙撃セント欲シ種々體位ヲ變スル際過チテ發射シ其彈ハ筒口ヲ距ル凡ソ半米ノ距離ニ堅立スル水夫ノ右前頭結節部ニ的中シ後頭結節ノ右上方ヨリ射出シ頭蓋腔内ヲ穿透スル際右顳額部ヲ破潰シテ射入口ヨリ射出口ニ至ル間ノ骨片ハ皮膚ニ附着セルマ、大瓣狀ヲナシテ外方ニ翻轉シ大腦外面ハ著シク崩潰シ而シテ其射入口及ヒ射出口ハ殘留セル前頭骨及ヒ後頭骨ノ破折線ニ其口孔ノ一半則チ小半月狀ノ破損部ヲ遺シテ僅カニ察知スヘキモノヲ實驗セリ之レ蓋シ射擊ノ距離近キヲ

以テ霰彈未タ開散セス相集合シテ頭蓋ヲ穿透シ且爆發瓦斯ノ作用ト相合シテ頭蓋側部ヲ破潰セシモノナルヘシ

遠距離ノ射擊ニ在リテハ銃劍管ハ唯銃丸ノ作用ニノミ原ツクト雖毎ニ必スシモ同一ナラス則チ唯軟組織ノミヲ穿ツ所ノ銃劍管ハ單一ニ或ハ盲端ニ終リ或ハ射出口ヲ有スルモ若シ骨ヲ穿透スルキハ單一ナル彈孔ヲ生スルハ稀ニ多クハ彈孔ノ周圍ニ骨折或ハ骨破裂ヲ生シ又ハ骨片ノ碎破セルモノ彈丸ニ押送セラレテ爲メニ著シク軟部ヲ崩潰スルコトアリ

予嘗テ一少年ノ品川灣ニ於テ遊獵中流彈ニ逢テ斃レタルモノヲ解剖セリ該銃彈ハ軍用ノ小口徑施條銃彈ナルモ流彈ナルヲ以テ射擊ノ距離ハ幾許ナルカ知ルヲ得サリシカ穿透力ノ大ナラサルニ由テ其距離モ頗ル遠距離ナルヘキヲ推測セリ依テ其鑑定書ヲ左ニ掲ク
遠距離銃劍ノ一例ト爲スヲ得ン乎

剖檢鑑定書

銃器ニ因ル損傷

明治二十五年二月二十三日東京地方裁判所菊池檢事ノ命ニヨリ同日午後第一時ヨリ司法省構内解剖室ニ於テ深川區大島町六番地清水虎吉十五年ナル者ノ頭部ヲ解剖シ其創傷ヲ檢定スル左ノ如シ

甲 外表發顯

一體格中等榮養佳良ニノ身體中前面ノ皮膚ハ一般ニ變色ナク背部腰部上肢及下肢ノ後面ニハ暗赤色ノ死斑ヲ呈シ全身ノ死後強直頗ル強シ

二前額ヨリ後頭部ニ環行帶ヲ施シアリテ汚穢帶紅色ノ液之ニ浸潤ス仍テ縑帶ヲ解除スルニ前頭部左半側ノ毛髮ヲ剪除セリ此剪除部ノ中央ニ於テ左前額結節ノ中央ヨリ上方ニ距ル六仙米ノ部ニ一ノ創口ヲ見ル橢圓形ヲナシテ前後徑ハ一四仙米左右徑ハ〇九仙米ヲ有シ周邊ニ血液ヲ附着シ皮膚ノ創緣ハ汚穢赤色ニノ創内ニハ僅カニ骨質ノ創緣ヲ見ル

三右顛頂結節ノ後下方ニ於テ圓形ニ毛髮ヲ剃除セル部アリ直徑五仙

米ヲ有シ其中央ニ於テ拇指頭大ノ皮膚隆起ヲ見ル之ニ觸ルニ皮下ニ於テ示指頭大ノ硬固ナル隆起アリ

四前額及左眉毛ニハ乾燥セル血液僅カニ附着シ眼瞼結膜及眼球結膜ハ蒼白ニノ角膜ハ溷濁シ瞳孔ハ散大シテ直徑ハ左右共ニ〇五仙米ヲ有ス

五鼻孔ヨリ汚穢帶紅色ノ泡沫性液ヲ流出シ鼻ヲ壓搾スレハ尙ホ僅カニ流出ス

六口唇ハ蒼白色ニノ上下齒列緊閉シ口内ニ異物ヲ認メス

七耳竅内ニハ少許ノ砂ヲ附着ス

乙 内部發顯

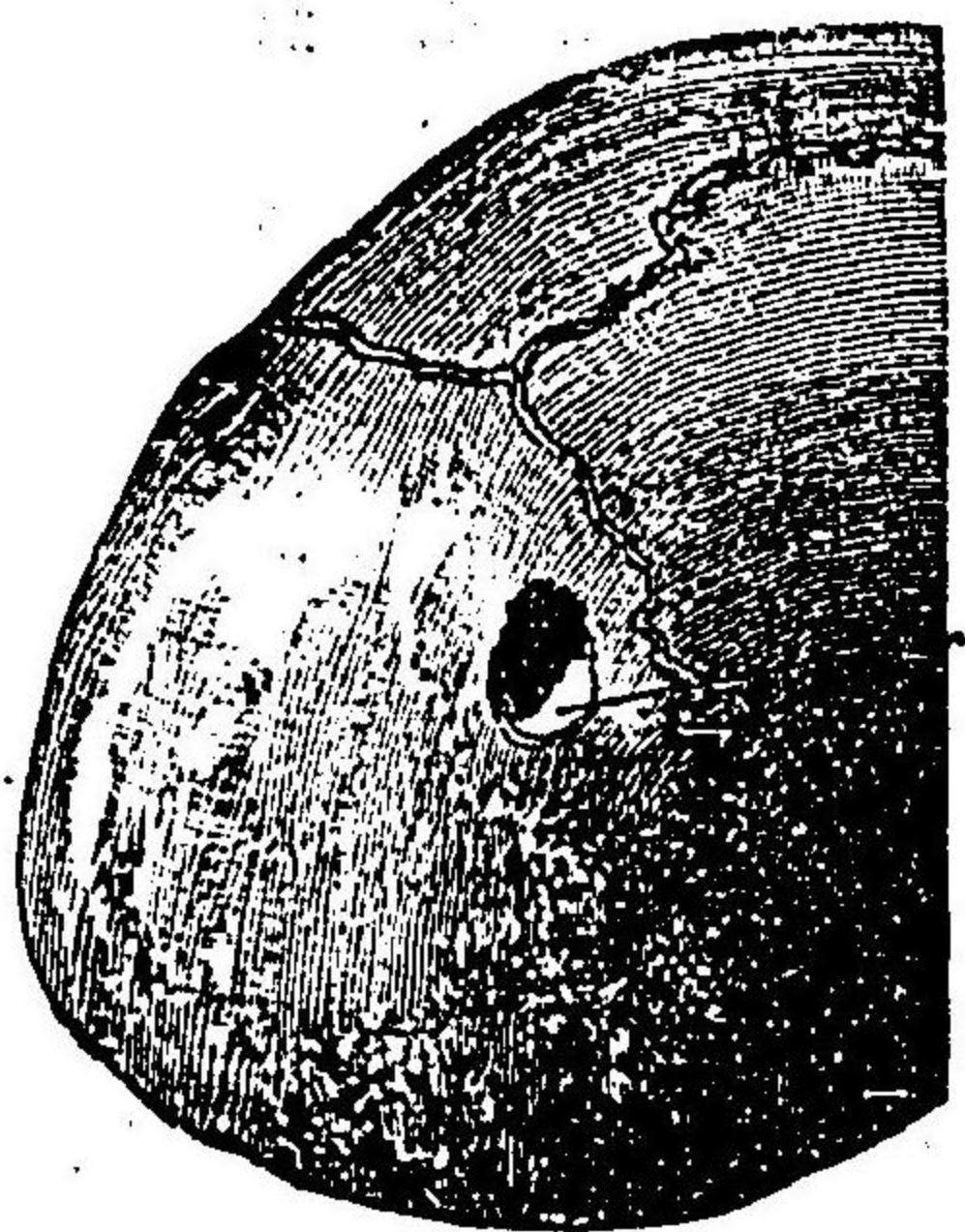
八式ノ如ク頭皮ヲ切開シテ檢スルニ前頭皮創口ノ周圍ハ皮膚ノ組織中ニ溢血アリテ前後徑七仙米左右徑三仙米ノ部ハ暗赤色ヲナシ皮創ノ周緣ハ褐赤色ヲナシ外圍ハ其色稍ヤ鮮紅ナリ

九前頭骨ハ此皮創ニ應スル部ニ於テ冠狀緣ヲ前方ニ距ル〇六仙米ノ

銃器ニ因ル損傷

部ニ一ノ橢圓形ナル創口アリ孔ノ左前縁ハ長徑一、二仙米横徑〇、六
 仙米ノ骨板破折シ孔縁ニ懸リテ孔内ニ傾斜シ孔ノ長徑ハ一、八仙米
 横徑ハ一、三仙米ヲ有シ破碎セル小骨片僅カニ孔内ニ殘存ス
 十、後頭部ノ隆起ニ應シタル部ノ皮膚ハ長徑二、五仙米横徑二仙米ノ廣
 サ皮膚組織中ニ充
 血シ此中央稍ヤ左
 側ニ偏スル部ニ於
 テ豌豆大ノ溢血部
 アリ

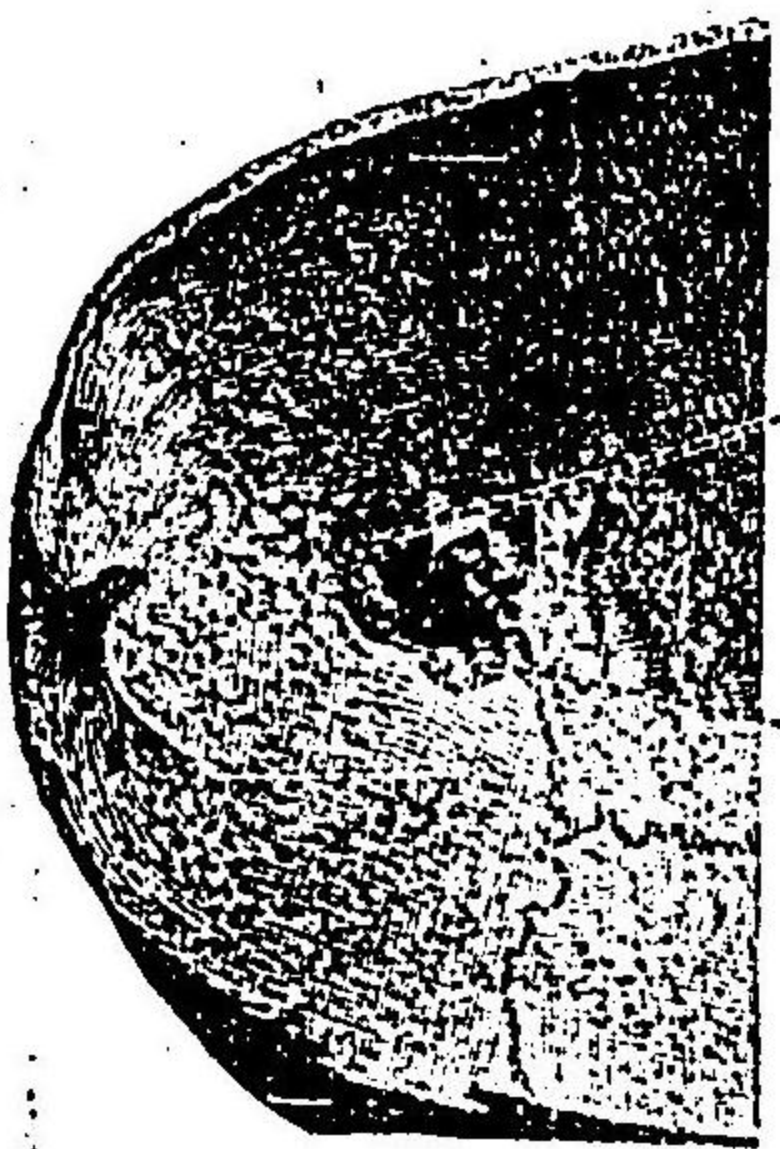
第十圖 頭蓋冠前頭部ノ外面



内部發見第九ノ射
 入口(イ)ハ内方ニ
 陥没セル破折縁

十一、前條ノ皮膚ニ應
 スル顛頂骨ノ骨質
 ハ顛頂結節ヲ後下
 方ニ距ル四仙米ノ
 部ニ於テ圓形ニ破

第十一圖 頭蓋冠前頭部ノ内面

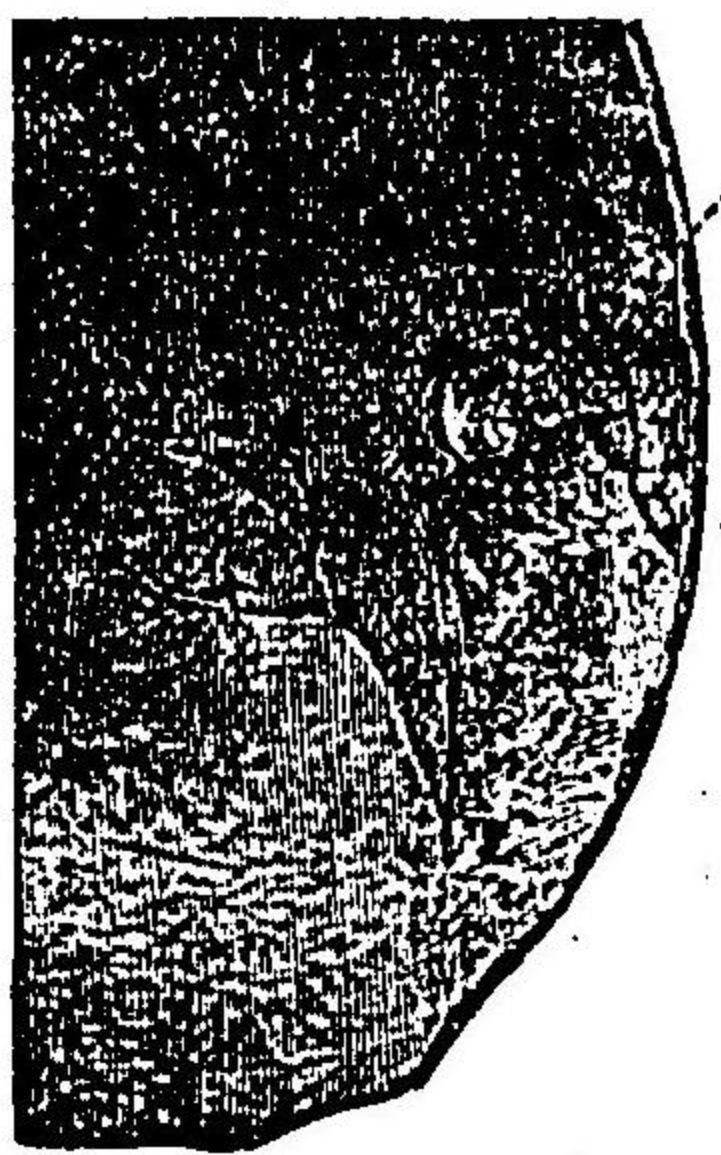


(イ及ロ)ハ共ニ頭
 蓋骨内板ノミ破折
 セル部ニシテ即チ内
 部發見第十二ノ創
 孔ナリ

方ニ降ルコト一、二仙米ナリ其他ハ骨質皮膚及筋質ニ異狀ナシ
 十二、式ノ如ク頭蓋冠部ヲ鋸斷シテ檢スルニ前頭骨ノ内面ハ創孔ノ周
 縁ニ於テ骨質ノ内板不正楕圓形ニ破折シ縦徑二、四仙米横徑一、四仙
 米ヲ有ス右顛頂骨ノ内面ハ圓形ニ陥没シ其直徑一、二仙米ヲ有シ其
 下縁ヨリ下方ニ一條ノ骨破折ヲ生シテク字形ヲナシ下方ニ降ルコ

折シ其直徑一、八仙
 米ヲ有シテ骨ノ平
 面ヨリ〇、二仙米隆
 起シ而シテ其破折セ
 ル骨片ハ更ニ丁字
 形ニ破折シテ三片
 ヲナシ此破折部ヨ
 リ二條ノ骨破折ヲ
 生シテ顛頂骨ヲ下

第十二圖 右顛頂部ノ内面



(イ)ハ四形ニ陥没
セル骨折骨片

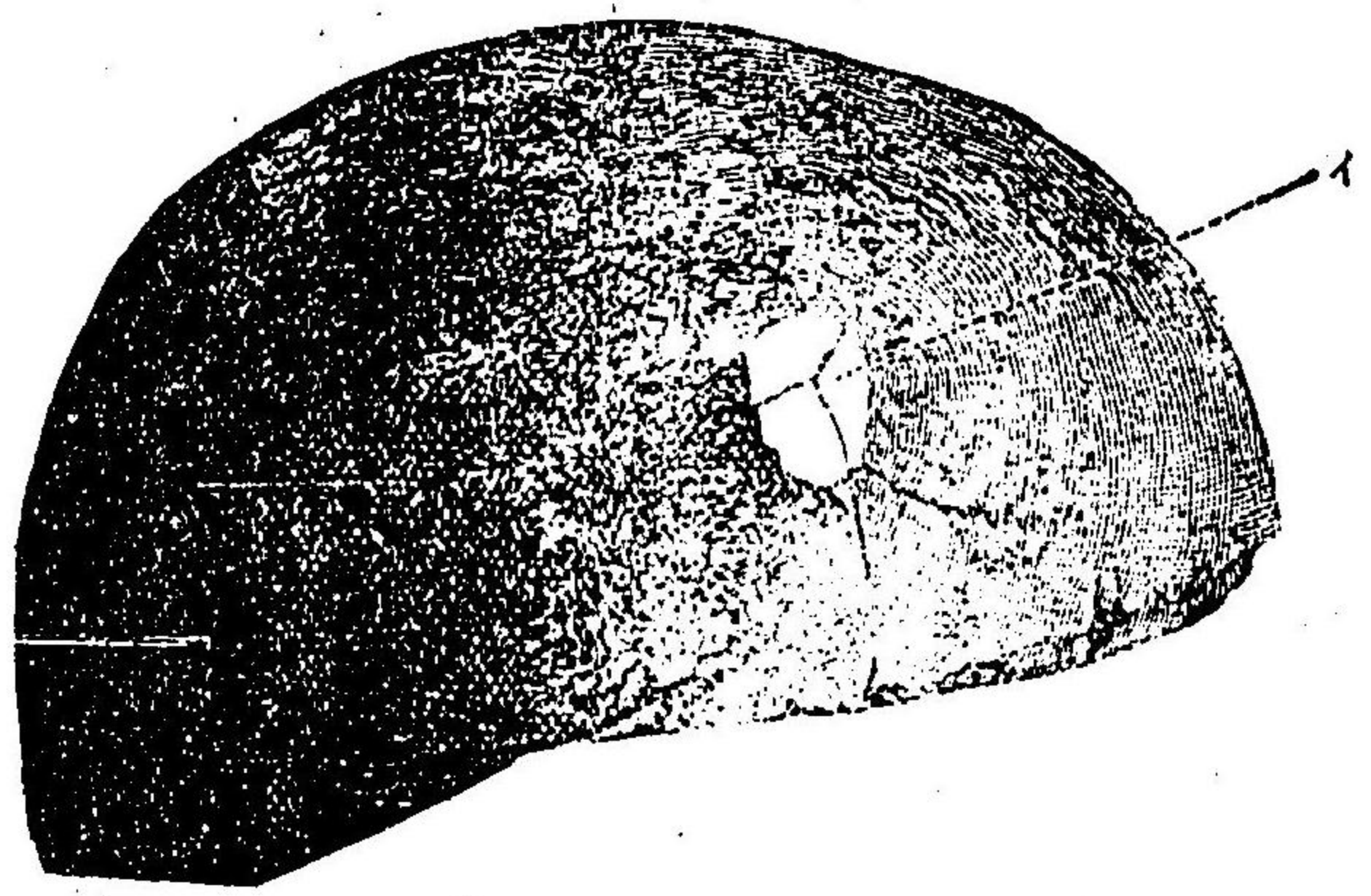
ト一、三仙米ナリ
其他骨質ニハ一
般ニ異狀ヲ見ス
十三、硬腦膜ノ前頭
骨創ニ應スル部
ハ不正楕圓形ニ
穿孔シ長徑一、八
橫徑一仙米ヲ有

シ周縁甚タ不正ナリ

十四、顛頂骨創ニ應スル部ノ硬腦膜モ亦不正圓形ニ破潰シ其直徑一、一
仙米ヲ有ス

十五、硬腦膜ヲ切開スルニハ半流動性ノ暗赤色ナル血液ヲ
充盈シ此竇ノ兩側左右腦半球ノ上面ニ於テ蜘蛛膜ノ上面ニ多量ノ
暗赤色ナル半流動性ノ血液ヲ存シ各半球上面ノ腦廻轉間溝モ亦同

右顛頂部外面



骨頭後

内部發頭第十一ノ
骨折(イ)ハ骨折骨
片

一ノ血液ヲ充
盈シ殊ニ左半
球ニ於テ多量
ニ現存ス
十六、腦ヲ摘出シ
テ檢スルニ左
半球前頭葉ノ
上面、半球ノ前
端ヲ後方ニ距
ル七仙米内縁
ヲ外方ニ距ル
二仙米ノ部ニ
於テ蜘蛛膜、軟
膜及腦實質ハ

第十圖

銃器ニ因ル損傷

共ニ不正椭圆形ニ破潰シ長徑二三横徑一、八仙米ヲ有シ腦實質ハ崩潰シテ此部稍ヤ陷沒ス

十七、腦兩半球ヲ左右ニ排開シテ内面ヲ檢スルニ左半球内面ノ中央部ニ於テ前後徑三五上下徑一、仙米ノ崩潰部アリ右半球ノ内面ニ亦前後徑三、仙米上下徑一仙米ノ崩潰部アリ左半球ノ崩潰部ト相對向ス

十八、右半球後頭葉ノ後外面ニ於テ右半球ノ後端ヲ前外方ニ距ル六、五仙米内縁ヲ外方ニ距ル七仙米ノ部ニ於テ不正椭圆形ノ崩潰部アリ其前後徑ハ三、仙米上下徑ハ二、仙米ヲ有ス其他腦表面ハ一般ニ充血スノ他異狀ナシ

十九、腦ヲ切開スルニ右側室ノ前角中ニハ暗赤色ノ流動血小許ヲ含ミ其後角及下行角中ニハ暗赤色ノ流動血ト暗黒褐色ノ凝血少許ヲ含有シ第三室及左側室内ニハ齊シク暗赤色ノ流動血少許ヲ含有ス

二十、腦實質ハ一般ニ稍ヤ血點ニ富ミ兩半球外面ノ破潰部ト内面ノ破潰部ト相交通シテ一管ヲ形成ス

二十一、腦底面モ亦一般ニ血液ニ富ミワロル氏橋、延髓、小腦、菱形窩及ジ
ルヅ^カー氏管ニハ異狀ナシ

二十二、頭蓋底面ニハ暗赤色ノ流動血ヲ多量ニ存シ其量凡ソ二十五瓦
蘭ヲ算ス其他底面ノ硬腦膜及骨質ニハ變常ナシ

二十三、頭蓋冠部ヲ除去スル際一ノ銃丸アリテ頭蓋腔内ヨリ脱落セリ
之ヲ檢スルニ全形椎實形ニシテ尖端ノ下方稍ヤ挫潰シ基礎部ノ直徑一、仙米長徑二、一仙米基礎部ノ周徑三、五仙米ニシテ六條ノ縱溝ト中央部ニ二條ノ横溝ヲ有シ重量ハ十五瓦蘭ヲ有ス

二十四、胸腔及腹腔ハ檢事ノ命令ナキヲ以テ開檢セス

審明

以上ノ發顯ニ由リ之ヲ審明スルニ甲第二項ノ皮創及第三項ノ隆起
乙第八項第十項ノ皮創同第九項第十一項第十二項ノ骨創同第十三
項ヨリ第十八項ニ至ルマテノ腦膜及腦質ノ創傷并ニ第二十項ノ創
管ハ剖檢ノ際發見シタル第二十三項ノ銃丸ニ射擊セラレテ生シタ

ル創傷ナリトス而ノ此銃丸ハ本人ノ左前方ヨリ斜メニ射入シテ顛頂骨ノ内面ニ達シタルモノナリ何トナレハ此銃丸ハ正ニ骨創ノ大サニ適合シ且乙第九項骨創ノ左前縁ノ一部破折シテ孔内ニ傾斜スルト孔内ニ小骨片ヲ存スルト第十一項ノ骨質外方ニ突隆セルト軟部ノ創管此兩骨創ノ方向ニ一致スルトヲ以テ明了ナリトス故ニ該銃丸ハ左前方ヨリ前頭部ノ皮膚ヲ穿テ次テ前頭骨及腦膜ヲ貫キ左腦半球ノ表面ニ穿入シ腦質中ヲ進テ左半球ノ内面ニ出テ更ニ右半球ノ内面ニ進入シテ腦質中ヲ進行シ右側室内ヲ通行シテ右半球ノ外面ニ出テ尙ホ腦膜及顛頂骨ノ一部ヲ挫折シ而シテ茲ニ停止セルモノトス又乙第八項ノ溢血及第十五項第十九項ノ血液ハ銃丸ニ由リテ破潰シタル皮膚骨質腦膜及腦質ノ血管ヨリ出血シタルモノトス

鑑定

前記ノ理由ナルニ因リ之ヲ鑑定スルニ

第一、虎吉ノ頭部ニ被ムリタル創傷ハ本人ノ頭蓋腔内ヨリ發見シタ

ル銃丸ノ射入ニ由ルモノナリ

第二、該創傷ハ最モ貴重ナル部分ニアルヲ以テ直チニ致命スヘキ創傷ナリトス

傷ナリトス

第三、虎吉ハ該創傷ニ因テ致命シタルモノトス

右之通及鑑定候也

明治二十五年二月廿三日

鑑定人 姓名 印

其他銃創管ノ近傍ニ於テハ銃丸ノ震盪ニ由テ臓器ノ損傷即チ心肺等ノ挫傷或ハ大ナル血管内膜ノ破裂ヲ生シ或ハ反對激動ニ由テ骨折ヲ生スルコトアリ

射撃ノ方向ハ射入口ト銃創管ト射出口トヲ參照シテ大要ハ推測シ得ヘシト雖銃創管ハ必シモ發射ノ方向ニ一致セス又射出口ナク盲端ニ終ルモノアリ或ハ距離射撃ノ如ク強ク組織ヲ崩潰スルカ或ハ裝填甚タ強大ニノ廣大ノ創面ヲ生スルキハ發射ノ方向ハ極テ推測シ難キカ或ハ全ク推測シ得サルニ至ルコトアリ

銃丸ハ骨或ハ他ノ硬固物ハ例之ニ逢テ之ヲ貫穿セス却テ其面ヲ滑轉進行スルコトアリ然キハ弓狀或ハ環狀ノ銃創管ヲ生ス之ヲ輪狀銃創或ハ廻旋銃創ト云フ或ハ彈道ノ抵抗物ニ逢テ反跳シ然后人體ヲ射撃スルコトアリ然キハ直接射撃線ニ生ス可ラサル銃創ヲ生ス之ヲ反跳銃創ト名ク

近距離ノ射撃ニ在リテハ硝藥顆粒ニ由テ生スル射入口近傍ノ黒染ト燒暈トニ由テ其方向ヲ察知スヘシ即チ其燒暈及ヒ黒染部ノ中心ニ射入口ヲ有スルハ銃筒ノ縱軸體ノ表面ト直角ヲナスモノニ中心外ニ射入口ヲ見ルモノハ斜メニ射入シタルモノトス
 射出口ハ近距離ノ射撃ニ在リテハ大抵射入口ヨリ小ナリ遠距離ノ射撃ニ於ルモ銃丸骨質ニ衝突シテ其破片ヲ押送スルカ或ハ銃丸其形狀ヲ變シテ扁平トナルキハ射入口ヨリ大ナル射出口ヲ生スルモノトス
 軍用後裝銃ノ如キ大穿透力ヲ有スル銃丸ニシテ若シ骨質ニ衝突スルキハ銃創管ハ此部ヨリ圓錐形ニ擴大シテ射出口ハ甚タ大ナルモノナリ

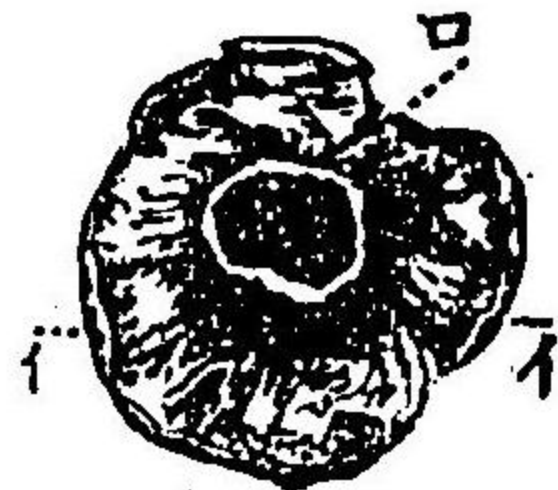
前裝銃ニシテ其銃丸骨質ニ衝突セサルキハ射出口ハ射入口ト同大ナルカ或ハ却テ小ナルモノアリ之レ射入口ハ多クハ實質缺損ヲ伴フモ射出口ハ單ニ内方ヨリ破裂セシメ實質缺損ナキカ故ナリ
 頭蓋骨ノ穿孔銃創ニ在リテハ銃丸ノ始メテ穿入セシ面ノ孔縁ハ銳利ニシ且其孔ハ小ナルモ裏面ハ其孔稍ヤ大ニシ且孔縁ハ一部分剝離スルヲ以テ不正ナルヲ常トス故ニ唯一孔ノミ存スルモノト雖射出入口ヲ鑑別スルハ容易ナルモノトス(第十圖及第十一圖參照)
 其他銃丸ノ勢力既ニ衰弱セルモノ鈍角ヲ以テ衝突スルキハ皮膚ニ損傷ヲ生セサルモ却テ内部ノ組織ニ挫傷ヲ生スルコトアリ之レ小口徑ノ銃丸ニハ少ナキモ却テ稍ヤ大ナル銃丸ニ多シ之ヲ反射銃創ト云フ
 心肺等ノ挫傷ノ外屢大ナル血管内膜ノ破裂ヲ目撃ス又銃丸若シ皮膚ノ觸接線ノ方向ニ擦過スルキハ或ハ單ニ皮膚剝脫ヲ生シ或ハ半溝狀ノ創ヲ生シテ一見恰モ裂創或ハ切創ノ如キモノアリ之ヲ擦過銃創ト云フ

銃創死體ヲ剖檢スルニ方リ銃丸ノ發見ハ鑑定上並ニ犯罪ノ捜査上最モ重要ナルモノニシテ盲端ニ終ル所ノ銃創管ニ在リテハ其末端ニ發見スルコト多キモ銃丸ノ銃創管外ニ位置ヲ轉スルモノ往々之アリ之レ多クハ運搬等ノ爲メ死體ヲ動搖セシニ由ルモノニシテ銃丸ハ銃創管ノ近傍殊ニ大凝血中ニ潜在スルコト多シ故ニ管内ニ銃丸ヲ發見セサルキハ近傍ノ組織中殊ニ凝血内ヲ詳細ニ検査スヘシ又頭蓋ノ銃創ニ在リテハ銃丸先ツ射入口ニ於テ骨ヲ穿テ直線ニ進行シテ對側ニ至リ再ヒ骨ニ觸レ爲メニ反跳セラレテ多少創管内ニ退却シ或ハ角度ヲナシテ腦質中ニ入ルアリ或ハ此反跳ニ由テ元來ノ方向ヲ一變シ骨ノ内面ニ沿ヒ腦表面ヲ弓狀ニ進行シ以テ腦質ノ表面ヲ溝狀ニ破潰シ意外ノ部ニ銃丸ノ潜在スルコトアリ但銃創管内ニ發見セル銃丸栓子或ハ衣服ノ破片等ハ都テ詳細ニ調査シテ立會裁判官ニ渡スヘシ

凡ソ銃創ノ鑑定ニ就テ銃及銃丸ノ種類性質ヲ鑑定スルハ犯罪ノ捜査上最モ重要ノ件ナリトス然レ銃ノ裝填ハ必シモ正式ナラサルヲ以テ

銃丸ノ性質ニ由テ直チニ銃ノ種類ヲ斷定スル可ラス、過失又ハ犯罪行爲ニ係ル銃傷ハ霰彈及ヒ實彈ノ外鐵片、小石、黃銅扣紐等ノ如キ種々ノ物質ヲ用ルコト往々之レアリ然レ硝藥顆粒ノ皮膚ニ嵌入スルモノアルキハ硝藥ノ充分ニ燃燒セサル銃ノ種類ヲ使用セシモノタルヲ察知スヘシ

第四十圖



尖彈ノ甚シク形狀ヲ變シテ扁平トナリシモノヲ基
礎部ヨリ見タル圖
(イ)ハ蹶轉セル周縁(ロ)
ハ基礎縁
(チットリッヒ氏法醫書ニ
據ル)

觸レテ其形狀ヲ變スルモ基礎ノ陷凹ト其周縁ノ輪ハ多少原形ヲ存スレハナリ又銃丸ハ骨ニ觸レテ著シク變形スル際遂ニ二三ノ小片ニ分離スルコトアリ之レ一丸ニノ罕レニハ二

三ノ射出口ヲ有スルコトアル所以ナリ
爆發物ニ因ル損傷モ亦銃創ニ屬シテ可ナリ即チニトログリセリン及

ヒ其製劑ノ爆發ニ因ル損傷ハ頗ル猛烈ニシテ往々身體ヲ全ク破碎分裂セシムルニ至ルコトアリ

第三章 損傷ノ刑法上分類

現行刑法上ニ於ル損傷ノ分類ハ主トシテ損傷ノ結果如何ニ由リ罪ノ輕重ヲ異スルモノナルヲ以テ損傷ノ刑法上分類ヲ論スルニハ先ツ現行ノ刑法中損傷ニ關スル各條ヲ掲ケザル可ラス

刑法第三編 第一章第一節 謀殺故殺ノ罪

第二百九十二條 豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪トナシ死刑ニ處ス

第二百九十三條 毒物ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以テ論シ死刑ニ處ス

第二百九十四條 故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ無期徒刑ニ處ス

第二百九十五條 支解折割其他慘刻ノ所爲ヲ以テ人ヲ故殺シタル者

ハ死刑ニ處ス

第二百九十六條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十七條 人ヲ殺スノ意ニ出テ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ死ニ致シタル者ハ故殺ヲ以テ論シ其豫シメ謀ル者ハ謀殺ヲ以テ論ス

第二百九十八條 謀殺故殺ヲ行ヒ誤テ他人ヲ殺シタル者ハ仍ホ謀殺ヲ以テ論ス

第二節 毆打創傷ノ罪

第二百九十九條 人ヲ毆打創傷シ因テ死ニ致シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百條 人ヲ毆打創傷シ其兩目ヲ瞎シ兩耳ヲ聾シ又ハ兩肢ヲ折リ及ヒ舌ヲ斷チ陰陽ヲ毀敗シ若クハ知覺精神ヲ喪失セシメ篤疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ又ハ一肢ヲ折リ其他身體ヲ殘虧シ廢疾ニ

致シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百一條 人ヲ毆打創傷シ二十日以上ノ時間疾病ニ罹リ又ハ職業ヲ營ムコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

其疾病休業ノ時間二十日ニ至ラサル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

疾病休業ニ至ラスト雖身體ニ創傷ヲ成シタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百二條 豫メ謀テ人ヲ毆打創傷シ休業癡篤疾又ハ死ニ至シタル者ハ前數條ニ記載シタル刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第三百三條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ毆打創傷シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百四條 毆打ニ因リ誤テ他人ヲ創傷シタル者ハ仍ホ毆打創傷ノ本刑ヲ科ス

第三百五條 二人以上共ニ人ヲ毆打創傷シタル者ハ現ニ手ヲ下シ傷ヲ成スノ輕重ニ從テ各自ニ其刑ヲ科ス若シ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ルコト能ハサル時ハ其重傷ノ刑ニ照シ一等ヲ減ス但教唆者ハ減等ノ限ニ在ラス

第三百六條 二人以上共ニ人ヲ毆打スルニ當リ自ラ人ヲ傷セスト雖幫助シテ傷ヲ成サシメタル者ハ現ニ傷ヲ成シタル者ノ刑ニ一等ヲ減ス

第三百七條 健康ヲ害ス可キ物品ヲ施用シテ人ヲ疾苦セシメタル者ハ豫メ謀テ毆打創傷スルノ例ニ照シテ處斷ス

第三百八條 人ヲ殺スノ意ニ非スト雖詐稱誘導シテ危害ニ陷レ因テ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ヲ以テ論ス

第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪

第三百九條 自己ノ身體ニ暴行ヲ受クルニ由リ直チニ怒ヲ發シ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但不正ノ所爲ニ由リ自ラ暴行ヲ

招キタル者ハ此限ニアラス

第三百十條 毆打シテ互ニ創傷シ其手ヲ下スノ先後ヲ知ルコト能ハサル者ハ各其罪ヲ宥恕スルコトヲ得

第三百十一條 本夫ハ其妻ノ姦通ヲ覺知シ姦所ニ於テ直チニ姦夫又ハ姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十二條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戸牆壁ヲ踰越損壞セントスル者ヲ防止スル爲メ之ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス

第三百十三條 前數條ニ記載シタル宥恕スヘキ罪ハ各本刑ニ照シニ等又ハ三等ヲ減ス

第三百十四條 身體生命ヲ正當ニ防衛シ已ムコトヲ得サルニ出テ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス其罪ヲ論セス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ

アラス

第三百十五條 左ノ諸件ニ於テ已ムコトヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ論セス

一 財産ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スルニ出タル時

二 盜犯ヲ防止シ又ハ盜贓ヲ取還スルニ出タル時

三 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戸牆壁ヲ踰越損壞スル者ヲ防止スルニ出タル時

第三百十六條 身體財産ヲ防衛スルニ出ルト雖已ムコトヲ得サルニ非スシテ害ヲ暴行人ニ加ヘ又ハ危害已ニ去リタル後ニ於テ勢ニ乘シ仍ホ害ヲ暴行人ニ加ヘタル者ハ不論罪ノ限ニアラス但情狀ニ因リ第三百十三條ノ例ニ照シ其罪ヲ宥恕スルコトヲ得

第四節 過失殺傷ノ罪

第三百十七條 疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セス過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十八條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ癡篤疾ニ致シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十九條 過失ニ由テ人ヲ創傷シ疾病休業ニ至ラシメタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五節 自殺ニ關スル罪

第三百二十條 人ヲ教唆シテ自殺セシメ又ハ囑託ヲ受ケテ自殺人ノ爲メニ手ヲ下シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其他自殺ノ補助ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

右ノ各條ニ由テ之ヲ見ルキハ謀殺ナルカ故殺ナルカ正當防衛ニ出ルカ將タ過失殺傷ナルカハ固トヨリ裁判官ノ判決ニ在リ故ニ法醫タル者ハ主トノ創傷ノ結果如何即チ死ニ致シタルカ若シ死ニ致サハルキハ篤疾又ハ癡疾ニ致シタルカ又ハ幾日間ノ疾病休業ニ致シタルカ或ハ疾病休業ニ至ラサルモ正ニ損傷ヲ與エタルカヲ鑑定スルヲ要ス即

チ刑法第二百九十九條第三百條及ヒ第三百一條ニ掲ケタル六種ノ分類之レナリ

右六種ノ分類中第二百九十九條ハ致命傷ニノ第三百條及ヒ第三百一條ハ不致死創傷ナリ因テ先ツ第三百條又ヒ第三百一條ニ就テ論シ然後致命傷ヲ論セントス

刑法第三百條第一項ノ篤疾トハ本項所掲ノ損傷結果ヲ云フモノニノ癡病上ノ生命危篤ト同一ナラス其第二項ノ癡疾モ亦必ス被傷者ノ癡人トナルヲ意味スルニ非ス本項所掲ノ結果ヲ來シタルハ即チ癡疾ニ致シタル者トス獨逸刑法第二百二十四條ハ刑法第三百條ニ類似スルモ其意稍ヤ廣キカ如シ

參照 獨逸刑法第二百二十四條 人ヲ損傷シテ身體ノ要肢ヲ損失セ

シメ一眼若クハ兩眼ノ視力ヲ失ハシメ聽力言語或ハ生殖機力ヲ失ハシメ或ハ著明ノ醜態ヲ遺サシメ或ハ痲疾麻痺又ハ精神病ニ罹ラシメタル者ハ五年以下ノ懲役又ハ一年以下ノ禁獄ニ

處ス

〔イ〕本條中兩目ヲ瞎スルトハ從來ノ視力ヲ全ク消滅セシムルノ意ニ
 即チ兩眼ヲ盲スルナリ然レ視力障害ノ永久且高度ナルモノ即チ僅カ
 ニ明暗ヲ辨スルカ如キモノモ亦之ニ屬スヘキモノナルヤ否法律上判
 明セス故ニ法醫タル者此問題ニ答フルニハ視力障害ノ度如何ヲ鑑定
 スルヲ以テ足レリトス

視力障害ニ就テハ往々詐病ヲナスモノアリ種々ノ方法ヲ以テ詳細ニ
 審査セハ大抵看破シ得ルモノナリ若シ眼ニ疾患アラハ其所訴ノ障害
 ノ度ト此疾患ト一致スルヤ否ヲ檢スヘシ詐病者ハ一時ハ能ク盲者ノ
 所爲ニ擬スルモ長キ時日中ニハ之ヲ繼續シ得サルヲ常トス但大失血
 後或ハ短日時中ノ反覆失血後ハ一時性或ハ永久性視力消失ヲ來スコ
 トアリ注意スヘシ

綠内障ノ詐病ハ單一ノ方法ニ由テ之ヲ看破シ得ヘク又一眼ノ視力障
 害ヲ詐稱スル者ハ三稜硝子或ハ實體鏡スコレヲ以テ檢査スルヲ良トス

〔ロ〕兩耳ヲ聾ストハ兩耳ノ聽力ヲ全ク消失セシメタルモノヲ云フ然レ
 眼ニ於ルカ如ク聽力ノ著シク減弱シタル者モ之ニ含ムノ意ナルヤ否
 明解ナシ蓋シ聽力ハ視力ト稍ヤ其趣キヲ異ニシ聽中樞又ハ聽神經幹
 ノ損傷ニアラサレハ全然聽力ノ滅絶スルハ甚タ罕ナリ故ニ此鑑定モ
 亦聽力減弱ノ程度ヲ査定スルヲ以テ足レリトナスヘシ

耳聾モ亦往々詐偽ニ出ルコトアリ之ヲ鑑定スルニハ肯テ困難ナシ即
 チ兩耳聾ノ詐病者ハ觸神ト聽神トノ兩感覺ヲ區別シ能ハサルヲ以テ
 若シ詐病者ノ後ニ強キ一踏ヲナスモ之ニ感セサル體ニ擬ス眞聾者ニ
 在リテハ其音ヲ聞カサルモ其震動ヲ感スルヲ以テ直チニ顧視スヘシ
 一耳聾ノ詐病ニ在リテハ二人兩側ヨリ同時ニ其兩耳ニ口ヲ接シテ數
 語ヲ發シ然後病者ヲシテ聽キシ所ノ語ヲ發セシムヘシ眞ノ一耳聾者
 ハ直チニ之ヲ發シ得ルモ然ラサル者ハ兩耳ノ聽覺混合錯亂シテ聽キ
 タル語ヲ發シ得サル者トス

〔ハ〕兩肢ヲ折ルトハ彼ノ單骨折ノ如キ完全回復スヘキ者ヲモ包含スル

損傷ノ刑法上分類

ノ意ニ非スノ獨逸刑法ノ損失セシメト同意味ヲ有シ即チ兩肢ヲ失フ
カ或ハ肢其物ハ存スルモ使用全ク廢止シテ肢ヲ失フタルト同一ノ結
果ニ至ルヲ云フモノ、如シ而ノ兩肢トハ上肢ナルト下肢ナルトニ論
ナク單ニ二本ノ肢ト云フ意味ナリ其使用ヲ廢シタル者ノ鑑定ニ就テ
ハ其肢ヲ折ルト云ンヨリ寧ロ其肢廢用ノ程度如何ヲ詳カニ檢定スル
ヲ良トス

(ニ)舌ヲ斷チトハ蓋シ舌一部ノ切傷ニアラス舌ヲ切斷シテ言語ノ連續
ヲナス能ハサルニ至ルノ謂ヒ乎果シ然ラハ其意未タ盡サ、ルモノノ
如シ之レ言語作成ヲ害スルモノハ獨リ舌ヲ斷ツモノ已ナラス發音器
官及ヒ發語中樞ノ損傷モ亦失語症ヲ來タシ又精神上過劇ノ感動例之
ハ驚愕苦惱等モ往々同症ノ原因トナルコトアレハナリ故ニ獨逸刑法
ニハ言語ヲ失ハシメトアルモ現行刑法ニ在リテハ言語ヲ失フノ意義
法文上ニ明記ナキヲ以テ舌ヲ斷ツ者ノ外本條ニ適セサルヘシ故ニ舌
ノ損傷ニ因リ發語機能ノ著シク障害セラレタル者ノ如キハ別ニ其發

語障害ノ程度如何ヲ審カニ鑑定スヘシ

失語症モ亦屢詐偽ニ出ルコトアリ殊ニ一回失語病ニ罹リシ者ハ聲帶
ヲ充分緊張スルナク言語シ得ルヲ以テ隨意ニ詐病ヲナシ得ル者アリ
此症ニハ刺戟藥ニ由テ反射性ニ咳嗽ヲ發セシムヘシ其咳嗽ニ音聲ヲ
帶フル者ハ眞ノ失語症ニアラサルナリ又局處ニ電氣ヲ通シテ發語セ
シムルモ可ナリ然レ舌ヲ斷チタル者ニ在リテハ肯テ此鑑別法ノ必要
アルコトナシ

(ホ)陰陽ヲ毀敗シトハ外陰部ノ損傷ニ由リ其結果交媾不能ニ至ルヲ云
フ乎抑モ交媾不能ハ常ニ生殖不能ヲ伴フモ生殖不能必スシモ交媾不
能ヲ伴フコトナシ獨逸刑法ニハ生殖機力ヲ失ハシメトアルヲ以テ兩
機能ヲ包含スルハ明了ナリト雖現行刑法ニ在リテハ交媾機能アルモ
生殖不能ニ至リシモノヲ包含スルヤ否法文上明了ナラス但交媾不能
ハ男子ニ在リテハ陽莖ノ損失或ハ兩睪丸ノ損失ニ因テ來リ女子ニ在
リテハ腔ノ損傷後癰痕癒着ニ因テ來ルモノトス

(一)知覺精神ヲ喪失セシメ下ハ獨逸刑法ノ精神病ニ罹ラシメタル者ト同一ノ意義ニノ知覺ト精神トヲ各別ニ云フニアラス民法第七條ニ心神喪失ノ常況ニ在ル者ハ云々トアリ此心神トハ即チ刑法ノ知覺精神ト同一ナリ又喪失セシメトハ被傷ノ際一時發スル所ノ失氣昏倒ヲ云フニ非ス負傷後精神病ヲ發シテ殆ント治癒ノ望ミナキ者ヲ云フナリ然レ負傷後發シタル精神病ト其損傷ト原因上ノ關係如何ヲ斷定スルハ頗ル難事タリ此鑑定ニ就テハ精神病ノ素因如何ニモ亦大ニ注意ヲ要ス故ニ其精神病ハ損傷ニ原因スルヤ否ヲ鑑定スル場合ハ其病者ヲ精神病院ニ收容シテ長日月ノ検査ヲ要スルコト屢之レアリ

(下)刑法第三百條第二項ニ掲クル所ノ廢疾トハ毫モ使用ノ方法ナキ癡人ト云フ意ニアラサルハ既ニ前ニ記載セシ所ナリ一眼盲シ一耳聾スルモ大ニ國家又ハ社會ノ用ヲナス人少ナカラス故ニ一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ一肢ヲ折リ又ハ身體ヲ殘廢シタルヲ刑法上ニハ廢疾ニ致シタリト云フナリ醫學上ノ廢疾ト其意義稍ヤ異ナルヲ以テ鑑定上注意セ

サル可ラス
 一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ一肢ヲ折ルノ意義ハ本條第一項ノ意義ト同一ニノ唯其一目一耳一肢ニ止マルノ差アルノミ而シテ身體ヲ殘廢スルトハ獨逸刑法ノ「著明ノ醜態ヲ遺サシメ」ト文字相異ニノ意義相似タルモノナラン乎即チ身體ノ一部例之ハ眼瞼口唇等ノ如キ部ヲ殘廢損失セシメ以テ著シキ醜容ヲ遺スモノヲ云フナルヘシ然レ其醜容ノ程度如何ヲ鑑定スルハ頗ル難事タルヲ以テ負傷前後ノ形容ヲ審カニ比較參照シ事實ヲ開陳スルノ外ナカルヘシ

(チ)刑法第三百一條第一項ニ曰人ヲ毆打創傷シ二十日以上ノ時間疾病ニ罹リ又ハ職業ヲ營ムコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ云々其第二項ニ曰其疾病休業ノ時間二十日ニ至ラサル者ハ云々又其第三項ニ曰疾病休業ニ至ラスト雖身體ニ創傷ヲ成シタル者ハ云々ト之ニ據テ之ヲ見ルニ刑法ハ毆打創傷ニ因リ死ニ至ル者ト篤疾又ハ廢疾ニ至ルモノトノ外都テノ毆打創傷ハ此三項中ニ網羅スルノ意ナルカ如シ而シテ

其創傷ノ結果即チ疾病又ハ休業ノ二十日以上ニ至ル者ト二十日以下ノモノト疾病休業ニ至ラサル者トヲ區別シテ罪ノ輕重ヲ異ニセリ抑モ刑法上ニ所謂疾病ト休業トハ固トヨリ別種ニノ同一ナル時日ヲ要スルモノニ非ス或ハ休業ノ疾病ヨリ長キアリ或ハ之ヨリ短キアリ之レ疾病ハ主トシテ創傷ノ輕重ト被傷者ノ體質トニ關スルモ休業ハ被傷者ノ職業ト創傷ノ部位トニ關シテ長短アルヲ以テナリ而シテ刑法上ニ所謂疾病トハ被傷者ノ被傷前ニ有スル健康状態即チ身體上及ヒ精神上ノ健康状態ヲ損害シテ爲メニ醫治ヲ要シ平素ノ用務ヲ辨スル克ハサルニ至ルヲ云フナルヘシ創傷稍ヤ重大ニ被傷者ノ體質不良ナルハハ隨テ長日時ヲ要シ加之繼發症ヲ來スルハ一層長日時ニ亘ルヘシ故ニ疾病加療ヲ要スヘキ日數ヲ鑑定スルニハ創傷ノ輕重大小及ヒ性質ト被傷者ノ體質ト療法ノ如何繼發症ノ來ルヘキヤ否等ヲ參照熟考スヘシ尙ホ疑義アル者ハ數日間其治癒經過ヲ伺察シテ然後鑑定ヲ下スヲ良トス

(リ)休業トハ則チ就業不能ニ被傷者其本業トナス所ノ業務ニ就ク能ハサルヲ云フ故ニ各人平素執ル所ノ業務ト創傷ノ部位トニ由テ同一ナラス又加療日數ト毎ニ相一致スルモノニ非ス例之ハ採筆業者ノ手痛車夫ノ足痛ニ於ルカ如シ休業日數ヲ鑑定スルニハ創傷ノ輕重及ヒ部位ト被傷者ノ職業ニ注意スヘキハ勿論又治療方法ノ當否ヲモ參考スヘキモノトス

(ヌ)第三項即チ疾病休業ニ至ラサル創傷トハ創傷ノ徵候及ヒ結果(例之ハ疼痛或ハ運動ノ障害)ヲ有スルモ肯テ之レカ爲メニ身體上及ヒ精神上ノ健康障害ナク又就業不能ニ至ラサル損傷ナリ

其他犯罪事件ノ損傷ニノ既ニ癥痕結成ノ後始メテ法醫ノ鑑定問題トナルコトアリ故ニ法醫タル者ハ癥痕ノ性質ヲ知ラサル可ラス

癥痕ハ病的作用ニ由テ生シ又損傷ニ由テ生ス損傷ニ由テ生スル癥痕ハ治癒機能ノ如何ニ由テ常ニ同一ナラス故ニ癥痕ノ鑑定ヲ爲スニ方リテハ其發生ノ如何ト治癒機能ト治後ノ經過等ヲ審カニ調査シ先ツ

其位置、大小、形狀、色相及ヒ移動性ヲ檢定スヘシ概スルニ切創ハ線狀ノ
癍痕ヲ生シ挫創及ヒ裂創ノ癍痕ハ直線狀ヲナス銃創ノ癍痕ニハ硝
藥ニ原ツク色素顆粒ヲ有シ火傷ノ癍痕ハ肥大性ニノ硬固ニ且強ク牽
縮シ湯瀝傷ハ屢熱湯ノ流注セシ方向ヲ示スコトアリ新生ノ癍痕ハ多
數ノ血管ト菲薄ノ表皮ヲ有シ陳舊ノ癍痕ハ白色ニノ血管少ナキ緻密
ノ造構ヲ有ス但其縮小ノ遲速ハ組織ノ性質ト被傷者ノ體質如何ニ關
ス

癍痕ノ結果トシ痒痒、神經痛、痙攣等ヲ發シ又口唇、眼瞼等ニ在リテハ牽
縮ノ爲メ外翻症ヲ發シテ機能障害ヲ兼テ或ハ唾液瘻又ハ狹窄等ヲ來
スコトアリ癍痕及ヒ黥刺等ハ死體ノ異同辨ニ就テ頗ル緊要ノ徵トス
其條下ニ至テ詳説スヘシ

致命傷

直達ナルト介達ナルトヲ問ハス人ヲノ致命セシムル所ノ損傷ヲ都テ
致命傷ト云フ謀殺ナルト故殺ナルト毆打創傷致死ナルト過失殺傷ナ

ルトニ論ナク損傷ト致命トニ於ル直達若クハ介達ノ關係ヲ正當確實
ニ檢定スルヲ要ス此場合ニ於テ法醫ノ検査ヲ爲スヘキ物體ハ即チ其
死體ナリ

此場合ニ於テ裁判官ノ發スル問題ハ大抵左ノ範圍ニ在リ
該死體ノ致命原因ハ何ニ在ル乎何ニ因テ之ヲ致セシヤ

若シ損傷アルヲ認ムルキハ更ニ左ノ問題ヲ生ス

〔甲〕該損傷ハ他人ノ成セシモノナルカ若シ然リトセハ

〔乙〕該損傷ハ

〔イ〕其普通ノ性質ニ於テ致命セシムヘキカ

〔ロ〕被傷者ノ固有性質又ハ特別狀態ノ爲メ致命セシムタルカ

〔ハ〕損傷ヲ成ス際ノ偶然ナル狀態ノ爲メ致命セシムタルカ

〔ニ〕將タ該損傷ニ因テ誘起セシ偶然ノ介達原因ニ由テ致命セシム

〔ホ〕或ハ迅速相當ノ救助法ヲ加エハ救助シ得ヘキモノナルカ

右ノ問題ニ答フルニハ先ツ直達又ハ介達ノ致命原因ヲ檢定シ然後此

致命傷

原因ト損傷トノ關係ヲ調査スルヲ要ス

〔一〕損傷ノ直達致命因

茲ニ屬スルモノ種々アリ左ノ如シ
〔イ〕生活ニ必要ナル器官ノ大損傷若クハ全部ノ崩潰又ハ其官能ノ器械的障害或ハ廢止之レナリ。例之ハ頭蓋腔内ノ大出血ニ因ル腦壓迫又ハ心臟ノ穿孔性損傷ニ因テ來ル心囊内出血ノ爲メ心臟壓迫ニ因ル心臟麻痺ノ如シ

〔ロ〕出血之レ心臟及ヒ大血管ノ穿孔性損傷及ヒ腺肉性臟器ノ大損傷又ハ切斷セル小血管ノ連續出血ニ由ル急性貧血ノ如シ外出血ニアリテハ體ノ血量ノ半ヲ失ヒ必要量ノ酸素ヲ體中ニ分配スルニ足ラサルキハ則チ致命スト雖内出血ニ在リテハ如此大量ノ出血ニ至ラサルモ其出血ニ因テ貴要ノ器官ヲ壓迫スルキハ則チ致命スヘシ故ニ内出血ニ因ル致命ハ失血ノ爲メニ非スノ寧ロ壓迫ニ因ル致命ト謂フヘシ高度ノ失血ニ因ル死體ハ全身所謂蠟樣色ヲナシ皮膚粘膜ハ蒼白色ヲ呈シ

死斑甚タ僅少ナルカ或ハ全ク缺如シ心臟及ヒ血管内ノ血量甚タ少ナク臟器モ亦蒼白ニシ且乾燥ス之ヲ鑑定スルニハ損傷ノ種類ニ注意シ以上ノ諸發見ト參照セハ肯テ困難ナシト雖生前疾患ニ因テ既ニ貧血セル者ニ在リテハ大ニ注意ヲ要ス又臟器ノ貧血狀態ト脂肪滲潤ト誤認スル勿レ但腐敗死體ニ在リテハ血液ノ溶崩滲潤ニ由テ血管内ノ血量大ニ減スルト他ノ徵候殆ント消失スル爲メ出血死ノ鑑定頗ル困難ナルモノトス

〔ハ〕窒息ハ氣管、喉頭、咽頭、口腔等ノ損傷ニ由リ氣道ニ血液ヲ吸入スルニ因テ來ルコトアリ其血液ハ氣管枝及ヒ氣胞ヲ全ク充填シ或ハ實質間組織中ニモ竄入スルコトアリ剖檢ノ際肺ヲ切割スルキハ大小數多ノ出血竈ヲ呈シテ容易ニ發見スルヲ得ヘシ尙ホ窒息死ノ條下ニ詳記スヘシ

〔ニ〕ショックハ大ナル損傷後ニ發シ又小ナル多數ノ損傷例之ハ虐待後ニ發スルモノニシテ知覺神經末梢ノ強刺戟ニ由ル反射性心臟麻痺ナリ故

損傷ノ直達致命因

ニ其解剖的成績モ亦毎ニ陰性トス是ヲ以テ「ショック」ノ鑑定ヲナスニハ
 精細ナル解剖検査ヲナセシモ其成績全ク陰性ナル際詳カニ事實ヲ調
 査シテ之カ鑑定ヲ下スヘシ但心筋ニ病的變化ナキヤ否ヲ鏡檢スヘシ
 「ホ」血管神經ノ麻痺殊ニ胃部ニ暴力ヲ被リテ内臟神經ノ領地ニ於ル血
 管神經ノ麻痺ヲ發スルキハ下腹部ノ血管急ニ擴張充血シテ他部ニ急
 性ノ貧血ヲ發シ致命トナルヘキハ既ニ第一章神經中樞震盪ノ條下ニ
 記セリ宜シク參照スヘシ
 「ヘ」單純ナル腦震盪及ヒ腦挫傷ヲ合併セル腦震盪モ亦第一章ニ記載セ
 リ參照スヘシ
 「ト」エムボリー「中」直達致命原因トナルモノハ肺ニ來ル脂肪空氣或ハ其
 他ノ「エムボリー」ニノ頸部ノ大ナル靜脈ノ損傷後ハ空氣「エムボリー」ヲ
 生シ骨ノ破碎傷ニ在リテハ骨髓ノ脂肪血行中ニ入りテ脂肪「エムボリー」
 一ヲ生シ又臟器崩潰ハ肝之ニ由リ組織小片ノ血中ニ入りテ「エムボリー」
 ヲ生スルコトアリ而シテ「エムボリー」ハ肺ノ毛細血管ヲ堵塞シ以テ窒息

ニ陥ラシムルモノトス

〔二〕損傷ノ介達致命因

損傷ノ直接結果ニ因テ致命セサルモ損傷ニ添加シテ發スル病的作用
 ニ因リ致命スルキハ之ヲ介達致命原因ト云フ左ノ如シ
 「イ」貴重ナル器官ノ炎症即チ腦膜炎肺炎胸膜炎及ヒ腹膜炎等ノ類之レ
 ナリ
 「ロ」諸臟器ノ變性之レ身體ノ補給ト消費ノ平均ヲ失フヨリ來ル者ニノ
 廣部ノ連綿タル化膿機殊ニ骨質ノ慢性化膿性炎症ニ由テ諸器官ノ凝
 粉樣變性ヲ發シ患者大ニ羸瘦貧血ス
 「ハ」創傷傳染病ハ屢介達性致命原因トナルモノニ其創口ニ局シ或ハ
 其周圍若クハ一定部ニ局シ或ハ全身ニ蔓延スルコトアリ

〔三〕損傷ト致命因ノ關係

既ニ致命原因ノ何ニアルカヲ檢定スルキハ則チ此原因ハ何ニ因テ致
 セシヤノ疑問ヲ生スヘシ即チ被傷者多少ノ時間ヲ經テ致命スルキハ

其致命ト損傷トハ直達又ハ介達ヲ問ハス原因上ノ關係ヲ有スルヤ否
 ノ鑑定ヲ要ス抑モ此鑑定ハ加害者ノ罪ノ輕重ノ關スル所ナルヲ以テ
 最モ慎重且細密ニシテ確實ナラサル可ラス
 此原因上ノ關係ヲ證明スルニハ先ツ死體ニ發見スル損傷中生前ニ致
 シタル損傷ナカル可ラス若シ之レナキニ於テハ致命ト損傷トノ原因
 上ノ關係固ヨリアル可ラサレハナリ
 死體ニ於テ損傷ヲ生スルニ種々ノ原因アリ其偶然ニ生スルハ死體取
 扱ノ不注意、經死者取卸ノ際、小兒死體投棄ノ際又ハ溺死體ノ橋抗、水車
 等ニ衝突スル際生スル損傷ノ類ニシテ又鼠蟻等ノ如キ動物ノ爲メ死體
 ニ大ナル損傷ヲ生シ或ハ一肢ノ全部缺損スルカ如キモノアリ實地經
 験ナキ者ハ大ニ疑議謬誤ヲ招クコトアリ注意スヘシ
 故意ヲ以テ死體ニ損傷ヲ致ス者ハ犯罪ノ證據ヲ隱蔽スルノ目的ニ出
 ルモノ多シ故ニ他殺死體ヲ變シテ自殺者ノ形跡ニ擬シ或ハ絞殺後種
 々ノ損傷ヲ設クルコトアリ

其他救急療法施行ノ際皮膚剝脫ヲ生シ溶融蠟ノ點滴ニ由テ輕度ノ火
 傷ヲ生シ或ハ興奮藥ノ注射ニ由テ皮膚ニ小刺創ヲ生シ又急劇ノ死亡
 種類例之ハ卒倒ノ際ハ挫傷、裂創或ハ骨折等ヲ生スルコトアリ此死體
 ニ於テ腦膜内出血、腦震盪及ヒ腦挫傷等ヲ發見シ且急劇ノ死亡ヲ來ス
 ヘキ内部ノ疾患ヲモ發見シ何レモ單獨ニ致命原因ト爲スヲ得ヘキ場
 合ニ於テ若シ他ニ據ルヘキ證據ナキハ其鑑定實ニ困難ニシテ殆ント
 斷定ニ苦シムモノ多シ
 生前損傷ト死後損傷トノ鑑別ハ主トシテ生活反應ノ有無ニ憑ル故ニ被
 傷者被傷後長ク生存スルニ應シテ愈著明ナリトス負傷後直チニ致命
 セシ者ニ在リテハ此鑑定亦頗ル困難ナリ抑モ新創傷ニ見ル所ノ生活
 反應ノ症狀中第二期作用酸膿發ヲ合併セサルモノ種々アリ左ノ如シ
 〔不組織ノ收縮性及ヒ創口ノ哆開ハ最モ有力ノ徵證ニシテ生活セル諸組
 織ハ收縮力強キヲ以テ生前ノ創口ハ常ニ哆開スルモノナリ又死後ノ
 創口モ往々哆開スルモノアリト雖其度甚タ僅少ナルヲ常トス但筋ノ

収縮性ハ死後強直ノ發スルト共ニ消失スルヲ以テ生活反應ノ最モ要
徴トシ注目スヘキハ唯皮膚創縁ノ哆開ニ在リ

〔四〕出血。流動性ノ血液ヲ有スル死體ノ大血管ニ損傷ヲ生シ且血液ノ流
出ニ器械的ノ抗抵ナキ場合ト雖決テ全身又ハ一大部分ニ著明ナル貧
血ヲ呈スルニ至ルマテ出血スルコトナシ故ニ外出血ト内出血トニ論
ナク出血ノ爲メ貧血ノ發顯ヲ呈スルキハ其損傷ノ生前ナリシヲ察知
スヘシ但死後血液沈垂ノ爲メ垂下鬱血ヲ生スル部分ヲ除ク外末梢血
管ノ損傷ニハ縱令ヒ血液流動性ナルモ決テ生前ノ損傷ニ於ルカ如ク
著明ノ出血ヲ發スルコトナシ

〔六〕皮下溢血。ハ損傷ノ種類ニ由テ強弱ヲ異ニス鈍器ノ侵襲ニ因ル損傷
ハ最モ強大ノ皮下溢血ヲ生ス然レモ皮下溢血ハ生前ノ損傷ニ發生セス
ノ死後ノ損傷ニ却テ發生スルコトアルヲ以テ必スシモ生前損傷ノ微
證トナスヲ得サルモノトス例スルニ被傷後速カニ死スルカ將タ他部
ノ出血ニ由リ貧血セル部分ニ損傷ヲ受ルカ又ハニシヨク或ハ震蕩症ノ

爲メ心動衰弱若クハ遏止シ血壓大ニ減少スルキハ創部ニ溢血ヲ生ス
ルナク又流動性血液ヲ有スル死體ノ垂下部ニ在ル血管ニ損傷アリテ
血液ノ流出ニ抗抵ナキキハ組織中ニ溢血ヲ生スルカ如シ但溢血ト垂
下鬱血トノ區別并ニ生前ニ生シタル溢血ト死後生シタル溢血ノ鑑別
ハ既ニ第一章挫傷ノ條下ニ詳記セリ宜シク參照スヘシ其他生前溢血
ハ壞血性疾患ニ由テ來ルコトアリ故ニ損傷ナキ組織ニ溢血ヲ見ルキ
ハ其原因ノ何ニ在ルカヲ搜查スルヲ要ス

〔二〕創縁ノ腫張。ハ被傷後多少ノ時間ヲ要シ且生前現存セシモ死體ニ於
テハ再ヒ消失スルト又死體ノ垂下部ニ在リテハ垂下鬱血ノ爲メ却テ
腫張スルコトアルヲ以テ生前死後ノ損傷ヲ鑑別スルノ要徴トナス
ニ足ラス

以上記載ノ生活反應ハ死體長ク水中ニ在ルカ或ハ高度ノ腐敗ニ陥ル
カ又ハ炭化スルキハ其一半或ハ全部總テ消失スルモノトス
茲ニ死體アリ生前損傷ヲ被ムリシ事實明了ニシ且其死體ニハ此事實

損傷ト致命因ノ關係

ニ符合スル損傷アリ致命因ト認ム可キ重傷ナルキハ縦令ヒ剖檢ノ際他ノ死體ニ於テハ致命因トナスヲ得ヘキ病的變化アルモ損傷ヲ以テ致命因トナス可キハ勿論ナリト雖若シ其損傷輕易ニ致命因トノ說明シ難キ場合ニ於テハ其鑑定極テ困難ニノ斷言スルヲ得サルモノ頗ル多シ

創傷傳染病ハ屢介達性ノ致命原因タルモノナルモ從來重キヲ置カザリシカ細菌學ノ進步ニ伴ヒ將來倍々法醫學上ノ問題タルヘキハ論ヲ待タス因テ最近ナル「ヂットトリツヒ氏ノ說ヲ左ニ掲ク

「ヂットトリツヒ氏曰創傷ハ輕重ヲ問ハス屢傳染病機ヲ發ス其創口傳染門トナルトキハ之ヲ創傷傳染病ト云フ單獨ニ致命原因トナルコトアリ此傳染病ヲ誘起スル病的菌ハ損傷時若クハ其後ニ於テ創口ニ竄入スル者ナリ之ニ屬スル疾患ハ創口ノ炎症及ヒ化膿、淋巴管炎及ヒ淋巴腺炎、進行性局處性蜂窩織炎、創傷丹毒并ニ之ヨリ發スル全身病即チ敗血症及ヒ膿毒症之レナリ總テ此傳染性病機ハ之ニ由テ認知スヘキ解

剖的變化ヲ誘起シ伴フト雖彼ノ破傷風症ハ屢見ル所ノ創傷傳染病ニノ却テ解剖的所見ニ由リ斷定スルヲ得サルモノナリ

創傷傳染病ハ其經過良好ナル者モ創傷治療ノ效能ヲ遷延セシメ且發熱ト長キ就褥トニ由テ身體ヲ衰弱セシム其全身性傳染病ハ危險ナル疾病ト見ルヘシ

此傳染ト創傷トノ關係ノ證明確定スルニ於テハ其致命モ亦損傷ノ介達性原因ニ由ル者ト爲スヘシ抑モ傳染ト損傷トノ關係ヲ證明スルハ甚タ容易ナルコト往々之レアリト雖亦頗ル困難ニノ到底斷乎タル鑑定ヲ爲シ得サルモノアリ

裁判上ノ目的ニ就テ創傷傳染病ノ鑑定ヲ下スニハ諸般ノ狀態ヲ詳密ニ調査セサル可ラス要スルニ其目的ハ損傷ト傳染トニ於ル關係及ヒ此關係ノ裁判上ニ於ル解釋ニ在リ殊ニ傳染ノ部位并ニ第一傳染症狀ノ發作期ト損傷トノ間ニ經過セル時日ノ長短ヲ調査シ且他ノ傳染門即チ傳染原因ノ有無ヲ調査セサル可ラス

外軟部ノ損傷ニ就テハ此損傷ヨリ局所傳染ノ發起セシヤ否ヲ檢定シ
 易キモノ多シ縱令ヒ全身症狀甚シキニ拘ハラヌ局處症狀ノ頗ル輕易
 ナルモノニ於テモ亦然リトス但其傳染ノ損傷部ヨリ末梢ニ向テ蔓延
 スルハ損傷ト傳染ト原因上ノ關係ヲ有スル者ト知ルヘシ
 實驗ニ據ルニ既ニ傳染病ヲ有スル者損傷ヲ被ムルキハ血行ニ由テ内
 部ヨリ此創口ニ病毒ヲ傳染スルコトアリ或ハ平素病的細菌ヲ多ク含
 有スル器官ニ損傷ヲ被ムルキハ齊シク内部ヨリ病毒ヲ創口ニ傳染セ
 シムルコトアリ注意セサル可ラス故ニ如此鑑定ニ方リテハ細菌學的
 検査ヲ行ハサレハ斷定ヲ下ス可ラサルモノトス
 此検査ニ方リテハ可成詳細ニ其病歴ヲ調査シ以テ被傷前ノ狀態ハ如
 何、既ニ被傷前ヨリ其體中ニ或ル傳染病竈ヲ有セサリシヤ否ヲ熟考ス
 ヘシ故ニ損傷ト傳染ト原因上ノ關係アリト斷定スヘキハ唯被傷前全
 ク健康ナル者ニ被傷後其局處ニ傳染病ヲ發生セシ者ニ限ルヘシ
 又裁判上ノ目的ニ於テハ創傷傳染ヲナシタル當初ノ時日鑑定ヲ要ス

ルコトアリ之レ一般ニ第一傳染症狀ノ發作時ヲ以テ此鑑定ノ標準ヲ
 定ムト雖亦初期ノ局處傳染症狀甚タ輕易ニ被傷者全ク覺知セサル
 コト往々之レアリ故ニ此鑑定モ亦確實ニ斷定シ得ルモノハ稀有ニ屬
 ス

創傷傳染アリト推測スル場合ニ於テハ此傳染ハ體外ヨリ來ルニ非ス
 ノ却テ既ニ體中ニ現存スル傳染病竈ヨリ來リシニアラサルヤ否ヲ檢
 定スル爲メ被傷者又ハ被傷死體ノ全身検査ヲナスハ此鑑定ニ就テ必
 要ノ件ナリトス若シ一人ニ數多ノ傳染源即チ傳染門ノ現存スル場合
 ニ於テハ何ノ創傷ヨリ致命性傳染病機ヲ發セシカ之ヲ鑑定スルハ極
 テ困難ナリ

裁判上ノ目的ニ就テ創傷傳染鑑定ノ場合ニ於テハ毎ニ損傷其物ヨリ
 來ル結果ト創傷傳染ニ屬スル結果トヲ區別スルヲ要ス
 產褥傳染病機モ亦法醫ノ鑑定ヲ要スルコト屢之レアリ之レ腔ノ損傷
 及ヒ子宮内膜ヨリ發スルモノニ自己傳染ニ注目スルノ要ナキカ如

キモ體中ニ局處性傳染病竈ノ有無ハ調査スルヲ良トス之レ最近ノ細菌學的検査ニ據レハ體中ニ傳染性病竈ヲ有スル産婦ニノ分娩ノ際産道ニ損傷ヲ生スルキハ傳染病毒ハ唯體外ヨリ來ルニ限ラス血行路ニ由テ内部ヨリ傳染ヲ來スヲアリト故ニ此鑑定ハ精細ナル解剖的検査ト細菌學的検査ヲ遂ケサルヘカラス蓋シ聽道、鼻腔及ヒ副鼻腔ノ炎症ニ於ル腦膜炎肺炎ニ於ル轉移性炎症等ノ如キハ亦茲ニ屬ス可キ者カ一損傷ノ治癒經過中種々ノ介達性原因ヨリ肺炎ヲ發シ介達性致命因トナルコトアリ此症ニ就テ肺炎ハ單純獨立ニ損傷ト毫モ關係ナキ疾病ナルカ將タ損傷ト原因上ノ關係ヲ有スルカヲ斷定スルハ頗ル困難ナリト雖亦往々容易ニ其關係ヲ證明シ得ルモノアリ例之ハ著シク嚥下機能ヲ害スル所ノ損傷後ニ於ル吸入性肺炎異物性肺炎或ハ頭部ノ損傷後膿毒性全身傳染病ノ一部症狀トノ來ル轉移性炎症ノ如キ之レナリ然レ垂下鬱血性肺炎及ヒ格魯布性肺炎ノ如キハ原因上ノ關係ヲ證明シ得サル者トス

又創傷傳染病機中破傷風ノ如キハ毫モ微知スヘキ解剖的變化ナク且病床症狀ノミニ由テ確實ノ鑑定ヲ下ス能ハス故ニ確乎不拔ノ鑑定ヲ爲サント欲セハ固有ノ微菌即チニコライル氏ノ破傷風桿菌ノ證明ヲ以テ唯一ノ要件トス若シ此桿菌ヲ證明シ得サルキハ縱令ヒ動物試驗上成績ヲ得ルニモセヨ當今ノ學問程度ニ於テハ未タ以テ完全確實ト云フヲ得サル者トス(以上デットリッヒ氏ノ所說ニ據ル)

〔四〕自殺他殺及過失殺傷ノ鑑別

死體ニ損傷アリテ此損傷ト致命原因上ノ關係明瞭セハ則チ此損傷ハ自ラ成セシモノナルカ將タ他人ノ致セシモノナルカノ疑問ヲ生ス刑法第二百九十二條ニ曰豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以テ論シ云々同第二百九十四條ニ曰故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ云々ト又第二百九十七條ニ曰人ヲ殺スノ意ニ出テ詐稱誘導シテ危害ニ陥レ死ニ致シタル者ハ故殺ヲ以テ論シ其豫メ謀ル者ハ謀殺ヲ以テ論ストアリ又第三百十七條ニ曰疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セ

ス過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ云々トアリ抑モ謀殺ナルカ故殺ナルカハ事實ノ調査ニ由テ判定スヘキ者ナルヲ以テ裁判官ノ職務ニ屬スト雖死體ニ見ル所ノ致命傷ハ自ラ成セシ者ナルカ將タ他人ノ所爲ニ係ルカ又ハ偶然成リシ者ナルカノ疑問ヲ答解スルニハ最モ慎重ノ注意ヲ要ス之レ此鑑定ニ由テ豫審調査ノ方針ヲ變更スルヲ以テナリ法醫タル者他殺ノ嫌疑アル死體ヲ臨檢スル場合ニ於テハ即チ現場検査ニ方リテハ最モ精密ニ死體周圍ノ景況死體ノ位置方向及ヒ被服ノ状態ヨリ其他些細ノ事項ニ至ルマテ苟モ參考トナルヘキ者ハ詳細ニ調査記録スヘシ

死體ノ検査ヲ行フニハ一般検査法參照ノ外殊ニ爭鬪ノ痕跡或ハ抵抗ヲナセシ徵候ノ有無ニ注意スヘシ又加害嫌疑者アルキハ其身體ニ抵抗ヲ受ケシ徵候ナキヤ否ヲ檢スヘシ此徵候ハ通常顯著ナラサル者多ク大抵ハ皮膚剝脱搔破傷皮下溢血咬傷又ハ斷絶セシ毛髮衣服片等ノ如キモノ之レナリ然レ此諸徵ヲ死體又ハ加害嫌疑者ニ見ルモ之ヲ以

テ必ス他殺行爲ノ證ト爲スヲ得ス之レ如此損傷ハ種々ノ原因ヨリ生スルモノニ例之ハ強テ自殺者ヲ止メントシテ爭ヲナシタル場合ノ如シ故ニ能ク注意セサル可ラス

有及器例之日本刀ヲ以テ行フタル他殺死體ニ於テハ往々其手掌或ハ指ノ屈曲面ニ切創ヲ見ルコトアリ之レ被害ノ際防禦ノ道ナク其刃ヲ把握スルニ方リ加害者刀ヲ引去ルノ際切傷セシモノナリ

其他爭鬪又ハ抵抗ノ徵トノ見ル所ノ損傷ハ正ニ生前ニ生シタル者ナルカ或ハ日時ヲ經タル陳舊ノ損傷ニハ非サルカニ注意スヘシ但他殺死體ト雖毫モ爭鬪又ハ抵抗ノ痕跡ヲ有セサル者アリ例之睡眠中又ハ不意ニ暗殺セラレタル死體ノ如シ

死體ノ表面及ヒ衣服并ニ死體ノ周圍即チ家屋ノ戸棹子或ハ近圍ノ地面等ニ見ル所ノ血痕モ亦往々自殺他殺ノ鑑定ヲ下スニ有價ノ徵證トナルコトアリト雖大ニ注意ヲ要ス又情死者ノ一方生存スルキハ他殺ノ嫌疑ヲ被ムルコトアリ之レ亦注意スヘキ者トス

自殺ノ原因ハ精神病ヲ以テ最モ多シトス然レ自殺者ハ皆精神病者ニ
 アラス忿怒、怨恨、苦惱或ハ失望、痴情等ノ如キ精神上ノ感動ニ因リ或ハ
 不治ノ疾病又ハ貧困窘迫等ニ因リテ生存ノ希望滅絶スルカ爲メ遂ニ
 自殺ヲ企ツル者アリ而シテ此原因ハ生理學ニ據リテ考按ヲ下スノ外ナ
 シト雖實際ニ於テハ原因ノ明瞭ナラサル者最モ多シ
 自殺者先ツ一ノ自殺方法ヲ試ミ速カニ死ヲ得サルキハ更ニ第二第三
 ノ自殺方法ヲ行フテ致命スルコトアリ之ヲ集合自殺ト云フ例之ハ始
 メ頸ヲ刺スモ死ヲ得サルキハ更ニ拳銃ヲ取テ自殺スルカ如シ此死體
 ニ就テ注意充分ナラサルキハ往々他殺ト誤認スルコトアリ又自殺未
 遂者ハ心神ノ違常若クハ自殺ノ行爲ヲ隱匿スル爲メ加害者ヲ詐稱シ
 テ他殺ノ偽訴ヲナスコトアリ或ハ其親戚タル者諸般ノ原因ヨリ自殺
 ヲ正死ト偽リ或ハ他殺ト主張スルコトアリ最モ注意スヘシ然レ解剖
 上ノ所見ノミニ由テハ此疑問ヲ鑑定シ得サル場合多キヲ以テ疑議ア
 ルキハ都テ諸般ノ事實ヲ詳細ニ調査シテ之カ鑑定ヲ下スヘシ

致命傷ニ就テハ特ニ創傷ノ部位ト創管アルキハ其方向トヲ熟考シテ
 自殺又ハ他殺ヲ定ムヘシ即チ自殺者自ラ成ヌヲ得サル部ニ創傷アリ
 ナ且其創管ノ方向モ亦自殺者自ラ成シ得サルモノナルキハ則チ其致
 命傷ハ他人ノ致セシモノタルヲ察知スヘシ但此場合ニハ成傷器具ヲ
 モ参照スヘシ

損傷ニ因ル自殺

自殺ノ方法種々アリト雖茲ニハ唯損傷ニ因ル自殺ヲ掲ケントス而シテ
 此自殺方法モ亦種々アリ即チ切創、刺創ニハハ刺創、銃創ニ由ル自殺、落墜死、
 轢死等之ニ屬ス
 (甲)切創ニ因ル自殺 之レ日本ニ頗ル多キ自殺方法ニシテ大抵刀劍、剃刀、
 小刀、庖丁ノ如キ銳利ノ及器ヲ用ニ自殺者ノ切傷スル部位ハ多クハ前
 頸部ナルモ亦日本ニ在リテハ腹部ヲ切創スル者アリ歐洲ニ在リテハ
 關節ノ屈曲側ヲ切創スルモノ多シト云フ
 頸部ヲ切傷スルニ自殺者ハ通常其右手ニ刀ヲ採ルヲ以テ刀ヲ頸ノ左

側ニ接シ左上方ヨリ斜メニ右下方ニ向テ前頸部ヲ切ルヲ常トス(左手ヲ使用スル慣習ノ人ニ在リテハ之ニ反スヘシ)頸ノ側部ヲ切ルハ稀レナリ切創ハ時ニ喉頭或ハ其以下ニ在ルコトアリト雖大抵ハ喉頭ト舌骨ノ間ニノ甲狀舌骨膜ヲ切割シ且會厭軟骨モ一部分或ハ全部ヲ切斷スルコトアリ側方ニ長キモノハ頸ノ大血管ヲ切開シ深キモノハ頸椎ニ達シ或ハ其一部ヲ切傷ス創口ハ唯單一ノモノアリ或ハ外部又ハ内部ニ於テ數創ヲ見ルコトアリ若シ頸部ノ切傷ニ由テ速カニ死ヲ得サルキハ或ハ數歩ヲ進ミテ他ノ方法ニ依リ以テ死ヲ遂クルモノアリ頸部ノ切創ニ由リ致命スルハ出血ト損傷靜脈ニ空氣ヲ吸入スルト氣道ニ血液ヲ吸入スルニ由ル窒息ニ又後日ニハ會厭軟骨ノ損傷ニ因テ食物ヲ氣道ニ吸入スルニ由リ或ハ聲帶水腫ニ由ルコトアリ他殺死體ノ頸部ニ切創ヲ加ヘ以テ自殺ニ擬スルコト往々之レアリ此鑑定ハ大ニ注意ヲ要スル者ニ其切創深ク脊柱ヲ切傷スルカ或ハ之ヲ全斷スルカ如キ又數多ノ切傷ニ兼テ頸ノ大血管ヲ損傷スルカ如キ

モノハ大抵他殺ナルモ手指ニ毫モ血痕ナキカ或ハ手指ニ多少ノ切創アリテ抵抗ノ徵ナルカ如キモノハ直チニ以テ他殺ト爲ス可ラス之レ他殺ノ際其手ヲ縛スルカ或ハ熟睡者又ハ失神者ヲ他殺スル場合ニハ毫モ其手指ニ血痕ヲ殘スナク又自殺者モ自殺ノ際心神ノ窘迫ヨリ手指顫振シテ自ラ其手指ニ負傷スルコトアレハナリ過失切創ニ因ル自傷死ハ甚タ稀ニ未タ聞見セサルモ(デットリッヒ氏ハ會テ硝子板ヲ擔フ者偶然倒ルノ際硝子破片ヲ以テ肋間ヲ切傷シ肋間動脈損傷ノ爲メ内出血ニ因リ斃レタル者ヲ實驗セリト云フ)歐洲人ノ關節動脈ヲ切傷シテ自殺ヲ謀ル者ハ大抵肘關節及ヒ手關節ノ屈曲側ヲ横ニ截切一側或ハ兩側共ニスト云フ之レ亦我邦ニ在リテハ未タ聞見セサル自殺法ナリ

割創ニ因ル自殺即チ斧又ハ鉞ヲ以テ自ラ其頭ヲ切割シテ死ヲ謀ルハ大ニ稀ナリ

乙。刺創ニ因ル自殺ハ他殺ヨリ罕ナリ其部位ハ日本ニ在リテハ自殺他

殺共ニ頸部ニ多ク又心臓部及ヒ胃部ニ多シ殊ニ出刃包丁或ハ小刀ヲ以テ頸ヲ刺ス者ハ予ノ屢實見スル處ニ速カニ醫治ヲ施スルハ往々救助シ得ルヲアリ刺創ノ部位ハ自殺他殺ヲ鑑別スルノ要徴トナスニ足ラサルモ自殺者胸部又ハ腹部ヲ刺ス際ハ多クハ其衣服ヲ開キ此部ヲ露出スルモ他殺ニ在リテハ固トヨリ然ラス故ニ衣服ニ刀痕ヲ止ムルヲ多シ又外創口單一ニ内部ニハ數創管アル者及ヒ一ノ大ナル刺創ノ外其近傍ニ小ナル刺創數箇現存スルハ自殺ノ徵ナリ精神病者ニ在リテハ自殺ノ際諸所ニ刺創ヲ爲スコトアリ曾テ「デットリッヒ氏」ハ「マシカ」氏ト共ニ實見セシ自殺者ノ體中ニ二百八十五ノ刺創アリシト云フ「丙」銃創ニ因ル自殺ハ日本ニ在リテハ從來一般ニ甚タ多カラサルモ軍人社會ニハ稍ヤ多キカ如シ歐洲ニ在リテハ此自殺者甚タ多シト聞ク用器ハ拳銃最モ多ク稀ニハ無條銃ヲ用ユルコトアリ他殺銃創ハ大抵多少ノ射擊距離ヲ有スルヲ以テ遠距離銃創ノ性状ヲ呈シ自殺ニ係ル者ハ總テ近距離銃創ノ徵候ヲ呈ス之レ自他殺ヲ鑑別スルノ最要點ナ

リ自ラ射擊スル部位ハ頭部殊ニ前額部、額部、口腔、顎下、心臓部、胃部等ニ在リト雖自他殺ノ鑑別上價値ナキカ如シ此自殺者モ亦衣服ヲ披キテ射擊部ヲ裸露シ或ハ唯襦衣一枚ヲ被ムル者多シ之レ鑑別上注意スヘキ項ナリ其他硝藥ニ由テ手ノ黒染シ或ハ火傷セルカ如キモ自殺ノ斷定上有價ノ徵憑トス

「丁」落墜死モ亦歐洲ニ在リテハ自殺ノ目的ニ出ルモノ多シト聞クモ日本ニ在リテハ大抵過失ニ屬シ自殺ノ目的ニ高處斷岸等ヨリ飛下スルモノ甚タ稀レナリ落墜死體ノ損傷ハ總テ鈍器ニ因ル損傷ノ種類ナルモ此損傷及ヒ解剖所見ニ因テハ固トヨリ自殺他殺又ハ過失傷死ナルカヲ鑑別スルヲ得ス故ニ此鑑定ハ唯事實ノ調査ニ由ルノ外ナキモノトス

「戊」轢死中往々自殺者アルハ唯汽車ノ轢轢ニ因ル者ノミニノ馬車荷車等ノ轢轢ニ因ル者ハ大抵過失傷死ニ屬ス汽車ノ轢過ニ因ルモノハ損傷極テ猛烈ニシテ或ハ身體全ク斷離シ頭足處ヲ異ニスル者アリ自殺者

ハ其頸ヲ鉄軌ニ乗セ以テ流車ノ來ルヲ待ツ者多シト雖單ニ死體ノ發
顯ニ由テ自殺ナルカ又ハ過失ニ出ルカヲ斷定シ得ルハ頗ル稀レナリ
但他ノ方法ニ因テ殺シタル死體ヲ軌道ニ置キ流車ニ輾轢セシメテ轢
死ニ擬シ以テ犯罪ヲ隱匿セントスル者アリ最モ注意スヘシ

チトトリッヒ氏最近ノ一實驗ヲ報シテ曰一男子流車ノ爲メ其頸ヲ轢過
セラレテ死セシ者アリ此死體ニ就テ自殺ナルカ將タ車掌ノ不注意
ヨリ發シタル過失傷死ナルカノ疑問ヲ生セリ同氏此死體ヲ檢セシ
ニ頸ノ損傷ノ外又一手ノ挫碎セルヲ見タリ之レ其頸ヲ鐵軌ニ枕ス
ル際壓迫ヲ防ク爲メ其手ヲ敷キタル者ト推測セシヲ以テ之ヲ自殺
ト鑑定セリト云フ

予曾テ新橋品川間ノ鐵道第三號橋ノ前ニ於テ一轢死體ヲ檢視セリ
其損傷ハ極メテ慘酷ニノ頭蓋ノ全部甚シク破碎シ骨質ハ數多ノ小
破片トナリテ遠ク飛散シ頭皮ハ不正ナル數多ノ瓣狀ヲナシテ剝離
開放シ前頭骨ノ一部ハ凡ソ十間ヲ距ル點ニ發見セリ如此損傷ナル

ヲ以テ自殺ナルカ將タ過失傷死ナルカハ鑑定ニ由シナカリキ其他
轢死體ハ二三ノ實驗アルモ特別ノ發顯ナキヲ以テ之ヲ略ス

死體ニ見ル所ノ損傷ハ致命傷ニシテ且他人ノ之ヲ成セシモノタルコト
明了ナルカハ則チ左ノ疑問ヲ生ス

- 一。該損傷ハ其普通ノ性質ニ於テ致命セシムヘキカヲ將タ
- 二。被傷者ノ固有ノ性質又ハ特別ノ狀態ノ爲メ致命セシメタルカ
- 三。之レナ

一ノ問題ニ答フルニハ損傷ノ解剖的及ヒ生理的關係ヲ調査シ直達致
命原因トノ既ニ記載シタル結果ヲ有スル損傷ナルカハ則チ其旨ヲ陳
述スヘシ

二ノ問題ニ答フルニハ死體ノ解剖的發見ニ據ラサル可ラス例之ハ頭
蓋骨ノ甚タ非薄ナル者(固有性質)ノ如キハ比較的輕易ノ暴力ニ由テ致
命性ノ頭蓋骨折ヲ生シ胸部ニ動脈瘤ヲ有スル者又ハ喇叭管妊娠ノ婦
人或ハ肝臟ノ脂肪變性ニ罹ル者(特別狀態)ノ如キハ輕易ノ暴力ヲ胸腹

部ニ受クルモ破裂ト内出血トヲ來スカ如シ之レ其暴力ハ普通致命性ヲ有セサルモ固有性質又ハ特別狀態ニ由テ致命セシメタル者トス
其他左ノ三問ヲ生スヘシ

- 一。損傷ヲ成ス際ノ偶然ナル狀態ノ爲メ致命セシカ
- 二。將タ該損傷ニ因テ誘起セシ偶然ノ介達原因ニ由テ致命セシカ
- 三。或ハ迅速相當ノ救助法ヲ加エハ救助シ得ベキモノナルカ之レナリ

(三)及(四)ノ問題ハ介達性原因殊ニ創傷傳染病ニ關スルヲ以テ其發生ノ有無ニ據リテ之カ答解ヲナスヘシト雖被傷後爲ス所ノ療法及ヒ處置如何ニモ注意スヘシ(五)ノ問題ハ淺表ノ創口ヨリ發スル出血ノ如キ場合ニ限リ内出血ノ如キハ大抵救助ス可ラサル者トス

血痕検査

兇行ノ場處ニ於ル諸般ノ痕跡ヲ精細ニ調査スルハ兇行時ノ事實ヲ追

索スルニ頗ル重要ノ件ニ殊ニ検査ヲ終ルマテ其原狀態ヲ變更セサルヲ必要トス明治二十七年二月二十三日警視廳訓令甲第六號檢視規程第二條ニ曰變死傷者アリタルキハ直ニ巡查ヲシテ見張ヲナサシメ其屍体及場所ノ狀況等總テ原態ヲ存シ検査ノ終了ニ至ルマテ變更セサルヲ要ス若シ訴ニ依リ又ハ報告ニ依リテ變死傷者アルヲ知リタルキハ訴人又ハ報知者ニ命シ其原態ヲ存セシムヘシト之レ第一ニ現場ニ到リシ人ノ填重ニシテ而モ機敏ナルニ非サレハ能ハス通常人ハ大抵其發見ニ驚キ原狀ヲ變スルコト多キモノナリ

兇行ノ場所ニ新鮮ノ血痕アリテ肉眼血液ナルヲ認知セハ其散點ノ模様形狀及ヒ死體トノ距離ヲ調査シ血液ニ染ミタル手足ノ痕跡及ヒ器具ノ壓痕等ハ其位置并ニ死體トノ距離ヲ精査シ且其形狀ヲ模寫シ或ハ寫眞器ヲ以テ採影スヘシ而シテ此諸痕跡ハ被傷者ニ基ツクカ將タ他人ニ原ツクカヲ考按スルヲ以テ第一着ノ要旨トス之レ死體發見當時ノ現狀ヲ變更セザルヲ最モ必要トナス所以ナリ

血痕検査